始

方塔集

下

67-418

帝國圖書館藏

萬葉集 下編

古今相聞往來歌類上

相聞旋頭歌

二三五三 新室の壁草刈りに御座し給はね、草の如依合ふ少女は君が隨意に

二三五四 新室を踏み鎭む兒が手玉鳴らすも、玉の如照せる君を内へと申せ

二三五五 長谷の五百槻が下に吾が隱せる妻、茜さし照れる月夜に人見てむかも

二三五六 健男の思ひ亂びて隱せる其妻、天地に通り照るとも顯はれめやも

二三五七 息の緒に吾が思ふ妹は早も死ねやも、生けりとも吾に依るべしと人の言はなくに

二三五八 高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける、明日の夜し來なむと言はゞ取り置きて待たむ

二三五九 朝戸出の君が足結を潤す露原、早く起きて出でつゝ吾も裳の裾潤れな

二三五八　何せむに命をもとな永く欲りせむ、生けりとも吾が思ふ妹に安く逢はなくに
二三五九　息の緒に吾は思へど人目多みこそ、吹く風にあらば屢逢ふべきものを
二三六〇　人の親の少女を居ゑて守山邊から、朝々通ひし君が來ねば悲しも
二三六一　天なる一棚橋何か障らむ、若草の妻所と云はゞ足結し發たむ
二三六二　山城の久世の若子が欲しといふ吾を、大方に吾を欲しと云ふ山城の久世

右の十二首は柿本朝臣人麿之歌集に出づ、

二三六三　崗の岬打曲たる道を人な通ひそ、在りつゝも君が來まさむ避道にせむ
二三六四　玉垂の小簾の隙に入り通ひ來ね、垂乳根の母が間はさば風と申さむ
二三六五　内日さす宮路に逢ひし人妻故に、玉の緒の思ひ亂れて寢る夜しぞ多き
二三六六　眞十鏡見しがと思ふ妹に逢はぬかも、玉の緒の絶えたる戀の繁き此頃
二三六七　海原の路に乘れゝや吾が戀ひ居りて、大舟の搖蕩にあるらむ人の兒ゆゑに

右の五首は古歌集中に出づ、

正述心緒一

二三六八　垂乳根の母が手放れ如是ばかり術なき事は未だせなくに
二三六九　他人の寢る味眠は寢ずて愛しきやし君が目すらを欲りて嘆くも

二三七〇　戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉桙の路行人に事も告げなき
二三七一　心には千遍思へど人に言はず吾が戀ふ妹を見む由もがも
二三七二　斯くばかり戀ひむものぞと知らませば遠く見つべくありけるものを
二三七三　何時はしも戀ひぬ時とはあらねども夕片まけて戀ふは術なし
二三七四　斯くのみし戀ひし渡れば玉切生命も知らず歳は經につゝ
二三七五　吾ゆ後生れむ人は吾が如く戀する道に逢ひこすな努
二三七六　健男の現心も吾は無し夜晝といはず戀ひし渡れば
二三七七　何せむに命繼ぎけむ吾妹子に戀ひざる前に死なましものを
二三七八　縱しゑやし來まさぬ君を何せむに厭はず吾は戀ひつゝ居らむ
二三七九　見渡の近き渡を徘徊り今や來ますと戀ひつゝぞ居る
二三八〇　愛しきやし誰が障ふれかも玉桙の道見忘れて君が來まさぬ
二三八一　君が目の見まく欲しけみ此二夜千歳の如も吾が戀ふるかも
二三八二　内日刺す宮道を人は滿ち行けど吾が思ふ君は唯一人のみ
二三八三　世の中は常斯くのみと思へども吾は忘れず猶戀ひにけり
二三八四　我が背子は幸く座すと度多數く我に告げつゝ使人も來ぬかも

二三八五　麁玉の年は經れども吾が戀ふる跡なき戀の止まぬ怪しも
二三八六　磐石すら行き通るべき健男も戀ちふ事は後悔いにけり
二三八七　日暮れなば人知りぬべみ今日の日の千歳の如くありこせぬかも
二三八八　立ちて居て方便も知らず思へども妹に告げねば間使も來ず
二三八九　烏玉の此夜な明けそ朱引く朝行く君を待てば苦しも
二三九〇　戀するに死にするものにあらませば我身は千度死に反らまし
二三九一　烏玉の昨日の夕見しものを今日の朝に戀ふべきものか
二三九二　却々に見ざりしよりは相見ては戀しき心愈思ほゆ
二三九三　玉桙の道行かずしてあらませば惻隱かゝる戀には逢はじ
二三九四　朝影に吾が身は成りぬ玉蜻髣髴に見えて去にし子故に
二三九五　行けど〳〵逢はぬ妹故久方の天の露霜に沾れにけるかも
二三九六　邂逅に吾が見し人を如何ならむ依縁を以ちてか又一目見む
二三九七　暫くも見ねば戀しき吾妹子を日に日に來れば言の繁けく
二三九八　玉切來世まで定めて恃めたる君に依りてし言の繁けく
二三九九　朱引く膚も觸れずて寢たれども異しき心を我が思はなくに

二四〇〇　いで如何に極太甚に利心の失するまで思ふ戀ふらくの故
二四〇一　戀ひ死なば戀ひも死ねとや我妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ
二四〇二　妹が邊遠くし見れば怪しくも吾はぞ戀ふる逢ふ由を無み
二四〇三　山城の久世の河原に身祓して齋ふ命は妹が爲めこそ
二四〇四　思ひ依り見依りしものを何すとか一日隔つを忘るると思はむ
二四〇五　垣穂なす人は言へども高麗錦紐解き開けし君ならなくに
二四〇六　高麗錦紐解き開けて夕だに知らざる命戀ひつゝかあらむ
二四〇七　百積の船榜ぎ入るゝ八占指し母は問ふとも其名は告らじ
二四〇八　眉根搔き嚏ひ紐解け待てりやも何時かも見むと思ひし我君
二四〇九　君に戀ひうらぶれ居れば怪しくも我が下紐の結ふ手俺ゆしも
二四一〇　璞の年は果つれど敷布の袖交へし兒を忘れて思へや
二四一一　白妙の袖を端見し故に斯かる戀をも吾はするかも
二四一二　我妹子に戀ひ術なかり夢に見むと吾は思へど寢ねらえなくに
二四一三　故も無く我が下紐ぞ今解くる人になし知らせ直に逢ふまで
二四一四　戀ふる事意遣り兼ね出で行けば山も川をも知らず來にけり

右の四十七首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

二五一七 垂乳根の母に障らば徒に汝も吾も事成るべしや
二五一八 吾妹子が吾を送ると白細布の袖漬づまでに哭きし思ほゆ
二五一九 奥山の眞木の板戸を押し開き縱ゑや出で來ね後は如何にせむ
二五二〇 刈薦の一重を敷きてさ眠れども君とし宿れば寒けくもなし
二五二一 杜若丹づらふ君を率爾に思ひ出でつゝ嘆きつるかも
二五二二 恨みむと思ひ艱難みてありしかば外のみぞ見し心は思へど
二五二三 さ丹づらふ色には出でじ少くも心の中に吾が思はなくに
二五二四 吾が背子に直に逢はゞこそ名は立ため言の通ふに何か其故
二五二五 勤に片思すれか此頃の吾が心神の生けるともなき
二五二六 待つらむに到らば妹が懽しみと笑まむ姿を行きて早見む
二五二七 誰ぞ此の吾が宿に來喚ぶ垂乳根の母に嘖ばえ物思ふ我を
二五二八 さ寢ぬ夜は千夜もありとも我が背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ
二五二九 家人は道も頻繁に通へども吾が待つ妹が使來ぬかも
二五三〇 璞の寸戸が竹垣編目よも妹し見えなば吾戀ひめやも

二五三一 吾が背子が其名告らじとたまきはる命は棄てつ忘れ賜ふな
二五三二 大方は誰が見むとかも黑玉の我が黑髮を靡して居らむ
二五三三 面忘れ如何なる人の爲るものぞ吾は爲かねつ繼ぎてし念へば
二五三四 相思はぬ人の故にか璞の年の緒長く吾が戀ひ居らむ
二五三五 大方の行爲とは念はじ吾故に人に言痛く云はれしものを
二五三六 息の緒に妹をし思へば年月の往くらむ辨別も思ほえぬかも
二五三七 垂乳根の母に知らえず吾が持たる心は縱しゑ君が隨意に
二五三八 獨寢と薦朽ちめやも綾席緒になるまでに君をし待たむ
二五三九 相見ては千歲や去ぬる否をかも我や然か念ふ君待ちがてに
二五四〇 振分の髮を短み春草を髮に綰くらむ妹をしぞ思ふ
二五四一 徘徊り往箕の里に妹を置きて心空なり土は蹈めども
二五四二 若草の新手枕を纏き初めて夜をや隔てむ憎くあらなくに
二五四三 吾が戀ひし事も語らひ慰めむ君が使を待ちやかねてむ
二五四四 現には逢ふ緣もなし夢にだに間無く見え君戀に死ぬべし
二五四五 誰そ彼と問はゞ答へむ術を無み君が使を還しつるかも

二五四六 思はぬに到らば妹が歡しみと笑まむ眉引思ほゆるかも
二五四七 斯くばかり戀ひむものぞと思はねば妹が袂を纏かぬ夜もありき
二五四八 斯くだにも吾は戀ひなむ玉桙の君が使を待ちやかねてむ
二五四九 妹に戀ひ吾が泣く涕敷妙の枕通りて袖さへ沾れぬ
二五五〇 立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳裾引き去にし姿を
二五五一 思ふにし餘りにしかば術をなみ出でゝぞ行きし其門を見に
二五五二 情には千遍頻々に思へども使を遣らむ術の知らなく
二五五三 夢のみに見るすら幾許戀ふる吾は現に見てば益して如何にあらむ
二五五四 相見ては面隱さるゝもの故に繼ぎて見まくの欲しき君かも
二五五五 朝戸遣りを早くな開けそ味澤ふ愛し君が今夜來ませり
二五五六 玉垂の小箕の垂簾を引き上げて寢はなさずとも君は通はせ
二五五七 垂乳根の母に申さば君も我も逢ふとは無しに年ぞ經ぬべき
二五五八 愛しと思へりけらし莫忘れと結びし紐の解くらく念へば
二五五九 昨日見て今日こそ隔て吾妹子が幾許繼ぎて見まくし欲しも
二五六〇 人も無き古りにし鄕に有る人を愍くや君が戀に死なせむ

二五六一 人言の繁き間守りて逢へりとも將た吾が上に言の繁けむ
二五六二 里人の言緣妻を荒垣の外にや吾が見む惡からなくに
二五六三 人目守る君がまに〳〵余さへに夙く起きつゝ裳の裾沾れぬ
二五六四 ぬば玉の妹が黑髮今夜もか吾が無き床に靡らして宿らむ
二五六五 花細し葦垣越しに唯一目相見し兒故千遍嘆きつ
二五六六 色に出でゝ戀ひば人見て知りぬべみ心の中の隱妻はも
二五六七 相見ては戀慰むと人は謂へど見て後にもぞ戀ひまさりける
二五六八 大凡に吾し思はゞ斯くばかり難き御門を退り出めやも
二五六九 思ふらむ其人なれや烏玉の每夜に君が夢にし見ゆる
二五七〇 如是のみに戀ひば死ぬべみ垂乳根の母にも告げつ止まず通はせ
二五七一 大夫は友の騷に慰むる心もあらむ我ぞ苦しき
二五七二 僞も似付きてぞする何時よりか見ぬ人戀ふに人の死にする
二五七三 心さへ奉れる君に何しかも言はずて言ひしと吾が食言はむ
二五七四 面忘れだにも得爲むやと手握りて打てど塞らず戀の奴は
二五七五 愛しき君見むとこそ左手の弓執る方の眉根搔きつれ

二五七六　人間守り蘆垣越しに吾妹子を相見し故に言ぞ沙汰多き
二五七七　今だにも目な乏しめそ相見ずて戀ひむ年月久しけまくに
二五七八　朝寢髪吾は梳らじ愛しき君が手枕觸りてしものを
二五七九　早行きて何時しか君を相見むと思ひし心今ぞ和ぎぬる
二五八〇　面貌の忘れてあらばあぢきなく男じものや戀ひつゝ居らむ
二五八一　言に云へば耳に容易し尠くも心の中に我が念はなくに
二五八二　あぢきなく何の戲言今更に童子言する老人にして
二五八三　相見ずて幾何久もあらなくに年月の如思ほゆるかも
二五八四　大夫と思へる我を如是ばかり戀せしむるは苛くぞありける
二五八五　如是しつゝ吾が待つ印あらぬかも世の人皆の常ならなくに
二五八六　人言を繁みと君に玉梓の使も遣らず忘ると思ふな
二五八七　大原の古りにし里に妹を置きて我寢ぬかねつ夢に見えこそ
二五八八　夕されば君來まさむと待ちし夜の名殘ぞ今も寢ねがてにする
二五八九　相思はず君は在るらし黑玉の夢にも見えず誓約ひて寢れど
二五九〇　石根踏み夜道は行かじと思へれど妹に依りては忍びかねつも

二五九一　人言の繁き間守ると逢はずあらば終にや兒等が面忘れなむ
二五九二　戀ひ死なむ後は何爲む吾が命の生けらむ日こそ見まく欲りすれ
二五九三　敷細の枕動きて寢ねらえず物思ふ今夜早も明けぬかも
二五九四　行かぬ吾を來むとか夜も門閉さず柯怜吾妹子待ちつゝあらむ
二五九五　夢にだに何かも見えぬ見ゆれども吾かも迷ふ戀の繁きに
二五九六　慰むる心は無しに如是のみし戀ひや渡らむ月に日に日に
二五九七　如何にして忘れむものぞ吾妹子に戀は益れど忘らえなくに
二五九八　遠くあれど君にぞ戀ふる玉梓の里人皆に吾戀ひめやも
二五九九　驗なき戀をもするか暮されば人の手纏きて寢なむ兒故に
二六〇〇　百世しも千代しも生きてあらめやも吾が念ふ妹を置きて嘆かむ
二六〇一　現にも夢にも吾は思はずき舊りたる君に此處に會はむとは
二六〇二　黑髮の白髮までと結びてし心一つを今解かめやも
二六〇三　心をし君に奉ると思へれば縱し此頃は戀ひつゝをあらむ
二六〇四　思ひ出でゝ哭には泣くとも灼然人の知るべく嘆かすな謹
二六〇五　玉梓の道行き觸りに思はぬに妹を相見て戀ふる頃かも

二六〇六 人目多み常斯くのみし候はゞ何れの時か吾が戀ひざらむ
二六〇七 敷妙の衣手離れて吾を待つとあるらむ兒等は面影に見ゆ
二六〇八 妹が袖別れし日より白細の衣片敷き戀ひつゝぞ寢る
二六〇九 白妙の袖は紕ひぬ我妹子が家の邊を止まず振りしに
二六一〇 夜干玉の吾が黑髮を引き靡らし亂れて吾は戀ひ渡るかも
二六一一 今更に君が手枕纏き寢めや吾が紐の緒の解けつゝもとな
二六一二 白細の袖觸れてより吾が背子に吾が戀ふらくは止む時もなし
二六一三 夕トにも占にも告れる今夜だに來まさぬ君を何時とか待たむ
二六一四 眉根搔き內心不審しみ思へるに舊好人を相見つるかも

或本の歌に曰く

眉根搔き誰をか見むと思ひつゝ日長く戀ひし妹に逢へるかも

一書の歌に曰く

眉根搔きしたいぶかしみ念へりし妹が容儀を今日見つるかも
二六一五 敷妙の手枕纏きて妹と吾寢る夜はなくて年ぞ經にける
二六一六 奧山の眞木の板戶を音速み妹があたりの霜の上に宿ぬ

二六一七 足引の山櫻戶を開き置きて吾が待つ君を誰か留むる
二六一八 月夜好み妹に會はむと直路から吾は來つれど夜ぞ更けにける

寄レ物陳レ思

二四一五 少女等を袖振山の瑞垣の久しき時ゆ思ひ來し吾は
二四一六 千早振る神に祈れる命をば誰が爲にか長く欲りする
二四一七 石上布留の神杉神さびて戀をも我は更にするかも
二四一八 如何ならむ名負へる神は手向せば吾が念ふ妹を夢にだに見む
二四一九 天地と言ふ名の絕えてあらばこそ汝と我と逢ふこと止まめ
二四二〇 月見れば國は同じぞ山隔り愛し妹が隔りたるかも
二四二一 參路は石踏む山の無くもがも吾が待つ君が馬躓くに
二四二二 石根蹈み隔れる山はあらねども逢はぬ日數多み戀ひ渡るかも
二四二三 路の後深津島山暫くも君が目見ねば苦しかりけり
二四二四 紐鏡能登香の山は誰故ぞ君來ませるに紐解けず寢む
二四二五 山科の木幡の山を馬はあれど徒步ゆ吾が來し汝を思ひかね
二四二六 遠山に霞棚引き益遠に妹が目見ねば吾戀ひにけり

二四二七　此川の瀬々に敷く浪頻々に妹が心に乘りにけるかも
二四二八　千早人宇治の渡の速き瀬に逢はずありとも後は我が妻
二四二九　愛しきやし逢はぬ兒故に徒にこの川の瀬に裳の裾潤れぬ
二四三〇　此川に水泡逆捲き行く水の事反さずぞ思ひ始めてし
二四三一　鴨川は後瀬靜けし後は逢はむ妹には我は今ならずとも
二四三二　言に出て言はゞ忌憚しみ山川の激つ心を塞かへたりけり
二四三三　水の上に數書く如き吾が命を妹に逢はむと祈誓ひつるかも
二四三四　荒磯越え外往く波の外心吾は思はじ戀ひて死ぬとも
二四三五　淡海の海沖つ白浪知らねども妹所と言へば直に越え來ぬ
二四三六　大船の香取の海に碇下し如何なる人か物念はざらむ
二四三七　沖つ藻を隱さふ浪の五百重波千重頻々に戀ひ渡るかも
二四三八　人言のしげけき吾妹繩手引く海ゆ益りて深くしぞ念ふ
二四三九　淡海の海沖つ島山奥深けて吾が思ふ妹が言の繁けく
二四四〇　近江の海沖撈ぐ船に碇下し藏れて君が言待つ吾ぞ
二四四一　隱沼の心裏よ戀ふれば術を無み妹が名告りつ忌むべきものを

二四四二　大地も採らば盡きめど世の中に盡き得ぬものは戀にしありけり
二四四三　隱處の澤泉なる石根をも通してぞ思ふ吾が戀ふらくは
二四四四　白檀弓石邊の山の常磐なる命なれやも戀ひつゝ居らむ
二四四五　淡海の海沈着く白玉知らずして戀ひつるよりは今ぞ益れる
二四四六　白玉を纏きてぞ持たる今よりは吾が玉にせむ知れる時だに
二四四七　白玉を手に纏きしより忘れじと思ふ心は何時かはらむ
二四四八　白玉の間開けつゝ貫ける緒も縛りよすれば後逢ふものを
二四四九　香具山に雲居棚引き鬱しく相見し兒等を後戀ひむかも
二四五〇　雲間よりさ渡る月の鬱しく相見し兒等を見む由もがも
二四五一　天雲の依合遠み逢はずとも異し手枕吾纏かめやも
二四五二　雲だにも著くし立たば意遣り見つゝし居らむ直に逢ふまで
二四五三　春楊葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ念ふ
二四五四　春日山雲居隱りて遠けども家は思はず君をしぞ念ふ
二四五五　我が故に言はれし妹は高山の峯の朝霧過ぎにけむかも
二四五六　烏玉の黑髮山の山菅に小雨降り重き頻々思ほゆ

二四五七 大野らに小雨降り重く木の下に時々依り來我が思ふ人
二四五八 朝霜の消なば消ぬべく思ひつゝ待つに此夜を明しつるかも
二四五九 吾が背兒が濱吹く風の彌急に急事成さば益逢はざらむ
二四六〇 遠妻の振仰け見つゝ偲ぶらむ此月の面に雲な棚引き
二四六一 山の端に照り出る月の端々に妹をぞ見つる後戀ひむかも
二四六二 我妹子し吾を思はゞ眞鏡照り出る月の影に見え來ね
二四六三 久方の天照る月も隱ろひぬ何になぞへて妹を偲ばむ
二四六四 若月の清にも見えず雲隱り見まくぞ欲しきうたて此頃
二四六五 我が背子に吾が戀ひ居れば吾が宿の草さへ思ひ末枯れにけり
二四六六 淺茅原小野に標繩結ひ空言を何なりと言ひて君をし待たむ
二四六七 路の邊の草深百合の後に云ふ妹が命を我知らめやも
二四六八 湖葦に交れる草の知草の人皆知りぬ吾が下思
二四六九 山蔦苣の白露重み愁憐るゝ心を深み吾が戀止まず
二四七〇 湖に根延ふ小菅の深切に君に戀ひつゝありがてぬかも
二四七一 山城の泉の小菅押靡みに妹を心に吾が思はなくに

二四七二 美酒の三室の山の石穗菅惻隱は片思ぞする
二四七三 菅の根の惻隱君が結びてし我が紐の緒を解く人はあらじ
二四七四 山菅の亂れ戀のみ爲しめつゝ逢はぬ妹かも年は經につゝ
二四七五 我が宿の軒の齒朶草生ひたれど戀忘れ草見れど未だ生ひず
二四七六 打つ田にも稗は數多にありといへど擇えし我ぞ夜一人宿る
二四七七 足引の山の山菅深切に君し結ばゞ逢はざらめやも
二四七八 秋柏潤和川邊の細竹の群の人に忍べば君に耐へなく
二四七九 核葛後は逢はむと夢のみに祈誓ひ渡りて年は經につゝ
二四八〇 路の邊の壹師の花の灼然人皆知りぬ我が戀ふる妻
二四八一 大野らに方便も知らず標繩結ひてありぞかねつる吾が戀ふらくは
二四八二 水底に生ふる玉藻の打靡き心を依せて戀ふるこの頃
二四八三 敷栲の衣手離れて玉藻なす靡きか寢らむ吾を待ち難に
二四八四 君來ずは形見にせよと我と二人植ゑし松の木君を待ち出ね
二四八五 袖振るが見ゆべき限り吾はあれど其松が枝に隱りたるらむ
二四八六 血沼の海の濱邊の小松根深めて吾が戀ひ渡る人の子故に

或本の歌に云ふ

血沼の海の潮干の小松ねもころに戀ひやわたらむ人の兒故に

二四八七 奈良山の小松が末の何ぞは我が思ふ妹に逢はず止みなむ

二四八八 磯の上の立てる回香樹ねもころに何で深めて思ひ始めけむ

二四八九 橘の下に我立ち下枝取り成りぬや君と問ひし兒等はも

二四九〇 天雲に翼打ち附けて飛ぶ鶴のたづ〳〵しかも君し座さねば

二四九一 妹に戀ひ寢ねぬ朝明に鶯鷰の此處よ飛び渡る妹が使か

二四九二 思ふにし餘りにしかば鴉鳥の足沾れ來しを人見けむかも

二四九三 高山の峯行く鹿猪の友を多み袖振らず來ぬ忘るると念ふな

二四九四 大船に眞楫繁貫き搖ぐ間だにねもころ戀し年にあらば如何に

二四九五 垂乳根の母が養ふ蠶の眉隱り隱れる妹を見むよしもがも

二四九六 貴人の鬚髮結へる染木綿の染みにし心我忘れめや

二四九七 隼人の名に負ふ夜聲灼然吾が名は告りつ妻と恃ませ

二四九八 釵刀諸刃の利きに足踏みて死にも死なむ君に依りてば

二四九九 我妹子に戀ひし渡れば釵刀名の惜しけくも思ひかねつも

二五〇〇 朝づく日向ふ黃楊櫛舊りぬれど何しか君が見るに飽かざらむ

二五〇一 里遠み戀ひうらぶれぬ眞十鏡床の邊去らず夢に見えこそ

二五〇二 眞十鏡手に取り持ちて朝々見れども君は飽く事もなし

二五〇三 夕來れば床の邊去らぬ黃楊枕何しか汝が主待ち難き

二五〇四 解衣の戀ひ亂れつゝ浮草の浮きても吾は戀ひ渡るかも

二五〇五 梓弓引きて許さずあらませば斯かる戀には遇はざらまし乎

二五〇六 言靈を八十の衢に夕占問ふ占正に告れ妹に逢はむ由

二五〇七 玉桙の路往き占に占へば妹に逢はむと我に告りてき

右の九十三首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

二六一九 朝影に吾が身はなりぬ唐衣裾の合はずて久しくなれば

二六一〇 解衣の思ひ亂れて戀ふれども何ぞ汝が故と問ふ人もなし

二六一一 摺衣著りと夢見つ現には誰しの人の言か繁けむ

二六一二 志賀の海人の鹽燒衣穢れぬれど戀云ふものは忘れかねつも

二六一三 紅の八鹽の衣朝旦穢るとはすれどいやめづらしも

二六一四 紅の濃染の衣色深く染みにしかばか忘れかねつる

二六二五　逢はなくに夕占を問ふと幣に置くに吾が衣手は又ぞ續ぐべき
二六二六　古衣打棄てし人は秋風の立ち來る時に物念ふものぞ
二六二七　はね蘰今する妹がうら若み笑みゝ怒りみ着けし紐解く
二六二八　古の倭文機帶を結び垂れ誰ちゝふ人も君には益さじ

一書の歌に云ふ

古の狹織の帶を結び垂れ誰しの人も君には益さじ

二六二九　逢はずとも吾は怨みじ此の枕吾と思ひて纏きてさ宿ませ
二六三〇　結へる紐解きし日遠み敷細の吾が木枕に蘿生しにけり
二六三一　射干玉の黑髮敷きて長き夜を手枕の上に妹待つらむか
二六三二　眞十鏡直にし妹を相見ずは我が戀止まじ年は經ぬとも
二六三三　眞十鏡手に取り持ちて朝旦見む時さへや戀の繁けむ
二六三四　里遠み戀ひわびにけり眞十鏡面影去らず夢に見えこそ

右の一首は上に柿本朝臣人麿之歌集中に見えたり、但句句相換れるを以て、故に玆に載す、

二六三五　釼刀身に佩き添ふる大夫や戀云ふものを忍びかねてむ
二六三六　釼刀諸刃の上に行き觸れて殺せかも死なむ戀ひつゝあらずは

二六三七　嗤かひ鼻をぞ嚔つる釼刀身に添ふ妹が思ひけらしも
二六三八　梓弓末の腹野に鳥獵する君が弓弦の絶えむと念へや
二六三九　葛城の襲津彦眞弓荒木にも憑めや君が吾が名告りけむ
二六四〇　梓弓引きみ弛べみ來ずは來ず來ばそ其を何ど來ずは來ば其を
二六四一　時守の打ち鳴す鼓數み見れど時には成りぬ逢はなくも怪し
二六四二　燈火の影に燿ふ虛蟬の妹が笑まひし面影に見ゆ
二六四三　玉桙の道行き疲れ稻莚敷きても君を見むよしもがも
二六四四　小墾田の坂田の橋の壞れなば桁より行かむ勿戀ひそ我妹
二六四五　宮材引く泉の杣に立つ民の息ふ時無く戀ひ渡るかも
二六四六　住吉の津守網引の浮の緒の浮れか行かむ戀ひつゝあらずは
二六四七　横雲の空よ引き越し遠みこそ目言離るらめ絶ゆと隔つや
二六四八　彼に此に物は思はず飛驒人の打つ墨繩の直一道に
二六四九　足引の山田守る翁が置く蚊火の下焦れのみ我が戀ひ居らく
二六五〇　殺板持ち葺ける板目の合はざらば如何にせむとか吾が宿始めけむ
二六五一　難波人葦火焚く屋の煤してあれど己が妻こそ常めづらしき

二六五二 妹が髪上竹葉野の放ち駒荒びにけらし逢はなく思へば
二六五三 馬の音のとゞともすれば松蔭に出でゝぞ見つる蓋し君かと
二六五四 君に戀ひ寢ねぬ朝明に誰が乘れる馬の足の音ぞ我に聞かする
二六五五 紅の裾引く道を中に置きて妾や通はむ君や來まさむ
二六五六 天飛ぶや輕の社の齋槻幾世まであらむ隱妻ぞも
二六五七 神南備に神籬立てて齋へども人の心は守り敢へぬもの
二六五八 天雲の八重雲隱り鳴る神の音にのみやも聞き渡りなむ
二六五九 爭へば神も惡ます縱しゑやし準ふる君が惡からなくに
二六六〇 夜並べて君を來ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし
二六六一 靈ちはふ神も吾をば打棄てこそ縱ゑや命の惜しけくもなし
二六六二 吾妹子に又も逢はむと千早振る神の社を祈まぬ日はなし
二六六三 千早振る神の齋籬も越えぬべし今は吾が名の惜しけくもなし
二六六四 夕月夜曉闇の朝影に吾が身はなりぬ汝を思ひかねて
二六六五 月しあれば明くらむ別も知らずして寢て吾が來しを人見けむかも
二六六六 妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隱れる月待つ如し

二六六七 眞袖もち床打拂ひ君待つと居りし間に月傾きぬ
二六六八 二上に隱ろふ月の惜しけども妹が袂を離るゝ此頃
二六六九 吾が背子が振放け見つゝ嘆くらむ清き月夜に雲な棚引き
二六七〇 眞十鏡清き月夜の依移りなば思ひは止まじ戀こそ益さめ
二六七一 此夜らの在明の月夜在りつゝも君を置きては待つ人もなし
二六七二 此山の峯に近しと吾が見つる月の空なる戀もするかも
二六七三 烏玉の夜渡る月の依移りなば更にや妹に吾が戀ひ居らむ
二六七四 朽網山夕居る雲の立ちて往なば我は戀ひむな君が目を欲り
二六七五 君が著る三笠の山に居る雲の立てば繼がるゝ戀もするかも
二六七六 久方の天飛ぶ雲になりてしか君を相見む闕つる日なしに
二六七七 佐保の内よ嵐吹ければ立ち還り爲む術知らに嘆く夜ぞ多き
二六七八 愛しきやし吹かぬ風故玉匣開きてさ宿し吾ぞ悔しき
二六七九 窓越しに月押照りて足引の嵐吹く夜は君をしぞ念ふ
二六八〇 河千鳥住む澤の上に立つ霧の著けむな相言ひ始めてば
二六八一 吾が背子が使を待つと笠も着ず出でつゝぞ見し雨の降らくに

二六八二 唐衣君に打着せ見まく欲り戀ひぞ暮しゝ雨の降る日を
二六八三 彼方の赤土の小屋に小雨降り床さへ沾れぬ身に副へ我妹
二六八四 笠無みと人には言ひて雨障留りし君が容儀し思ほゆ
二六八五 妹が門行き過ぎかねつ久方の雨も降らぬか其を因にせむ
二六八六 夜占問ふ吾が袖に置く白露を君に見せむと取れば消につゝ
二六八七 櫻麻の苧原の下草露しあれば明していませ母は知るとも
二六八八 待ちかねて内へは入らじ白妙の吾が袖に露は置きぬとも
二六八九 朝露の消やすき吾が身老いぬとも又變若反り君をし待たむ
二六九〇 白細布の吾が衣手に露は置けど妹には逢はず猶豫にして
二六九一 彼に此に物は思はじ朝露の吾が身一つは君が隨意に
二六九二 夕凝の霜置きにけり朝戸出に跡踐みつけて人に知らゆな
二六九三 如是ばかり懸ひつゝあらずは朝に日に妹が履むらむ地ならましを
二六九四 足引の山鳥の尾の一峯越え一目見し兒に戀ふべきものか
二六九五 吾妹子に逢ふ緣をなみ駿河なる不盡の高嶺の燃えつゝかあらむ
二六九六 荒熊の住む云ふ山の師齒迫山責めて問ふとも汝が名は告らじ

二六九七 妹が名も我が名も立てば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつゝ渡れ

或本の歌に曰く

君が名も妾が名も立てば惜しみこそ不盡の高山の燒えつゝも居れ

二六九八 往きて見て來れば戀しき朝香潟山越に置きて宿ねがてぬかも
二六九九 安太人の魚梁打ち渡す瀨を早み意は念へど直に逢はぬかも
二七〇〇 玉蜻石垣淵の隱には戀ひて死ぬとも汝が名は告らじ
二七〇一 明日香川明日も渡らむ石走の遠き心は思ほえぬかも
二七〇二 飛鳥川水往き增り彌日々に戀の增らば在りがてましも
二七〇三 眞蔦刈る大野川原の水隱りに戀ひ來し妹が紐解く吾は
二七〇四 足引の山下動み行く水の時ともなくも戀ひ渡るかも
二七〇五 愛しきやし逢はぬ君故徒に此川の瀨に玉裳沾らしつ
二七〇六 泊瀨川速み早瀨を掬び上げて飽かずや妹と問ひし君はも
二七〇七 青山の石垣沼の水隱りに戀ひや渡らむ逢ふ緣をなみ
二七〇八 尻長鳥猪名山響み行く水の名のみ緣せてし內妻はも
二七〇九 吾妹子に吾が戀ふらくは水ならば筋こえて行くべくぞ思ふ

二七一〇 狗上の鳥籠の山なる不知也河不知とを聞せ我が名告らすな
二七一一 奥山の木の葉隠りて行く水の音に聞きしよ常忘らえず
二七一二 言とくば中は不通ませ水無河絶ゆ云ふ事をありこすな努
二七一三 明日香川行く瀬を早みはや見むと待つらむ妹を此日暮らしつ
二七一四 物部の八十氏川の早き瀬に立ち得ぬ戀も吾はするかも
二七一五 神名備の折廻む隅の石淵に隱りてのみや吾が戀ひ居らむ
二七一六 高山よ出で來る水の岩に觸り破れてぞ思ふ妹に逢はぬ夕は
二七一七 朝東風に井提越す波の清かにも逢はぬ兒故に瀧も響動に
二七一八 高山の石本激ち行く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも
二七一九 隱沼の下に戀ふれば飽き足らず人に語りつ忌むべきものを
二七二〇 水鳥の鴨の住む池の下樋無み鬱悒き君を今日見つるかも
二七二一 玉藻苅る井提の筈薄みかも戀の淀める吾が情かも
二七二二 吾妹子が笠の借手の和麸野に吾は入りぬと妹に告げこそ
二七二三 數多あらぬ名をしも惜しみ埋木の下よぞ戀ふる行方知らずて
二七二四 秋風の千江の浦回の木葉なす心は依りぬ後は知らねど

二七二五 白細砂三津の黄土の色に出でて云はなくのみぞ我が戀ふらくは
二七二六 風吹かぬ浦に浪立ち無き名をも吾は負へるか逢ふとはなしに
二七二七 菅島の夏身の浦に依する浪間も置きて吾が念はなくに
二七二八 淡海の海奥つ島山奥まへて我が思ふ妹が言の繁けく
二七二九 霰降り遠つ大浦に寄する波縱しゑ寄すとも憎からなくに
二七三〇 紀の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ兒故に
二七三一 牛窓の浪の潮騷島響み寄せてし君に逢はずかもあらむ
二七三二 奥つ波邊波の來寄る左太の浦の此時過ぎて後戀ひむかも
二七三三 白浪の來寄する島の荒磯にもあらましものを戀ひつゝあらずは
二七三四 潮滿てば水沫に浮ぶ細砂にも吾は生けるか戀ひは死なずて
二七三五 住吉の岸の浦回に重く波の數々妹を見む因もがも
二七三六 風を痛み甚振る浪の間無く吾が念ふ君は相念ふらむか
二七三七 大伴の三浦の白波間なく我が戀ふらくを人の知らなく
二七三八 大船の猶豫ふ海に碇下し如何にせばかも吾が戀ひ止まむ
二七三九 鵠鳩居る沖の荒磯に寄する浪往方も知らず吾が戀ふらくは

二七四〇　大船の舳にも艫にも寄する浪よすとも吾は君が隨意に
二七四一　大海に立つらむ浪は間あらむ君に戀ふらく止む時もなし
二七四二　志珂の海人の煙燒き立てゝ燒く鹽の辛き戀をも吾はするかも

右の一首、或は云ふ、石川君子朝臣之を作る、

二七四三　なかなかに君に戀ひずは比良の浦の海人ならましを玉藻刈りつゝ

或本の歌に曰く

なかなかに君に戀ひずは田兒の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る

二七四四　艫取る海人の燭火外にだに見ぬ人故に戀ふる此頃
二七四五　湊入りの葦別け小舟障多み吾が念ふ君に逢はぬ頃かも
二七四六　海上淨み沖へ搒ぎ出る海士舟の楫取る間なき戀をするかも
二七四七　味鎌の鹽津を指して搒ぐ船の名は告りてしを逢はざらめやも
二七四八　大舟に葦荷刈り積み繁々にも妹が心に乘りにけるかも
二七四九　驛路に引舟渡し直乘に妹が情に乘りにけるかも
二七五〇　吾妹子に逢はず久しも甘美物阿倍橋の蘿生すまでに
二七五一　味鳧の住む渚沙の入江の荒磯松我を待つ兒等は唯一人のみ

二七五二　吾妹子を聞き都賀野邊の靡ひ合歡木吾は忍び得ず間無くし念へば
二七五三　浪の間よ見ゆる小島の濱久木久しくなりぬ君に逢はずして
二七五四　秋柏閏八河邊の篠の芽の偲びて宿れば夢に見えけり
二七五五　淺茅原假標指して空言も寄せてし君が辭をし待たむ
二七五六　月草の假なる命なる人を如何に知りてか後も逢はむ云ふ
二七五七　大君の御笠に縫へる有馬菅ありつゝ見れど事なし我妹
二七五八　菅の根の懃妹に戀ふるにし丈夫心念ほえぬかも
二七五九　吾が宿の穂蓼古幹採み生ほし實になるまでに君をし待たむ
二七六〇　足引の山澤回具を摘みに行かむ日だにも逢はむ母は責むとも
二七六一　奥山の石本菅の根深くも思ほゆるかも吾が念ふ妻は
二七六二　蘆垣の中の似兒草莞爾に我と笑まして人に知らゆな
二七六三　紅の淺葉の野らに苅る草の束の間も吾を忘らすな
二七六四　妹がため壽遺せり苅薦の思ひ亂れて死ぬべきものを
二七六五　吾妹子に戀ひつゝあらずは苅薦の思ひ亂れて死ぬべきものを
二七六六　三島江の入江の薦を苅りにこそ吾をば君は思ひたりけれ

二七六七　足引の山橋の色に出て吾は戀ひなむを人目忌ますな
二七六八　葦鶴の騒ぐ入江の白菅の知られむ爲と言痛かるかも
二七六九　吾が背子に吾が戀ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及く如し
二七七〇　道の邊の五柴原の何時も何時も人の縱さむ事をし待たむ
二七七一　吾妹子が袖を憑みて眞野の浦の小菅の笠を著ずて來にけり
二七七二　眞野の浦の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか
二七七三　刺竹の葉隱りてあれ吾が背子が吾許來せずは吾戀ひめやも
二七七四　神南備の淺篠原の繁々にも妾が思ふ君が聲の著けく
二七七五　山高み谷邊に蔓へる玉葛絶ゆる時なく見む因もがも
二七七六　道の邊の草を冬野に履み枯らし吾立ち待つと妹に告げこそ
二七七七　疊薦隔て編む數通はさば道の柴草生ひざらましを
二七七八　水底に生ふる玉藻の生ひ出でず縱し此頃は斯くて通はむ
二七七九　海原の沖つ繩苔打靡き心も萎ぬに思ほゆるかも
二七八〇　紫草の名高の浦の靡藻の心は妹に依りにしものを
二七八一　海の底沖を深めて生ふる藻の專ら今こそ戀は術なき

二七八二　さ寢かねば誰とも宿めど沖つ藻の靡きし君が言待つ吾を
二七八三　吾妹子が如何にとも吾を思はねば含める花の穗に咲きぬべし
二七八四　隱りには戀ひて死ぬとも御園生の雞冠草の花の色に出でめやも
二七八五　咲く花は過ぐ時あれど我が戀ふる心の中は止む時もなし
二七八六　山吹の匂へる妹が唐棣花色の赤裳の姿夢に見えつゝ
二七八七　天地の依り合ひの極玉の緒の絶えじと思ふ妹が邊見つ
二七八八　生の緒に思ふは苦し玉の緒の絶えて亂れな知らば知るとも
二七八九　玉の緒の絶えたる戀の亂れには死なまくのみぞ又も逢はずして
二七九〇　玉の緒の縛り寄せつゝ末終に去きは分れず同じ緒にあらむ
二七九一　片絲以ち貫きたる玉の緒を弱み亂れやしなむ人の知るべく
二七九二　玉の緒の現し心や年月の行き易るまで妹に逢はざらむ
二七九三　玉の緒の間も置かず見まく欲り吾が思ふ妹は家遠くありて
二七九四　隱處の澤泉なる石根ゆも通してぞ思ふ君に逢はまくは
二七九五　紀の國の飽等の濱の忘貝我は忘れじ年は歷ぬとも
二七九六　水潛る玉に雜れる磯貝の片戀のみに年は經につゝ

二七九七　住吉の濱に緣る云ふ空石花貝實なき言以ち我戀ひめやも
二七九八　伊勢の海人の朝魚夕菜に潛く云ふ鰒の貝の片念にして
二七九九　人言を繁みと君を鶉鳴く人の古家に語らひて遣りつ
二八〇〇　曉と鷄は鳴くなり縱しゑやし獨宿る夜は開けば明けぬとも
二八〇一　大海の荒磯の渚鳥毎朝見まく欲しきを見えぬ君かも
二八〇二　思へども思ひもかねつ足引の山鳥の尾の永き此夜を

或本の歌に曰く

足引の山鳥の尾の垂り尾の長き永夜を一人かも宿む

二八〇三　里中に鳴くなる鷄の呼び立てゝ甚くは鳴かぬ隱妻はも
二八〇四　高山に鷹さ渡り高々に我が待つ君を待ち出なむかも
二八〇五　伊勢の海ゆ鳴き來る鶴の音信も君が聞えば吾戀ひめやも
二八〇六　吾妹子に戀ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮宿の安けくもなし
二八〇七　明けぬべく千鳥數鳴く色細の君が手枕未だ飽かなくに

問答

二八〇八　皇祖の神の御門を懼みと侍從らふ時に逢へる君かも
二八〇九　眞十鏡見とも言はめや玉限る石垣淵の隱りたる妻

右二首

二八一〇　赤駒の足搔速けば雲居にも隱り行かむぞ袖振れ吾妹
二八一一　隱口の豐泊瀨路は常滑の恐き道ぞ汝が心努

右二首

二八一二　味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の足音ぞする

右二首（答歌失落）

二八一三　雷神の光り動みてさし曇り雨も降れやも君を留めむ
二八一四　雷神の光り動みて降らずとも吾は留らむ妹し留めば

右二首

二八一五　布細布の枕動きて夜寢も寢ず思ふ人には後逢ふものを
二八一六　敷細布の枕に人は言問へや其枕には苔生しにたり

右二首（以前十首、柿本朝臣人麿の歌集に出づ）

二八一八　眉根搔き嚏び紐解け待てりやも何時かも見むと戀ひ來し吾を

右、上に柿本朝臣人麿の歌集中に見ゆ、但問答の故を以て累ねて玆に載す、

二八〇九 今日しあれば嚔びし嚔び眉痒み思ひし事は君にしありけり

右二首

二八一〇 音のみを聞きてや戀ひむ眞十鏡直に相見て戀ひまくも多く

二八一一 此の言を聞かむとならし眞十鏡照れる月夜も闇のみに見つ

右二首

二八一二 吾妹子に戀ひて術なみ白細布の袖反しゝは夢に見えきや

二八一三 吾が背子が袖反す夜の夢ならし眞も君に逢へりし如し

右二首

二八一四 吾が戀は慰めかねつ眞日月長く夢に見えずて年の經ぬれば

二八一五 眞日月長く夢にも見えず絶えぬとも吾が片戀は止む時もあらじ

右二首

二八一六 うらぶれて物な思ひそ天雲の猶豫ふ心吾が思はなくに

二八一七 うらぶれて物は思はじ水無瀬川有りても水は行く云ふものを

右二首

二八一八 燕子花佐紀沼の菅を笠に縫ひ着む日を待つに年ぞ經にける

二八一九 押照る難波菅笠置き古るし後は誰着む笠ならなくに

右二首

二八二〇 如是だにも妹を待ちなむ小夜更けて出で來し月の傾くまでに

二八二一 木の間より移らふ月の影を惜しみ徘徊るに小夜更けにけり

右二首

二八二二 栲領巾の白濱波の寄りも肯へず荒ぶる妹に戀ひつゝぞ居る

二八二三 却らまに君こそ吾に栲領巾の白濱浪の寄る時も無き

右二首

二八二四 思ふ人來むと知りせば八重葎覆へる庭に珠敷かましを

二八二五 玉敷ける家も何せむ八重葎覆へる小屋も妹と居りてば

右二首

二八二六 如是しつゝ在り慰めて玉の緒の絶えて別れば術なかるべし

二八二七 紅の花にしあらば衣袖に染め付け持ちて行くべく思ほゆ

右二首

譬喩

二八二八 紅の濃染の衣を下に着ば人の見らくに匂ひ出でむかも

二八二九 衣しも多にあらなむ取り易へて着せばや君が面忘れたらむ

右二首寄レ衣喩レ思

二八三〇 梓弓弓束巻き易へ中に見ば更に引くとも君が隨意に

右一首寄レ弓喩レ思

二八三一 鴨居る渚に居る船の夕潮を待つらむよりは吾こそ益さめ

右一首寄レ船喩レ思

二八三二 山河に筌を伏せ置きて守り敢へず年の八歳を吾を欺まひし

右一首、寄レ魚喩レ思

二八三三 葦鴨の群集く池水溢るとも儲溝の方に吾越えめやも

右一首、寄レ水喩レ思

二八三四 大和の室原の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ

右一首、寄レ菓喩レ思

二八三五 眞葛延ふ小野の淺茅を心よも人刈らめやも吾無けなくに

二八三六 三島菅未だ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠

二八三七 三吉野の水隈が菅を編まなくに刈りのみ刈りて亂りなむとや

二八三八 河上に洗ふ若菜の流れ來て妹が邊の瀬にこそ寄らめ

右四首、寄レ草喩レ思

二八三九 如是してや猶やなりなむ大荒木の浮田の杜の標ならなくに

右一首、寄レ標喩レ思

二八四〇 幾多も零らぬ雨故吾が背子が御名の幾許瀧も動響に

右一首、寄レ瀧喩レ思

卷十一終

卷十二

古今相聞往來歌類下

正述二心緒一

二八四一 我が背子が朝明の姿能く見ずて今日の間を戀ひ暮すかも

二八四二 我が心氣附き思へば新夜の一夜も闕ちず夢にし見ゆる

二八四三 愛しと我が思ふ妹を人皆の行く如見めや手に纏かずして

二八四四 此頃の寢の寢らえぬは敷細布の手枕纏きて寢まく欲りこそ

二八四五 忘るやと物語りして意遣り過ぐせど過ぎず猶ぞ戀しき

二八四六 夜も寢ず安くもあらず白細布の衣も脫がじ直に逢ふまで

二八四七 後に逢はむ吾をな戀ひそと妹は言へど戀ふる間に年は經につゝ

二八四八 直に逢はずあるは諸なり夢にだに何しか人の言の繁けむ

二八四九 烏玉の夜の夢にを見え繼ぐや袖乾す日なく吾は戀ふるを

二八五〇 現には直に逢はなく夢にだに逢ふと見えこそ我が戀ふらくに

二八五一 人言を繁みと妹に逢はずして心の裏に戀ふる此頃

以上十一首、柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

二八六四 吾が背子を今か今かと待ち居るに夜の更けぬれば嘆きつるかも

二八六五 玉釵纏き宿る妹もあらばこそ夜の長けくも歎しかるべき

二八六六 人妻に言ふは誰が言さ衣の此紐解けと言ふは誰が言

二八六七 如是ばかり戀ひむものぞと知らませば其の夜は寬にあらましものを

二八六八 戀ひつゝも後に逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ

二八六九 今は吾は死なむよ吾妹逢はずして思ひ渡れば安けくもなし

二八七〇 我が背子が來むと語りし夜は過ぎぬ縱ゑや更々失計來めやも

二八七一 人言の讒言を聞きて玉桙の道にも逢はず絕えにし我妹

二八七二 逢はなくも憂しと思へば彌增しに人言繁く聞え來るかも

二八七三 里人も語り繼ぐがね縱しゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや

二八七四 慥なる使を無みと心をぞ使に遣りし夢に見えきや

二八七五 天地に少し至らぬ丈夫と思ひし我や雄心もなき

二八七六 里近く家や居るべき此の吾が目の人目をしつゝ戀の繁けく

二六七七　何時はしも戀ひずありとはあらねどもうたて此頃戀の繁きも
二六七八　黑玉の宿ねてし晩の物思に割れにし胸は息む時もなし
二六七九　御空行く名の惜しけくも吾はなし逢はぬ日數多く年の經ぬれば
二六八〇　現にも今も見てしか夢のみに袂纏き宿と見れば苦しも
二六八一　立ちて居て術の方便も今はなし妹に逢はずて月の經ぬれば
二六八二　逢はずして戀ひわたるとも忘れめや彌日に日には思ひ益すとも
二六八三　外目にも君が光儀を見てばこそ壽に向ふ吾が戀止まめ
二六八四　戀ひつゝも今日はあらめど玉匣明けむ明日の日如何で暮さむ
二六八五　さ夜更けて妹を思ひ出布妙の枕もそよに嘆きつるかも
二六八六　他言はまこと言痛く成りぬとも彼所に障らむ吾ならなくに
二六八七　立ちて居て方便も知らず吾が意天つ空なり土は蹈めども
二六八八　世の中の人の言葉と思ほすなまことぞ戀ひし逢はぬ日を多み
二六八九　いで如何に吾が幾許戀ふる吾妹子が逢はじと言へる事もあらなくに
二六九〇　夜干玉の夜を長みかも吾が背子が夢に夢にし見え還るらむ
二六九一　荒玉の年の緒長く斯く戀ひばまこと吾が命全からめやも

二六九二　思ひ遣る術の方便も吾はなし逢はぬ日數多く月の經ぬれば
二六九三　朝去きて夕は來ます君故に忌々しくも吾は歎きつるかも
二六九四　聞きしより物を念へば我が胸は破れて摧けて利心もなし
二六九五　人言を繁み言痛み我妹子に去にし月より未だ逢はぬかも
二六九六　危たも言ひつゝもある哉吾しあれば地には落ちじ空に消ぬとも
二六九七　如何にあらむ日の時にかも吾妹子が裳引の容儀朝に日に見む
二六九八　獨居て戀ふれば苦し玉襷懸けず忘れむ方策もが
二六九九　中々に默止もあらましを味氣無く相見始めても吾は戀ふるか
二七〇〇　吾妹子が咲顏眉引面影に懸りてもとな思ほゆるかも
二七〇一　赤根指す日の暮れぬれば術をなみ千遍歎きて戀ひつゝぞ居る
二七〇二　吾が戀は夜晝別かず百重成す心し思へば甚も術なし
二七〇三　甚除きて薄き眉根を徒に搔かしめにつゝ逢はぬ人かも
二七〇四　戀ひ〳〵て後も逢はむと慰むる心しなくば生きてあらめやも
二七〇五　幾何も生けらじ命を戀ひつゝぞ吾は息衝く人に知らえず
二七〇六　他國に結婚に行きて太刀が緒も未だ解かねばさ夜ぞ明けにける

二九〇七　丈夫の聰き心も今は無し戀の奴に吾は死ぬべし
二九〇八　常斯くし戀ふれば苦し暫くも心安めむ事計せよ
二九〇九　凡ろかに吾し思はゞ人妻にあり云ふ妹に戀ひつゝあらめや
二九一〇　心には千重に百重に思へれど人目を多み妹に逢はぬかも
二九一一　人目多み目こそ忍ぶれ尠くも心の中に吾が念はなくに
二九一三　人の見て言咎めせぬ夢に吾今夜至らむ屋戸閉すな勤
二九一三　何時までに生かむ命ぞ大方は戀ひつゝあらずは死なむまされり
二九一四　愛しと吾が念ふ妹を夢に見て起きて探るに無きが不樂しさ
二九一五　妹と言ふは無禮く恐し乍然に懸けまく欲しき言にあるかも
二九一六　玉勝間逢はむと言ふは誰なるか逢へる時さへ面隱しする
二九一七　現にか妹が來ませる夢にかも吾か惑へる戀の繁きに
二九一八　大方は何かも戀ひむ言擧せず妹に依り宿む年は近きを
二九一九　二人して結びし紐を一人して吾は解き見じ直に逢ふまでは
二九二〇　死なむ命此は思はず直にしも妹に逢はなく事をしぞ念ふ
二九二一　紐の緒の同じ情に須臾も止む時もなく見なむとぞ念ふ

二九二二　夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ
二九二三　直今日も君には逢はめど人言を繁み逢はずて戀ひ渡るかも
二九二四　世の中に戀繁けむと思はねば君が袂を纏かぬ夜もありき
二九二五　綠兒の爲こそ乳母は求むと云へ乳飲めや君が乳母求むらむ
二九二六　悔しくも老いにけるかも我が背子が求むる乳母に行かましものを
二九二七　うらぶれて離れにし袖を又纏かば過ぎにし戀や亂れ來むかも
二九二八　各自人死なすらし妹に戀ひ日に日に瘦せぬ人に知らえず
二九二九　夕々に吾が立ち待つにけだしくも君來まさずば苦しかるべし
二九三〇　生ける代に戀云ふものを相見ねば戀ふる中にも吾ぞ苦しき
二九三一　思ひつゝ居れば苦しも夜干玉の夜になりなば吾こそ行かめ
二九三二　心には燃えて思へど虛蟬の人目を繁み妹に逢はぬかも
二九三三　相思はず君は座さめど片戀に吾はぞ戀ふる君が光儀を
二九三四　うまさはふ目には飽けども携はり言問はなくも苦しかりけり
二九三五　荒玉の年の緒永く何時までか我が戀ひ居らむ諒知らずて
二九三六　今は吾は死なむよ我が兄戀すれば一夜一日も安けくもなし

二九三七 白細布の袖折り反し戀ふればか妹が姿の夢にし見ゆる
二九三八 人言を繁み言痛み我背子を目には見れども逢ふよしもなし
二九三九 戀と言へば薄き事なり然れども我は忘れじ戀ひは死ぬとも
二九四〇 中々に死なば安けむ出づる日の入る別知らぬ我し苦しも
二九四一 思ひ遣る方便も我は今は無し妹に逢はずて年の經ぬれば
二九四二 吾が背子に戀ふとにしあらし小兒の夜哭をしつゝ寢ねがてなくは
二九四三 我が命を長く欲しけく僞を好くする人を執ふ許を
二九四四 玉梓の君が使を待ちし夜の名殘ぞ今も宿ねぬ夜の多き
二九四六 玉桙の道に行き合ひて外目にも見れば可愛兒を何時とか待たむ
二九四七 思ふにし餘りにしかば爲便を無み吾は言ひてき忌むべきものを
二九四八 思ふにし餘りにしかば門に出でゝ吾が反側すを人見けむかも
二九四九 明日は其門行かむ出でゝ見よ戀ひたる容儀數多著けむ
二九五〇 うたて殊に心鬱悒し事計好くせ吾が背子逢へる時だに
二九五一 我妹子が夜戸出の光儀見てしより心空なり地は蹈めども
海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも

二九五二 吾が齡の衰へぬれば白細布の袖のなれにし君をしぞ念ふ
二九五三 君に戀ひ吾が哭く涙白妙の袖さへ沾れぬ爲む術もなし
二九五四 今よりは逢はじとすれや白妙の我が衣手の干る時もなき
二九五五 夢かと心惑ひぬ月數多く離れにし君が言の通ふは
二九五六 荒玉の年月累ねて烏玉の夢にぞ見ゆる君が容儀は
二九五七 今よりは戀ふとも妹に逢はめやも床の邊去らず夢に見えこそ
二九五八 人の見て言とがめせぬ夢にだに止まず見えこそ我が戀止まむ
二九五九 現には言絶えにけり夢にだに續ぎて見えこそ直に逢ふまでに
二九六〇 虛蟬の現し情も我はなし妹を相見ずて年の經ぬれば
二九六一 虛蟬の常の辭と思へども繼ぎてし聞けば心惑ひぬ
二九六二 白妙の袖離れて宿る烏玉の今夜は早も明けば明けなむ
二九六三 白妙の袂寬けく人の宿る味宿は寢ずや戀ひ渡りなむ

寄レ物陳レ思

二九六四 人見れば表を結びて人見ねば裏紐開けて戀ふる日ぞ多き
二九六五 人言の繁けき時に吾妹子し衣にありせば下に着ましを

二六五三　眞珠附く遠近兼ねて思へれば一重衣を一人着て寢ぬ
二六五四　白妙の我が紐の緒の絶えぬ間に戀結びせむ逢はむ日までに
二六五五　新墾の今作る路清かにも聞きにけるかも妹が上の事を
二六五六　山城の石田の杜に心鈍く手向したれや妹に逢ひ難き
二六五七　菅の根の悁隱悁隱に照る日にも乾めや吾が袖妹に逢はずして
二六五八　妹に戀ひ寢ぬ朝けに吹く風し妹にし觸らば吾が共に觸れ
二六五九　飛鳥川高河避かし越え來しをまこと今夜を明けず行らめや
二六六〇　八釣河水底絶えず行く水の續ぎてぞ戀ふる此年來を
二六六一　磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人に知らえず戀ひ渡るかも

或本の歌に曰く

巖の上に立てる小松の名を惜しみ人には云はず戀ひわたるかも

二六六二　山河の水隱りに生ふる山草の止まずも妹が思ほゆるかも
二六六三　淺葉野に立ち神さぶる菅の根の悁隱誰れ故吾が戀ひなくに

右の十三首は柿本朝臣人麿の家集に出づ、

二六六四　如是のみにありける君を衣ならば下にも着むと吾が念へりける

二六六五　橡の袷の衣の裏しあらば吾强ひめやも君が來まさぬ
二六六六　紅の薄染衣淺らかに相見し人に戀ふる頃かも
二六六七　年の經ば見つゝ偲べと妹が言ひし衣の縫目見れば悲しも
二六六八　橡の一重衣の裏もなくあるらむ兒故戀ひ渡るかも
二六六九　解衣の思ひ亂れて戀ふれども何の故ぞと問ふ人もなし
二六七〇　桃花褐の淺色の衣淺らかに思ひて妹に逢はむものかも
二六七一　大君の鹽燒く海士の藤衣穢るとはすれど彌めづらしも
二六七二　赤帛の純裏の衣長く欲り我が思ふ君が見えぬ頃かも
二六七三　眞玉就く遠近兼ねて結びつる吾が下紐の解くる日あらめや
二六七四　紫の帶の結も解きも見ずもとなや妹に戀ひ渡りなむ
二六七五　高麗錦紐の結も解き放けず齋ひて待てど驗無きかも
二六七六　紫の我が下紐の色に出でず戀ひかも痩せむ逢ふ由をなみ
二六七七　何故か思はずあらむ紐の緒の心に入りて戀ひしきものを
二六七八　眞十鏡見ませ我が背子吾が形身持たらむ君に逢はざらめやも
二六七九　眞十鏡直目に君を見てばこそ命に向ふ我が戀止まめ

二九八〇 眞十鏡見飽かぬ妹に逢はずして月の經ぬれば生けるともなし
二九八一 祝部等が齋ふ御室の眞十鏡懸けて偲びつ逢ふ人毎に
二九八二 針はあれど妹が無ければ著けめやと吾を煩し絶ゆる紐が緒
二九八三 高麗劍我が心故外のみに見つゝや君を戀ひ渡りなむ
二九八四 劍太刀名の惜しけくも吾は無し此頃の間の戀の繁きに
二九八五 梓弓末はし知らず然れども現時は君に緣りにしものを

一本の歌に云ふ

梓弓末のたづきは知らねども心は君に緣りにしものを

二九八六 梓弓引きみ弛べみ思ひ見て既に心は緣りにしものを
二九八七 梓弓引きて縱さぬ大夫や戀云ふものを忍びかねてむ
二九八八 梓弓末の中間淀めりし君には逢ひぬ嘆きは息まむ
二九八九 今更に何しか思はむ梓弓引きみ弛べみ緣りにしものを
二九九〇 少女等が績麻の絡垛打麻懸け倦む時なしに戀ひ渡るかも
二九九一 垂乳根の母が養ふ蠶の繭隱り聞悒くもあるか妹に逢はずて
二九九二 玉襷懸けねば辛苦し懸け垂れば續ぎて見まくの欲しき君かも

二九九三 紫の綵色の藤花やかに今日見る人に後戀ひむかも
二九九四 玉藻懸けぬ時なく戀ふれども何如でか妹に逢ふ時もなき
二九九五 逢ふ由の出で來むまでは疊薦重ね編む數夢にし見てむ
二九九六 白紙付く木綿は花物言こそは何時の現時も常忘らえね
二九九七 石の上布留の高橋高々に妹が待つらむ夜ぞ更けにける
二九九八 湊入りの葦別け小船障多み今來む吾を淀むと思ふな

或本の歌に曰く

湊入りに葦別け小船障多み君に逢はずて年ぞ經にける

二九九九 水を多み上田に種蒔き稗を多み擇擢えし業ぞ吾が一人宿る
三〇〇〇 靈し合へば相宿しものを小山田の鹿猪田守る如母し守らすも
三〇〇一 春日野に照れる夕日の外のみに君を相見て今ぞ悔しき
三〇〇二 足引の山より出づる月待つと人には言ひて妹待つ吾を
三〇〇三 夕月夜曉闇の不明しく見し人故に戀ひ渡るかも
三〇〇四 久堅の天の御空に照れる日の失せなむ日こそ吾が戀ひ止まめ
三〇〇五 十五日の夜に出でにし月の高々に君を座せて何をか思はむ

三〇〇六 月夜好み門に出で立ち足占して行く時さへや妹に逢はざらむ
三〇〇七 野干玉の夜渡る月の清けくは能く見てましを君が光儀を
三〇〇八 足引の山を木高み夕月を何時かと君を待つが苦しさ
三〇〇九 橡の衣解き洗ひ眞土山古人にはなほ如かずけり
三〇一〇 佐保川の河浪立たず靜けくも君に副ひて明日さへもがも
三〇一一 吾妹子に衣春日の宜寸河因もあらぬか妹が目を見む
三〇一二 との曇り雨降る河の細波間無くも君は思ほゆるかも
三〇一三 我妹兒や吾を忘らすな石の上袖布留河の絶えむと念へや
三〇一四 神山の山下響み行く水の水脈の絶えずは後も吾が妻
三〇一五 雷の如聞ゆる瀧の白浪の面知る君が見えぬ此頃
三〇一六 山川の瀧に益れる戀すとぞ人知りにける間無くし思へば
三〇一七 足引の山川水の音に出でず人の子故に戀ひ渡るかも
三〇一八 巨勢なる能登瀬の川の後に合はむ妹には吾は今ならずとも
三〇一九 洗衣取替河の河淀の不通まむ心思ひかねつも
三〇二〇 斑鳩の因可の池の宜しくも君が言はねば念ひぞ吾がする

三〇二一 隱沼の下よは戀ひむ著く人の知るべく歎きせめやも
三〇二二 行方なみ隱れる小沼の下思に吾ぞ物思ふ頃者の間
三〇二三 隱沼の下よ戀ひ餘り白浪の灼然出でぬ人の知るべく
三〇二四 妹が目を見まく堀江の小浪重きて戀ひつゝありと告げこそ
三〇二五 石走る垂水の水の愛しきやし君に戀ふらく吾が心から
三〇二六 君は來ず我は故無み立つ浪の屢佗びし斯くて來じとや
三〇二七 近海の海邊は人知る沖つ浪君をおきては知る人も無し
三〇二八 大海の底を深めて結びてし妹が心は疑も無し
三〇二九 貞能浦に寄する白浪間無く思ふを如何で妹に逢ひ難き
三〇三〇 思ひ出でゝ爲便なき時は天雲の奥處も知らに戀ひつゝぞ居る
三〇三一 天雲の猶豫ひ易き心あらば吾をな憑め待てば苦しも
三〇三二 君が邊見つゝも居らむ伊駒山雲な棚引き雨は降るとも
三〇三三 中々に如何で知りけむ春山に燃ゆる煙の外に見ましを
三〇三四 吾妹子に戀ひ術なかり胸を熱み朝戸開くれば見ゆる霧かも
三〇三五 曉の朝霧隱り歸りしに如何でか戀の色に出でにける

三〇三六 思ひ出づる時は術無み佐保山に立つ雨霧の消ぬべく念ほゆ
三〇三七 切目山往還ふ道の朝霞髣髴にだにや妹に逢はざらむ
三〇三八 如此戀ひむ物と知りせば夕置きて朝は消ぬる露ならましを
三〇三九 夕置きて朝は消ぬる白露の消ぬべき戀も吾はするかも
三〇四〇 後遂に妹に逢はむと朝露の命は生けり戀は繁けど
三〇四一 朝々草の上白く置く露の消なば共にと云ひし君はも
三〇四二 朝日指す春日の小野に置く露の消ぬべき吾が身惜しけくもなし
三〇四三 露霜の消易き我が身老いぬとも又變若返り君をし待たむ
三〇四四 君待つと庭にし居れば打靡く我が黑髮に霜ぞ置きにける
三〇四五 朝霜の消ぬべくのみや時なしに思ひ渡らむ氣の緒にして
三〇四六 小波の波越す畔に落る小雨間も置きて吾が念はなくに
三〇四七 神さびて巖に生ふる松が根の君が心は忘れかねつも
三〇四八 御獵する雁路の小野の櫟柴の馴れは益らず戀こそまされ
三〇四九 櫻麻の麻原の下草早生ひば妹が下紐解けざらましを
三〇五〇 春日野に淺茅標結ひ斷えめやと吾が思ふ人は彌遠長に

三〇五一 足引の山菅の根の懃に吾はぞ戀ふる君が光儀を
三〇五二 杜若佐紀澤に生ふる菅の根の絶ゆとや君が見えぬ此頃
三〇五三 足引の山菅の根の懃に止まずし思はゞ妹に逢はむかも
三〇五四 相思はずあるものをかも菅の根の懃懇に吾が思へるらむ
三〇五五 山菅の止まずて君を思へかも吾が心神の此頃は無き
三〇五六 妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くな又顧みむ
三〇五七 淺茅原茅生に足蹈み心ぐみ吾が思ふ兒等が家の邊見つ
三〇五八 内日さす宮廷にはあれど鴨頭草の現心を吾が思はなくに
三〇五九 百に千に人は言へども月草の移ろふ心吾持ためやも
三〇六〇 忘草吾が紐に着く時と無く思ひ渡れば生けるともなし
三〇六一 曉の目醒草と此をだに見つゝ坐して吾と偲ばせ
三〇六二 忘草垣も繁森に植ゑたれど醜の醜草なほ戀ひにけり
三〇六三 淺茅原小野に標結ひ空言も逢はむと聞せ戀の慰に
三〇六四 人皆の笠に縫ふ云ふ有間菅在りて後にも逢はむとぞ思ふ
三〇六五 三吉野の蜻蛉の小野に刈る草の思ひ亂れて宿る夜しぞ多き

三〇六六 妹が着る三笠の山の山菅の止まずや戀ひむ命死なずは
三〇六七 谷狹み峯邊に延へる玉葛蔓へてしあらば年に來ずとも
三〇六八 水莖の岡の葛葉を吹き返し面知る兒等が見えぬ頃かも
三〇六九 赤駒のい行き憚る眞葛原何の傳言直にし吉けむ
三〇七〇 木綿疊田上山の實葛在々りてしも今ならずとも
三〇七一 丹波路の大江の山の眞玉葛絶えむの心我が思はなくに
三〇七二 大埼の荒磯の渡延ふ葛の行方も無くや戀ひ渡りなむ
三〇七三 木綿疊田上山の實葛後も必ず逢はむとぞ思ふ
三〇七四 唐棣花色の移ろひ易き心あれば年をぞ來經る言は絶えずて
三〇七五 如此してぞ人の死ぬ云ふ藤浪の唯一目のみ見し人故に
三〇七六 住吉の敷津の浦の名告藻の名は告りてしを逢はなくも怪し
三〇七七 鴨居る荒磯に生ふる名告藻の縱し名は告らせ父母は知るとも
三〇七八 浪の共靡く玉藻の片思に吾が思ふ人の言の繁けく
三〇七九 海若の沖つ玉藻の靡き宿む早來ませ君待てば苦しも
三〇八〇 海若の沖に生ひたる繩苔の名は曾て告らじ戀ひは死ぬとも

三〇八一 玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み亂るゝ時に戀ひざらめやも
三〇八二 君に逢はず久しくなりぬ玉の緒の長き命の惜しけくもなし
三〇八三 戀ふること益れる今は玉の緒の絶えて亂れて死ぬべく思ほゆ
三〇八四 海少女潜き取る云ふ忘貝世にも忘れじ妹が光儀は
三〇八五 朝影に我が身はなりぬ玉蜻髣髴に見えて往にし兒故に
三〇八六 中々に人と在らずは蠶にも成らましものを玉の緒ばかり
三〇八七 眞菅よし宗我の河原に鳴く千鳥間なし我が兄子吾が戀ふらくは
三〇八八 唐衣著奈良の山に鳴く鳥の間無く時無し吾が戀ふらくは
三〇八九 遠つ人獵路の池に住む鳥の立ちても居ても君をしぞ念ふ
三〇九〇 葦邊行く鴨の羽音の聲のみを聞きつゝもとな戀ひ渡るかも
三〇九一 鴨すらも己が夫婦どち求食して後るゝ程に戀ふ云ふものを
三〇九二 白檀弓斐太の細江の菅鳥の妹に戀ふれや寢を宿かねつる
三〇九三 篠の上に來居て鳴く鳥目を安み人妻故に吾戀ひにけり
三〇九四 物思ふと宿ねず起きたる朝開には佗びて鳴くなり鶏さへ
三〇九五 朝烏早くな鳴きそ吾が背子が朝開の姿見れば悲しも

三〇九六　馬柵越しに麥喰む駒の罵らゆれど猶し戀ふらく偲びかねつも
三〇九七　さ檜の隈檜隈川に馬駐め馬に水飼へ吾外に見む
三〇九八　己故罵らえて居れば葦毛馬の面高駮馬に乘りて來べしや

右の一首は平群文屋朝臣益人傳へて云ふ、昔聞く紀皇女高安王に竊嫁し責めらえし時、此歌を詠み給ふ、但高安王は左降して伊豫國守に任けらる、

三〇九九　紫草を草と別く別く伏す鹿の野は異にして心は同じ
三一〇〇　想はぬを想ふと云はゞ眞鳥住む卯名手の杜の神し知らさむ

問答歌

三一〇一　紫は灰指すものぞ海石榴市の八十の衢に逢ひし兒や誰
三一〇二　垂乳根の母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか

右二首

三一〇三　逢はなくは然かもありなむ玉梓の使をだにも待ちやかねてむ
三一〇四　逢はむとは千遍思へど在り通ふ人目を多み戀ひつゝぞ居る

右二首

三一〇五　人目多み直に逢はずて蓋しくも吾が戀ひ死なば誰が名ならむも

三一〇六　相見まく欲しけくあれば君よりも吾ぞ益りて鬱悒しみする

右二首

三一〇七　空蟬の人目を繁み逢はずして年の經ぬれば生けるともなし
三一〇八　空蟬の人目繁くは夜干玉の夜の夢にを續ぎて見えこそ

右二首

三一〇九　慇懃に吾が思ふ妹を人言の繁きによりて淀むころかも
三一一〇　人言の繁くしあらば君も我も絶えむと云ひて逢ひしものかも

右二首

三一一一　術もなき片戀をすと此頃に吾が死ぬべきは夢に見えきや
三一一二　夢に見て衣を取り着裝ふ間に妹が使ぞ先だちにける

右二首

三一一三　在有て後も逢はむと言のみを堅くいひつゝ逢ふとはなしに
三一一四　極めて吾も逢はむと思へども人の言こそ繁き君なれ

右二首

三一一五　氣の緒に吾が氣衝きし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも

三二六　我が故に痛くな侘びそ後遂に逢はじと云ひし言もあらなくに

右二首

三二七　門闔てゝ戸も閉したるを何處よか妹が入り來て夢に見えつる

三二八　門闔てゝ戸は閉したれど盜人の穿れる穴より入りて見えしを

右二首

三二九　明日よりは戀ひつゝあらむ今夕だに速く初夜より紐解け我妹

三三〇　今更に寢めや我が背子新夜の一度も缺ちず夢に見えこそ

右二首

三三一　吾が背子が使を待つと笠も著ず出でつゝぞ見し雨の降らくに

三三二　心無き雨にもあるか人目守り乏しき妹に今日だに逢はむを

右二首

三三三　唯一人宿れど寢かねて白細の袖を笠に著沾れつゝぞ來し

三三四　雨も降り夜も更けにけり今更に君行なめやも紐解き設けな

右二首

三三五　久堅の雨の降る日を我が門に簑笠着ずて來る人や誰

三三六　經向の痛足の山に雲居つゝ雨は降れども沾れつゝぞ來し

右二首

羈旅に思を發ぶ

三三七　度會の大河の邊の若久木吾が久ならば妹戀ひむかも

三三八　吾妹子を夢に見え來と大和路の渡瀬毎に手向ぞ吾がする

三三九　櫻花咲きかも散ると見るまでに誰かも此處に見えて散り行く

三三〇　豐國の企玖の濱松心痛く何しか妹に相云ひ初めけむ

右の四首は柿本朝臣人麿の歌集に出づ、

三三一　月易へて君をば見むと思へかも日も易へずして戀の繁けむ

三三二　な行きそと還りも來やと顧みに行けど行かれず道の長道を

三三三　旅にして妹を思ひ出灼然人の知る可く歎せむかも

三三四　里離り遠からなくに草枕旅とし思へば尙戀ひにけり

三三五　近くあれば名のみも聞きて慰めつ今夜よ戀の彌益りなむ

三三六　旅に在りて戀ふれば苦し何時しかも京に行きて君が目を見む

三三七　遠くあれば光儀は見えず常の如妹が笑は面影にして

三二三八 年も經ず歸り來なめど朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ
三二三九 玉桙の道に出で立ち別れ來し日より思ふに忘る時なし
三二四〇 愛しきやし然る戀にもありしかも君に後れて戀しく思へば
三二四一 草枕旅の悲しくあるなべに妹を相見て後戀ひむかも
三二四二 國遠み直には逢はず夢にだに吾に見えこそ逢はむ日までに
三二四三 斯く戀ひむものと知りせば吾妹兒に言問はましを今し悔しも
三二四四 旅の夜の久しくなればさ丹づらふ紐開け離けず戀ふる此頃
三二四五 吾妹子し我を偲ぶらし草枕旅の丸寢に下紐解けつ
三二四六 草枕旅の衣の紐解けつ思ほせるかも此年來は
三二四七 草枕旅の紐解く家の妹し吾を待ちかねて嘆かすらしも
三二四八 玉釵纏き宿し妹を月も經ず置きてや越えむ此山の岬
三二四九 梓弓末は知らねど愛しみ君に副ひて山路越え來ぬ
三二五〇 霞立つ長き春日を奥處無く知らぬ山路を戀ひつゝか來む
三二五一 外所のみに君を相見て木綿疊手向の山を明日か越え去なむ
三二五二 玉勝間安倍島山の夕露に旅宿えせめや長き此夜を

三二五三 み雪降る越の大山行き過ぎて何れの日にか我が里を見む
三二五四 いで吾が駒早く行きこそ亦打山待つらむ妹を行きて早見む
三二五五 惡木山木末悉明日よりは靡きたりこそ妹が邊見む
三二五六 鈴鹿川八十瀨渡りて誰が故か夜越に越えむ妻もあらなくに
三二五七 吾妹子に又も近江の安の河安寢も宿ずに戀ひわたるかも
三二五八 旅にありて物をぞ思ふ白波の邊にも沖にも寄るとはなしに
三二五九 湖回に滿ち來る潮の彌益しに戀はまされど忘らえぬかも
三二六〇 沖つ浪邊浪の來寄る貞の浦の此の時節過ぎて後戀ひむかも
三二六一 在千潟在り慰めて行かめども家なる妹い歎恨しみせむ
三二六二 澪標心盡して思へかも此處にももとな夢にし見ゆる
三二六三 吾妹兒に觸るとはなしに荒磯回に吾が衣手は沾れにけるかも
三二六四 室の浦の湍門の崎なる鳴島の磯越す浪に沾れにけるかも
三二六五 時鳥飛幡の浦に重く浪の屢々君を見むよしもがも
三二六六 吾妹子を外のみや見む越の海の子難の海の島ならなくに
三二六七 浪の間よ雲井に見ゆる粟島の逢はぬもの故吾に依する兒等

三二六八 衣袖の眞若の浦の眞砂地間なく時なし吾が戀ふらくは
三二六九 能登の海に釣する海人の漁火の光に往ませ月待ちがてり
三二七〇 志珂の白水郎の釣に燭せる漁火の髣髴に妹を見むよしもがも
三二七一 難波潟搒ぎ出し船の遙々に別れ來ぬれど忘れかねつも
三二七二 浦回搒ぐ熊野舟泊て愛憐しく懸けて思はぬ月も日もなし
三二七三 松浦舟亂る堀江の水脈早み揖取る間なく思ほゆるかも
三二七四 漁する漁士の楫の音動搖に妹が心に乘りにけるかも
三二七五 若の浦に袖さへ沾れて忘貝拾へど妹は忘らえなくに
三二七六 草枕旅にし居れば刈薦の亂れて妹に戀ひぬ日はなし
三二七七 志珂の海士の磯に刈り干す名告藻の名は告りてしを如何で逢ひがたき
三二七八 國遠み思ひな侘びそ風の共雲の行くなす言は通はむ
三二七九 留りにし人を思ふに蜻蛉野に居る白雲の止む時もなし

悲別歌

三二八〇 裏表もなく去にし君故朝旦もとなぞ戀ふる逢ふとはなしに
三二八一 白細の君が下紐吾さへに今日結びてな逢はむ日の爲

三二八二 白妙の袖の別は惜しけども思ひ亂れて赦しつるかも
三二八三 京師邊に君は去にしを誰解けか我が紐の緒の結ふ手解きも
三二八四 草枕旅行く君を人目多み袖振らずして數多悔しも
三二八五 眞十鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君に後れて生けるともなし
三二八六 陰夜の手段も知らず山越えて往ます君をば何時とか待たむ
三二八七 疊づく青垣山の隔りなば數々君を言問はじかも
三二八八 朝霞棚引く山を越えて行かば吾は戀ひむな逢はむ日までに
三二八九 足引の山は百重に隱すとも妹は忘らじ直に逢ふまでに
三二九〇 雲居なる海山越えて往ましなば吾は戀ひむな後は逢ひぬとも
三二九一 縱しゑやし戀ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほゆらくに
三二九二 草陰の荒蔭の崎の笠島を見つゝか君が山路越ゆらむ
三二九三 玉勝間島熊山の夕暮に一人か君が山道越ゆらむ
三二九四 氣の緒に吾が思ふ君は鷄が鳴く東方の坂を今日か越ゆらむ
三二九五 磐城山直越え來ませ磯崎の許奴美の濱に吾立ち待たむ
三二九六 春日野の淺茅が原に後れ居て時ぞとも無し吾が戀ふらくは

三九七　住吉の岸に向へる淡路島何怜と君を言はぬ日はなし
三九八　明日よりは印南の河の出で去なば留れる吾は戀ひつゝやあらむ
三九九　海の底沖は恐し磯回より搒ぎ運み往ませ月は經ぬとも
三〇〇　飼飯の浦に寄する白浪重々に妹が容儀は思ほゆるかも
三〇一　時つ風吹飯の濱に出居つゝ贖ふ命は妹が爲こそ
三〇二　柔田津に舟乘せむと聞きしなべ如何ぞも君が見え來ざるらむ
三〇三　鵠鳩居る洲に居る舟の搒ぎ出なば心戀しけむ後は逢ひぬとも
三〇四　玉葛絶えず行まさね山菅の思ひ亂れて戀ひつゝ待たむ
三〇五　後れ居て戀ひつゝあらずは田子の浦の海士ならましを珠藻刈る刈る
三〇六　筑紫路の荒磯の玉藻刈ればかも君は久しく待つに來まさぬ
三〇七　荒玉の年の緒長く照る月の厭かぬ君にや明日別れなむ
三〇八　久にあらむ君を思ふに久堅の清き月夜も闇のみに見ゆ
三〇九　春日なる三笠の山に居る雲を出で見る毎に君をしぞ念ふ
三一〇　足曳の片山雉立ち行かむ君に後れて顯しけめやも

問答歌

三一一　靈の緒の現心や八十梶懸け榜ぎ出む船に後れて居らむ
三一二　八十梶懸け島隱りなば吾妹子が留むと振らむ袖見えじかも

右二首

三一三　十月時雨の雨に沾れつゝや君が行くらむ宿か借るらむ
三一四　十月雨間も置かず降りにせば誰が里の間に宿か借らまし

右二首

三一五　白妙の袖の別を難みして荒津の濱に宿りするかも
三一六　草枕旅行く君を荒津まで送り來ぬれど飽足らずこそ

右二首

三一七　荒津の海吾が幣奉り齋ひてむ早還りませ面變りせず
三一八　旦々筑紫の方を出で見つゝ哭のみぞ我が泣く甚も術なみ

右二首

三一九　豐國の企救の長濱行き暮し日の暮れぬれば妹をしぞ念ふ
三二〇　豐國の企救の高濱高々に君待つ夜らはさ夜更けにけり

右二首

卷十二終

卷十三

雜歌

三三二　冬隱り春到り來れば、朝には白露置き、夕には霞棚引く、泊瀨のや木末が下に鶯鳴くも

右一首

三三三　三諸は人の守る山、本邊は馬酔木花咲き、末邊は椿花咲く、心妙し山ぞ、泣く兒守る山

右一首

三三三　雨霧ひ渡る日かくし、九月の時雨の降れば、雁がねも乏しく來鳴く、神南備の清き御田屋の、垣内田の池の堤の、百足らず齋槻が枝に、稚枝指す秋の赤葉、纒き持たる小鈴もゆらに、手弱女に我はあれども、引攀ぢて枝も撓々に、打手折り吾は持ちて行く、公が挿頭に

反歌

三三四　一人のみ見れば戀しみ神名火の山の黃葉手折り來り君

右二首

三三五　天雲の影さへ見ゆる、隱口の泊瀨の河は、浦無みか船の寄り來ぬ、磯無みか、海部の釣爲

ぬ、縱しゑやし浦は無くとも、縱しゑやし磯は無くとも、奥つ浪諍ひ搖入來、白水郎の釣船

反歌

三三六 細浪沸ちて流る泊瀬河依るべき磯の無きがさぶしさ

右二首

三三七 葦原の瑞穗の國に、手向すと天降りましけむ、五百萬千萬神の、神代より云ひ續ぎ來たる、神南備の三諸の山は、春去れば春霞立ち、秋往けば紅艶ふ、神南備の三諸の神の、帶に爲る明日香の河の、水脈速み生し留め難き、石が根に苔生すまでに、新夜の平安く通はむ、事計夢に見せこそ、劔刀齋ひ祭れる、神にし座せば

反歌

三三八 神名備の三諸の山に齋ふ杉思ひ過ぎめや苔生すまでに

三三九 五十串立て神酒座ゑ奉る神主部の髻華の山蔭見れば乏しも

右三首

三三〇 帛奉り奈良より出でゝ、水蓼穗積に至り、鳥網張る坂手を過ぎ、石走る神南備山に、朝宮に仕へ奉りて、吉野へと入り座す見れば、古念ほゆ

反歌

三三一 月日は行き代れども久にふる三諸の山の離宮地

右二首

三三二 斧取りて丹生の檜山の、木折り來て筏に作り、二梶貫き磯漕ぎたみつゝ、島傳ひ見れども飽かず、三吉野の瀧も動々に、落つる白浪

反歌

三三三 三芳野の瀧も動々に落つる白浪、留めにし妹に見せまく欲しき白浪

右二首

三三四 八隅しゝ我大皇、高照る日の皇子の、聞し食す御饌つ國、神風の伊勢の國は、國見者之毛山見れば高く貴し、河見ればさやけく清し、水門なす海も廣し、見渡す島も高し、其をしも心細しみか、此をしも目細しみかも、掛けまくもあやに畏き、山邊の石の原に、うちひさす大宮づかへ、朝日なす目細しも、暮日なす心細しも、春山の艶ひ榮えて、秋山の色なつかしき、百敷の大宮人は、天地と日月と共に萬代にもが

反歌

三三五 山邊の石の御井は自から成れる錦を張れる山かも

右二首

三三六 空見つ倭の國、青丹吉奈良山越えて、山城の管木の原、千早振る宇治の渡り、瀧の屋の阿後尼の原を、千歳に闕くることなく、萬歳に在り通はむと、山科の石田の森の、皇神に幣帛取り向けて、吾は越え往く相坂山を

右一首

三三七 青丹吉奈良山過ぎて、物部の宇治川渡り、未通女等に相坂山に、手向草麻取り置きて、我妹子に淡海の海の、奥つ浪來よす濱邊を、闇々と獨ぞ我が來し、妹が目を欲り

反歌

三三八 相坂を打ち出て見れば淡海の海白木綿花に浪立ち渡る

右三首

三三九 近江の海泊八十あり、八十島の島の埼々、あり立てる花橘を、末枝に鵠引き懸け、仲つ枝に斑鳩懸け、下枝に鶯を懸け、己が母を捕らくを知らに、己が父を捕らくを知らに、いそばひ居るよ、斑鳩と鶯と

右一首

三四〇 大君の命畏み、見れど飽かぬ奈良山越えて、眞木積む泉の河の、速き瀨に竿さし渡り、

千早振る宇治の渡の、瀧つ瀨を見つゝ渡りて、近江路の相坂山に、手向して吾が越え往けば、樂浪の志賀の韓埼、幸くあらば又返り見む、道の隈八十隈毎に、嘆きつゝ吾が過ぎ行けば、彌遠に里離り來ぬ、彌高に山も越え來ぬ、劔刀鞘ゆ拔き出て、伊香胡山如何吾が爲む、往方知らずて

反歌

三四一 天地を歎き乞ひ禱み幸くあらば又返り見む志賀の韓埼

右二首

三四二 百傳ふ美濃の國の、高北の泳の宮に、月に日に行かまし里を、有りと聞きて吾が通ひ路の、於吉蘇山美濃の山、靡けと人は蹈めども、斯く依れと人は衝けども、意なき山の、於吉蘇山美濃の山

右一首

三四三 處女等が麻笥に垂れたる、績麻なす長門の浦に、朝和に滿ち來る潮の、夕和に寄せ來る浪の、その潮のいや益々に、その波のいや重々に、吾妹子に戀ひつゝ來れば、阿胡の海の荒磯の上に、濱榮摘む海人少女ども、頸懸せる領巾も照る程に、手に纏ける玉も鏘々に、白妙の袖振る見えつ、相思ふらしも

反歌

三二四　阿胡の海の荒磯の上の小浪吾が戀ふらくは息む時もなし

右二首

三二五　天橋も長くもがも、高山も高くもがも、月よみの持たる變若水、い取り來て君に奉りて、變若得しむもの

反歌

三二六　天照るや日月の如く我が思へる君が日に日に老ゆらく惜しも

右二首

三二七　沼名川の底なる玉、求めて得し玉かも、拾ひて得し玉かも、惜しき君が、老ゆらく惜しも

右一首

相聞

三二八　敷島の日本の國に、人多に滿ちてあれども、藤浪の思ひ纏り、若草の思ひつきにし、君が目に戀ひや明さむ、長き此夜を

反歌

三二九　敷島の日本の國に人二人ありとし思はゞ何か嗟かむ

右二首

三三〇　蜻蛉島日本の國は、神故と、言擧せぬ國、然れども吾は言擧す、天地の神も甚だ、吾が思ふ心知らずや、往影の月も經行けば、玉限る日も累りて、思へかも胸やすからぬ、戀ふれかも心の痛き、末遂に君に逢はずは、吾が命の生けらむ極、戀ひつゝも吾は渡らむ、まそ鏡正目に君を、相見てばこそ我が戀止まめ

反歌

三三一　大舟の思ひ憑める君故に盡す心は惜しけくもなし

三三二　久方の都を置きて草枕旅行く君を何時とか待たむ

柿本朝臣人麿が歌集の歌に曰く

三三三　葦原の水穂の國は、神ながら言擧せぬ國、然れども言擧ぞ我がする、言幸く眞福く座せと、恙なく福く座さば、荒磯浪有りても見むと、五百重波千重浪重きに、言擧ぞ我がする

反歌

三三四　敷島の日本の國は言靈の佐くる國ぞ眞福くありこそ

右五首

三三五　古よ言ひ續ぎ來らく、戀すれば安からぬものと、玉の緒の繼ぎては云へど、處女等が心を不知に、其知らむ由の無ければ、夏麻引く思ひ泥み、刈薦の心も靡ぬに、人知れずもとなぞ戀ふる、氣の緒にして

反歌

三三六　數々に思はず人はあらめども暫くも吾は忘らえぬかも

三三七　直に來ず此よ巨勢路から石橋蹈み泥みぞ我が來し戀ひて術なみ

或本、此歌一首を以て、紀伊國の濱に寄るとふ鰒珠拾ひにといひて往きし君いつ來まさむ、といふ歌の反歌と爲せり、具に下に見えたり、但古本に依りて亦累ねて玆に載す、

右三首

三三八　荒玉の年は來去りて、玉梓の使の來ねば、霞立つ長き春日を、天地に思ひ足らはし、垂乳根の母の養ふ蠶の、眉隱り氣衝き渡り、吾が戀ふる心の内を、人に言はむものにしあらねば、松が根の待つ事遠み、天傳ふ日の闇れぬれば、白木綿の我が衣手も、通りて沾れぬ

反歌

三三九　如是のみし相思はざらば天雲の外にぞ君は有るべくありける

右二首

三三〇　小治田の愛智の水を、間無くぞ人は汲む云ふ、時じくぞ人は飲む云ふ、汲む人の間なきが如、飲む人の不時が如、吾妹子に吾が戀ふらくは、已む時もなし

反歌

三三一　思ひ遣る術の手段も今はなし君に逢はずて年の歷ぬれば

或本の反歌に曰く

三三二　瑞垣の久しき時よ戀すれば吾が帶緩ぶ朝夕毎に

右三首

三三三　隱國の泊瀨の河の、上つ瀨にい杭を打ち、下つ瀨に眞杭を打ち、い杭には鏡を懸け、眞杭には眞玉を懸け、眞珠なす我が思ふ妹も、鏡なす我が思ふ妹も、有りと言はゞこそ、國にも家にも行かめ、誰が故か行かむ

古事記を檢するに曰く、件の歌は、木梨の輕の太子の自らみまかりし時作りし所なり、

反歌

三三四　年渡るまでにも人は有り云ふを何時の間ぞも吾戀ひにける

或書の反歌に曰く

三三五　世間を倦しと思ひて家出せる吾や何にか還俗りて成らむ

右二首

三二六六　春されば花咲き撓々り、秋づけば丹の穂に黄づ、味酒を神南備山の、帶にせる明日香の川の、速き瀬に生ふる玉藻の、打靡き情は依りて、朝露の消なば消ぬべく、戀ふらくも益くも逢へる、隱妻かも

反歌

三二六七　明日香川瀬々の珠藻の打靡き情は妹に依りにけるかも

右二首

三二六八　三諸の神南備山ゆ、棚曇り雨は降り來る、雨霧らひ風さへ吹きぬ、大口の眞神の原ゆ、思ひつゝ還りにし人、家に到りきや

反歌

三二六九　還りにし人を思ふと野干玉の其の夜は吾も宿も寢かねてき

右二首

三二七〇　さし燒かむ小屋の醜屋に、搔棄てむ破薦を敷きて、打折らむ醜の醜手を、さし交へて宿らむ君故、赤根刺す晝は終日に、野干玉の夜は終夜に、此床のひしと鳴るまで、嘆きつるかも

反歌

三二七一　我が心燒くも我なり愛しきやし君に戀ふるも我が心から

右二首

三二七二　打延へて思ひし小野は、遠からぬ其里人の、標結ふと聞きてし日より、立たまくの方便も知らず、居らまくの奥處も知らず、親びにし我が家すらを、草枕旅寢の如く、思ふ心安からぬものを、嘆く心過ぐし得ぬものを、天雲のゆくら〳〵に、蘆垣の思ひ亂れて、亂れ麻の麻笥を無みと、吾が戀ふる千重の一重も、人知れずもとなや戀ひむ、氣の緒にして

反歌

三二七三　二つなき戀をしすれば常の帶を三重結ぶべく我が身はなりぬ

右二首

三二七四　爲む術の方便を知らに、石が根の凝しき道の、石床の根延へる門を、朝には出で居て嘆き、夕には入り居て思び、白妙の吾が衣袖を、折返し獨りし宿れば、野干玉の黑髮敷きて、人の寢る味眠は寢ずて、大船のゆくら〳〵に、思ひつゝ吾が睡る夜らを、數みも敢へむかも

反歌

三二七五　一人宿る夜を算へむと思へども戀の繁きに心利もなし

右二首

三二六 足引の山田の道を、敷細の愛し妻と、物言はず別れし來れば、早川の行方も知らず、衣手の反るも不知に、馬じもの立ちて躓き、爲む術の方便を不知に、物部の八十の心を、天地に思ひ足らはし、魂相はゞ君來ますやと、吾が嘆く八尺の嘆、玉桙の道來る人の、立ち留り如何と問はゞ、言ひやらむ手段を不知に、さ丹づらふ君が名言はゞ、色に出て人知りぬべみ、足引の山より出づる、月待つと人には云ひて、君待つ吾を

反歌

三二七 眠をも睡ず吾が思ふ君は何處邊に今宵座せか待てど來まさぬ

右二首

三二八 赤駒の廐立て、黑駒の廐立てゝ、其を飼ひ吾が往く如く、思ひ妻心に乘りて、高山の峯の曲處に、射部立てゝ猪鹿待つ如く、常しくに吾が待つ君を、犬な吠えそね

反歌

三二九 葦垣の末掻き別けて君越ゆと人にな告げそ事は棚知れ

右二首

三二〇 吾が背子は待てど來まさず、天の原振り放け見れば、黑玉の夜も更けにけり、小夜更けて

嵐の吹けば、立ち待つに吾が衣手に、降る雪は凍り渡りぬ、今更に君來まさめや、さな葛後も逢はむと、慰むる心を持ちて、御袖持ち床打拂ひ、現には君には逢はじ、夢にだに逢ふと見えこそ、天の足夜に

或本の歌に曰く

三二一 吾が背子は待てど來まさず、雁がねも動みて寒し、烏玉の夜も更けにけり、小夜更くと嵐の吹けば、立ち待つに吾が衣袖に、置く霜も氷に冴え渡り、落る雪も凍り渡りぬ、今更に君來まさめや、さな葛後も逢はむと、大舟の思ひ憑めど、現には君には逢はじ、夢にだに逢ふと見えこそ、天の足夜に

反歌

三二二 衣袖に嵐の吹きて寒き夜を君來まさずは獨りかも寢む

三二三 今更に戀ふとも君に逢はめやも眠る夜を闕ちず夢に見えこそ

右四首

三二四 菅の根の慇懃に、吾が念へる妹に依りては、言の禁も無くありこそと、齋瓮を齋ひ掘り据ゑ、竹珠を間なく貫き垂り、天地の神祇をぞ吾が祈む、甚も術なみ

反歌

三八五 垂乳根の母にも告らず包めりし心は縱しゑ君が任意に

或本の歌に曰く

三八六 玉襷懸けぬ時なく、吾が思へる君に依りては、倭文幣を手に取り持ちて、竹珠を重に貫き垂り、天地の神祇をぞ吾が祈ふ、甚も術なみ

反歌

三八七 天地の神を禱りて吾が戀ふる君に必ず逢はざらめやも

或本の歌に曰く

三八八 大船の思ひ憑みて、松が根の彌遠長く、我が念へる君に依りては、言の故も無くありこそと、木綿襷肩に取り懸け、齋瓮を齋ひ穿り据ゑ、天地の神祇にぞ吾が祈む、甚も術無み

右五首

三八九 御佩を劔の池の、蓮葉に渟れる水の、往方なく我が爲し時に、逢ふべしと占へる君を、な寢ねそと母聞せども、吾が情清隅の池の、池の底吾は忘れじ、正に逢ふまでに

反歌

三九〇 古の神の時より逢ひけらし今心にも常忘らえず

右二首

三九一 三芳野の眞木立つ山に、重に生ふる山菅の根の、慇懃に吾が念ふ君は、大君の任の隨意に、夷離る國治めにと、群鳥の朝立ち行けば、後れたる我か戀ひなむ、旅なれば君か偲ばむ、言はむ術爲む術不知に、足引の山の木末に、延ふ蔦の別れの數多、惜しくもあるかも

反歌

三九二 現身の命を長く有りこそと留れる吾は齋ひて待たむ

右二首

三九三 み吉野の御金の嶽に、間無くぞ雨は降る云ふ、時じくぞ雪は降る云ふ、その雨の間無きが如、その雪の時じくがごと、間も落ちず吾はぞ戀ふる、妹が直香に

反歌

三九四 み雪降る吉野の岳に居る雲の外に見し兒に戀ひわたるかも

右二首

三九五 打日さつ三宅の原に、直土に足踏み貫ね、夏草を腰に泥み、如何なるや人の兒故ぞ、通はすも吾子、諾な諾な母は知らず、諾な諾な父は知らず、蜷の腸か黑き髮に、眞木綿持ち交ね結ひ垂り、大和の黃楊の小櫛を、抑へ挿す敷妙の子は、それぞ吾が妻

反歌

三二九六　父母に知らせぬ兒故三宅道の夏野の草を泥み來るかも

右二首

三二九七　玉襷懸けぬ時無く、吾が思へる妹にし逢はねば、赤根刺す晝は終日に、烏玉の夜は終夜に、眠も睡ずに妹に戀ふるに、生ける方便なし

反歌

三二九八　縱しゑやし死なむよ我妹生けりとも斯くのみこそ吾が戀ひ渡りなめ

右二首

三二九九　見渡しに妹等は立たし、是方は吾は立ちて、思ふ心安からなくに、嘆く心安からなくに、さ丹漆の小舟もがも、玉纒の小楫もがも、榜ぎ渡りつゝも、語らはましを

或本の歌の頭句に云はく

隱國の泊瀨の川の、遠方に妹等は立たし、この方に吾は立ちて

右一首

三三〇〇　忍照る難波の埼に、引登る朱の赫船、赫船に綱取り繫け、引こづらひ有否みすれど、言ひづらひ有否みすれど、有否み得ずぞ、言はれにし我が身

右一首

三三〇一　神風の伊勢の海の、朝和に來寄る深海松、夕和に來寄る股海松、深海松の深めし我を、股海松の復往き返り、妻と言はじとかも、思ほせる君

右一首

三三〇二　紀伊國の室の江の邊に、千年に障む事なく、萬世に如是しもあらむと、大船の思ひ恃みて、出立ちの清き渚に、朝和に來寄る深海松、夕和に來寄る繩苔、深海松の深めし子等を、繩苔の引かば絶ゆとや、里人の行きの集に、泣く兒なす、行き取り探り、梓弓腹振り起し、志之岐羽を二つ手挾み、離ちけむ人し悔しも、戀ふらく思へば

右一首

三三〇三　里人の吾に告ぐらく、汝が戀ふる愛夫は、黃葉の散り亂りたる、神名火のその山邊から、烏玉の黑馬に乘りて、河の瀨を七瀨渡りて、愁憐れて夫は逢へりと、人ぞ告げつる

反歌

三三〇四　聞かずして默然もあらましを何しかも君が風聞を人の告げつる

右二首

問答

三三〇五 物念はず道行きなむも、青山を振り放け見れば、躑躅花香未通女、櫻花盛未通女、汝をそも吾に依す云ふ、吾をそも汝に依す云ふ、荒山も人し依すれば、依そるとぞ云ふ、汝が心ゆめ

反歌

三三〇六 如何にして戀ひ止むものぞ天地の神を祈れど吾は思ひ益す

三三〇七 然れこそ年の八歳を、切る髪の吾が肩を過ぎ、橋の末枝を過ぎて、この河の下にも長く、汝が心待て

反歌

三三〇八 天地の神をも吾は祈りてき戀云ふものは甞て止まずけり

柿本朝臣人麿が集の歌に云はく

三三〇九 物念はず路行きなむも、青山を振り放け見れば、躑躅花香少女、櫻花盛少女、汝をぞも吾に依す云ふ、吾をぞも汝に依す云ふ、汝は如何に思ふや、思へこそ歳の八年を、切る髪の吾が肩を過ぎ、橋の末枝を過ぐり、此川の下にも長く、汝が心待て

右五首

三三一〇 隱口の泊瀬の國に、さ結婚に吾が來れば、棚曇り雪は降り來ぬ、さ曇り雨は降り來ぬ、野つ鳥雉は動む、家つ鳥雞も鳴く、小夜は明け此の夜は明けぬ、入りて吾が寢む、此の戸開かせ

反歌

三三一一 隱口の泊瀬小國に妻しあれば石は履めども猶ぞ來にける

三三一二 隱口の泊瀬小國に、結婚せす吾が夫の君よ、奥床に母は宿たり、外床に父は寢たり、起き立たば母知りぬべし、出で行かば父知りぬべし、野干玉の夜は明け行きぬ、幾許も思はぬ如く、隱ぶ夫かも

反歌

三三一三 川の瀨の石踏み渡り野干玉の黑馬の來夜は常にあらぬかも

右四首

三三一四 次嶺經山城路を、他夫の馬より行くに、己夫の步より行けば、見る毎に哭のみし泣かゆ、其思ふに心し痛し、垂乳根の母が形身と、吾が持たる眞十見鏡に、蜻蛉領巾負ひ並め持ち て、馬買へ吾が夫

反歌

三三一五 泉河渡瀨深み吾が背子が旅行き衣裳沾らさむかも

或本の反歌に曰く

三三六 眞十鏡持てれど吾は益なし君が歩行より澁滯行く見れば

三三七 馬買はゞ妹歩行ならむ縱しゑやし石は履むとも吾は二人行かむ

右四首

三三八 紀伊國の濱に寄る云ふ、鰒珠拾はむと云ひて、妹の山勢の山越えて、行きし君何時來まさむと、玉桙の道に出で立ち、夕トを吾が問ひしかば、夕トの吾に告らく、吾妹子や汝が待つ君は、奥つ波來寄す白珠、邊つ浪の寄する白珠、求むとぞ君が來まさぬ、拾ふとぞ君は來まさぬ、久ならば今七日許、早からば今二日許、あらむとぞ君は聞しゝ、な戀ひそ我妹

反歌

三三九 杖衝きも衝かずも吾は行かめども君が來まさむ道の知らなく

三三〇 直に行かず此ゆ巨勢路から石瀨踏み求めぞ吾が來し戀ひて術なみ

三三一 小夜更けて今は明けぬと戸開きて紀伊へ行く君を何時とか待たむ

三三二 門に居る娘子は内に至るとも甚くし戀ひば今還り來む

右五首

譬喩歌

三三三 階立つ筑摩狹額田、息長の遠智の小菅、編まなくに刈り持ち來、敷かなくに刈り持ち來て、置きて我を偲ばす、息長の遠智の小菅

右一首

挽歌

三三四 掛けまくもあやに恐し、藤原の都繁森に、人はしも滿ちてあれども、君はしも多く座せど、行き易る年の緒長く、仕へ來し君の御門を、天の如仰ぎて見つゝ、畏けど思ひ憑みて、何時しかも吾大君の、天の下知しいまして、望月の滿はしけむと、吾が思へる皇子の命は、春されば植槻が上の、遠つ人松の下路ゆ、登らして國見遊ばし、九月の時雨の秋は、大殿の砌繁森に、露負ひて靡ける萩を、王襷懸けて偲ばし、み雪降る冬の朝は、刺楊根張梓を、御手に取らし給ひて、遊ばしゝ我が王を、煙立つ春の日暮し、眞十鏡見れど飽かねば、萬歳に斯くしもがもと、大船の憑める時に、我が涙目かも迷す、大殿を振り放け見れば、白細布に飾りまつりて、内日さす宮の舍人は、拷の穂の麻衣着るは、夢かも現かもと、曇

り夜の迷へるほどに、朝裳吉城上の道ゆ、角障ふ石村を見つゝ、神葬り葬り奉れば、行く道の方便を不知に、思へども驗を無み、嘆けども奥處を無み、御袖もち觸りてし松を、言問はぬ木にはあれども、荒玉の立つ月毎に、天の原振り放け見つゝ、玉襷懸けて偲ばな、恐かれども

反歌

三三五　角障經石村の山に白栲に懸れる雲は大君ろかも

右二首

三三六　敷島の大和の國に、何方に思ほし召せか、連も無き城上の宮に、大殿を仕へ奉りて、殿隱り隱り在せば、朝には召して使はし、夕には召して使はし、遣はしゝ舍人の子等は、行く鳥の群れて侍ひ、在り待てど召し賜はねば、劍刀磨ぎし心を、天雲に思ひ散らし、展轉び泥ち哭けども、飽足らぬかも

右一首

三三七　百小竹の三野の王、西の厩立てゝ飼ふ駒、東の厩立てゝ飼ふ駒、草こそは取りて飼ひなめ、水こそは汲みて飼ひなめ、何しかも葦毛の馬の、嘶え立ちつる

反歌

三三八　衣袖を葦毛の馬の嘶ゆ聲情あれかも常ゆ異に鳴く

右二首

三三九　白雲の棚曳く國の、青雲の向伏す國の、天雲の下なる人は、妾のみかも君に戀ふらむ、吾のみし君に戀ふれば、天地に滿ち足らはして、戀ふれかも胸の病める、念へかも心の痛き、妾が戀ぞ日に日に益る、何時はしも戀ひぬ時とは、あらねども此の九月を、吾が背子が偲びにせよと、千代にも偲び渡れと、萬代に語り續がへと、始めてし此の九月の、過ぎまくを甚も術なみ、荒玉の月の易れば、爲む術の手段を不知に、石が根の凝しき道の、石床の根延へる門に、朝には出で居て嘆き、夕には入り居戀ひつゝ、烏玉の黑髮敷きて、人の寢る味寢は宿ずに、大船のゆくら〳〵に、思ひつゝ吾が寢る夜等は、數みも敢へぬかも

右一首

三三〇　隱口の長谷の川の、上つ瀨に鵜を八頭潛け、下つ瀨に鵜を八頭潛け、上つ瀨の年魚を咋はしめ、下つ瀨の鮎を咋はしめ、麗し妹に副ひてましを、投ぐる箭の遠離り居て、思ふ心安からなくに、嘆く心安からなくに、衣こそは其れ破れぬれば、縫ひつゝも又も逢ふと言へ、玉こそは緒の絶えぬれば、括りつゝ又も逢ふと言へ、又も逢はぬものは、妹にしありけり

三三二　隱口の長谷の山、青幡の忍坂の山は、走出の宜しき山の、出立の妙しき山ぞ、惜しき山の荒れまく惜しも

三三三　高山と海こそは、山ながら斯くも現しく、海ながら然も直ならめ、人は花物ぞ、空蟬の世人

右三首

三三三　大君の御命恐み、秋津島大和を過ぎて、大伴の御津の濱邊ゆ、大舟に眞梶繁貫き、朝和に水手の聲呼び、夕和に梶の音しつゝ、行きし君何時來ますと、幣置きて齋ひ渡るに、狂言や人の言ひつる、我が心筑紫の山の、黄葉の散り過ぎにしと、君が風聞を

反歌

三三三四　狂言や人の言ひつる玉の緒の長くと君は言ひてしものを

右二首

三三三五　玉桙の道行く人は、足引の山行き野行き、直渡り河行き渡り、鯨魚取り海路に出でゝ、恐きや神の渡は、吹く風も和には吹かず、立つ浪も凡には立たず、重浪の立ち塞ふ道を、誰が心勞しとかも、直渡りけむ

三三三六　鳥が音も聞えぬ海に、高山を障になして、沖つ藻を枕になして、蜻蛉羽の衣だに着ずに、鯨魚取り海の濱邊に、心もなく宿ねたる人は、母父に愛子にかあらむ、若草の妻かあるらむ、思ほしき言傳てむやと、家問へば家をも告らず、名を問へば名だにも告らず、哭く兒なす言だに語はず、思へども悲しきものは、世間にあり

反歌

三三三七　母父も妻も子等も高々に來むと待つらむ人の悲しさ

三三三八　足引の山道は行かむ風吹けば浪の立ち塞ふ海道は行かじ

或本の歌

備後國神島の濱にて、調使首が屍を見て作める歌一首幷短歌

三三三九　玉桙の道に出でたち、足引の野行き山行き、直渡り川行き渉り、鯨魚取り海路に出でゝ、吹く風も凡には吹かず、立つ浪も和には立たず、恐きや神の渡りの、重浪の寄する濱邊に、高山を隔てに置きて、汐潭を枕に纏きて、心も無く偃せる君は、母父の愛子にもあらむ、稚草の妻もあらむと、家問へど家道も云はず、名を問へど名だにも告らず、誰が言を勞しみかも、重浪の恐き海を、直渉りけむ

反歌

三三四〇　母父も妻も子等も高々に來むと待つらむ人の悲しさ

三三四一　家人の待つらむものを連もなき荒磯を纏きて偃せる君かも

三三四二　汐潭に偃せる君を今日今日と來むと待つらむ妻し悲しも

三三四三　汐浪の來寄する濱に連も無く偃せる君が家道知らずも

右九首

三三四四　此月は君來まさむと、大舟の思ひ憑みて、何時しかと吾が待ち居れば、黄葉の過ぎて行きぬと、玉梓の使の云へば、螢なす髣髴に聞きて、天地を乞禱み嘆き、立ちて居て行方も不知に、朝霧の思ひ惑ひて、杖足らず八尺の嘆、嘆けども益を無みと、何所にか君が座さむと、天雲の行きの隨意に、射ゆ猪鹿の行きも死なむと、思へども道し知らねば、獨居て君に戀ふるに、哭のみし泣かゆ

反歌

三三四五　葦邊行く雁の翅を見る毎に君が佩ばしゝ投箭し思ほゆ

右二首、但或云、此短歌は防人が妻の作る所と、然れば即ち長歌も亦此同作たるを知るべし、

三三四六　見さくれば雲井に見ゆる、愛しき十羽の松原、少子等いざわ出で見む、如是避かば國に放

かなむ、如是避かば家に放かなむ、乾坤の神し恨めし、草枕此の旅の日に夫避くべしや

反歌

三三四七　草枕此の旅の日に夫放り家路思ふに生かむ術無し

右二首

卷十三　終

卷十四

東歌

雜歌

三三四八　魚釣綴挽く海上潟の沖つ渚に船は止めむ小夜更けにけり

右の一首は上總國の歌

三三四九　葛飾の眞間の浦回を榜ぐ船の船人騷ぐ浪立つらしも

右の一首は下總國の歌

三三五〇　筑波嶺の新桑蠶の絹はあれど君が御衣し奇に著欲しも

三三五一　筑波嶺に雪かも降らる否諾かも愛憐しき兒ろが布乾さるかも

右の二首は常陸國の歌

三三五二　信濃なる須賀の荒野に時鳥鳴く聲聞けば時過ぎにけり

右の一首は信濃國の歌

相聞

三三五三　荒玉の伎倍の林に汝を立てゝ行き難つましも妹先立たね

三三五四　伎倍人の斑衾に綿多入りなましもの妹が小床に

右の二首は遠江國の歌

三三五五　天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はずかもあらむ

三三五六　富士の嶺の彌遠長き山路をも妹許とへば息呻吟ばず來ぬ

三三五七　霞居る富士の山傍に我が來なば何方向きてか妹が嘆かむ

三三五八　さ寢らくは玉の緒ばかり戀ふらくは富士の高嶺の鳴澤の如

或本の歌に曰く

ま悲しみ寢らくしまらくさ寢らくは伊豆の高嶺の鳴澤如すよ

一本の歌に曰く

逢へらくは玉の緒しけや戀ふらくは富士の高嶺に降る雪如すも

三三五九　駿河の海磯邊に生ふる濱つゞら汝を頼み母に背違ひぬ

右の五首は駿河國の歌

三三六〇　伊豆の海に立つ白波の在りつゝも繼ぎなむものを亂れ始めゝや

右の一首は伊豆國の歌

三三六一　足柄の彼面此面に刺す羅の喧鳴る間靜み兒ろ吾紐解く
三三六二　相模峯の小峯見過ぐし忘れ來る妹が名呼びて吾を哭し泣くな

或本の歌に曰く

武藏峯の小峯見かくし忘れゆく君が名かけて吾を哭し泣くる
三三六三　吾が背子を大和へ遣りて待つ慕す足柄山の杉の木の間か
三三六四　足柄の箱根の山に粟蒔きて實とはなれるを逢はなくも怪し
三三六五　鎌倉の見越の崎の石崩の君が悔ゆべき心は持たじ
三三六六　ま悲しみさ寢に吾は行く鎌倉の美奈の瀨川よ汐滿つなむか
三三六七　百津島足柄小船步行多み目こそ疎らめ心は思へど
三三六八　足柄の土肥の河內に出づる湯の世にも動搖に兒ろが言はなくに
三三六九　足柄の麻萬の小菅の菅枕何か纏かさむ兒ろせ手枕
三三七〇　足柄の箱根の嶺ろの箱根草の花妻なれや紐解かず寢む
三三七一　足柄の御坂かしこみ陰夜の吾が下延へを言出つるかも
三三七二　相模路の淘綾の濱の眞砂なす兒等し愛憐しく思はるゝかも

右の十二首は相模國の歌

三三七三　多麻河に曝す手作更々に何ぞ此の兒の許多愛しき
三三七四　武藏野に占肩灼き眞實にも告らぬ君が名卜に出にけり
三三七五　武藏野の小岫が雉立ち別れ往にし宵より夫ろに逢はなふよ
三三七六　繼しけば袖も振らむを武藏野の朮が花の色に出なゆめ

或本の歌に曰く

如何にして戀ひばか妹に武藏野の朮が花の色に出ずあらむ
三三七七　武藏野の草は諸向彼も此も君がまに〳〵吾は依りにしを
三三七八　入間道の大家が原の伊波爲都良引かばぬる〳〵吾にな絕えそね
三三七九　吾が背子を何どかも云はむ武藏野の朮が花の時なきものを
三三八〇　埼玉の津に居る船の風を疾み綱は絕ゆとも言な絕えそね
三三八一　夏麻引く宇奈比を指して飛ぶ鳥の到らむとぞよ吾が下延へし

右の九首は武藏國の歌

三三八二　馬來田の嶺ろの篠葉の露霜の沾れて吾來なば汝は戀ふばそも
三三八三　馬來田の嶺ろに隱り居斯くだにも國の遠かば汝が目欲りせむ

右の二首は上總國の歌

三三八四　葛飾の眞間の手兒名をまことかも吾に依すとふ眞間の手兒名を
三三八五　葛飾の眞間の手兒名が在りしかば眞間の磯邊に波も動響に
三三八六　鳰鳥の葛飾早稻を新饗すとも其の愛憐しきを外に立てめやも
三三八七　足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋止まず通はむ

右の四首は下總國の歌

三三八八　筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎがてに息衝く君を率寢て遣らさね
三三八九　妹が門彌遠除きぬ筑波山隱れぬ程に袖は振りてな
三三九〇　筑波嶺にかゝ鳴く鷲の音のみをか鳴き渡りなむ逢ふとはなしに
三三九一　筑波嶺に背向に見ゆる葦穗山惡しかる咎も眞實見えなくに
三三九二　筑波嶺の石も動響に落つる水世にも動搖に我が思はなくに
三三九三　筑波嶺の彼面此面に守部据ゑ母は守れども魂ぞ逢ひにける
三三九四　狹衣の小筑波嶺ろの山の岬忘らえ來ばこそ汝を懸けなはめ
三三九五　小筑波の嶺ろに月立し逢ひし夜は多なりぬを又寢てむかも
三三九六　小筑波の繁き木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寢ざらなくに
三三九七　常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ

右の十首は常陸國の歌

三三九八　人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手兒が言な絶えそね
三三九九　信濃路は新の墾道刈株に足踏ましむな履穿け我が夫
三四〇〇　信濃なる筑摩の川の細石も君し蹈みてば玉と拾はむ
三四〇一　中麻奈に浮き居る船の榜ぎ出なば逢ふこと難し今日にしあらずは

右の四首は信濃國の歌

三四〇二　日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫のが袖も清に振らしつ
三四〇三　吾が戀は現時も悲し草枕多胡の入野の行末もかなしも
三四〇四　上毛野安蘇の眞麻屯搔抱き寢れど飽かぬを何どか吾が爲む
三四〇五　上毛野小野の多杼里が川路にも兒らは逢はなも獨のみして

或本の歌に曰く

上毛野小野の多杼里が川路にも夫は逢はなも見る人なしに
三四〇六　上毛野佐野のくゝたち折り榮し吾は待たむ今年來ずとも
三四〇七　上毛野眞桑島門に朝日さしまぎらはしもな在りつゝ見れば
三四〇八　新田山嶺には着かなゝ吾に依そり間なる兒等し奇に愛しも

三四〇九　伊香保ろに天雲い繼ぎ鹿沼附く人とおたはふいざ寢しめとら
三四一〇　伊香保ろの傍の榛原慇懃に行末をな兼ねそ現時し善かば
三四一一　多胡の嶺に寄綱延へて寄すれども豈來や沉石其貌善きに
三四一二　上毛野久路保の嶺ろの久受葉我多愛しけ兒らに彌離り來も
三四一三　利根川の河瀨も知らず直渉り浪に逢ふ如す逢へる君かも
三四一四　伊香保ろの夜左可の堰寒に立つ虹の顯ろ迄もさ寢をさ寢てば
三四一五　上毛野伊香保の沼に殖子水葱斯く戀ひむとや種求めけむ
三四一六　上毛野可保夜が沼の伊波爲都良引かば靡れつゝ吾をな絶えそね
三四一七　上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ勝れ

柿本朝臣人麿歌集に出づ

三四一八　上毛野佐野田の稻苗の群苗に事は定めつ今は如何に爲も
三四一九　伊香保夫よ夜中吹き下し思ひどろ久麻許曾之都等忘れ爲なふも
三四二〇　上毛野佐野の船橋取放し親は放くれど吾は放るがへ
三四二一　伊香保嶺に雷な鳴りそね我が上には事故はなけども兒らに依りてぞ
三四二二　伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が戀のみし時なかりけり

三四二三　上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎがてぬ妹が家の邊

右の二十二首は上野國の歌

三四二四　下毛野三鴨の山の子楢如す目細し兒ろは誰が笥か持たむ
三四二五　下毛野安蘇の川原よ石踏ます空ゆと來ぬよ汝が心告れ

右の二首は下野國の歌

三四二六　會津嶺の國をさ遠み逢はなはゞ偲びにせむと紐結ばさね
三四二七　筑紫なる艶ふ兒故に陸奥の片依處女の結ひし紐解く
三四二八　安太多良の嶺に伏す鹿猪の在りつゝも吾は到らむ寢處な去りそね

右の三首は陸奥國の歌

譬喩歌

三四二九　遠江伊奈佐細江の澪標吾を憑めて淺ましものを

右の一首は遠江國の歌

三四三〇　志太の浦を朝榜ぐ船は由なしに漕ぐらめかもよ寄し來ざるらめ

右の一首は駿河國の歌

三四三一　足柄の安伎奈の山に引こ船の後引かしもよ幾許來難に

三四三二　足柄の吾を可鶏山の穀の木の我をかづさねもかづさかずとも
三四三三　薪樵る鎌倉山の木垂木を待つと汝が言はゞ戀ひつゝやあらむ

右の三首は相模國の歌

三四三四　上毛野安蘇山黑葛野を廣み延ひにしものを何か絶えせむ
三四三五　伊香保ろの傍の榛原我が衣に着き宜しもよ絹布と思へば
三四三六　白砥掘る小新田山の守る山の末枯れ爲無な常葉にもがも

右の三首は上野國の歌

三四三七　陸奥の安太多良眞弓彈き置きて撥らしめ置なば弦著かめかも

右の一首は陸奥國の歌

雜歌

三四三八　都武賀野に鈴が音聞ゆ上志太の殿の仲子し鷹狩すらしも
三四三九　鈴が音の早馬驛の堤井の水を賜へな妹が直手よ
三四四〇　此川に朝菜洗ふ兒汝も吾も同年輩子をぞ持てるいで兒賜りに
三四四一　間遠くの雲居に見ゆる妹が家に何時か到らむ歩め吾が駒
三四四二　東路の手兒の呼坂越えかねて山にか宿むも宿はなしに

三四四三　何心もなく我が行く道に青柳の張りて立てれば物思ひ出つも
三四四四　伎波都久の岡の萱菲我摘めど籠にも滿た無ふ夫と摘まさね
三四四五　湊のや葦が中なる玉小菅刈り來我が夫子床の隔に
三四四六　妹なろが汲用ふ河津のさゝら荻葦と一如語り宜しも
三四四七　草蔭の安努野行かむと墾りし道阿努は行かずて荒草立ちぬ
三四四八　花散らふ此向つ峯の乎那の峯の洲につく迄君が齡もがも
三四四九　白細布の衣の袖を眞久良我よ海士榜ぎ來見ゆ浪立つな努
三四五〇　小草壯子と乎具佐好色男と潮舟の並べて見れば乎具佐勝ちめり
三四五一　左奈都良の岡に粟蒔き愛憐しきが駒は揚ぐとも吾はそともはじ
三四五二　面白き野をばな燒きそ古草に新草交り生ひは生ふるがに
三四五三　風の音の遠き我妹が着せし衣袂の行紕ひ來にけり
三四五四　庭に殖つ麻布小衾今宵だに夫寄し來せね麻布小衾

相聞

三四五五　戀しけば來ませ我が夫子垣内柳末摘み刈らし我立ち待たむ
三四五六　虛蟬の八十言のへは繁くとも爭ひかねて我を言なすな

三四五七　内日さす宮の吾が夫は大和女の膝枕く毎に吾を忘らすな
三四五八　汝兄の子や等里の岡道し中手折れ吾を哭し泣くよ息衝くまでに
三四五九　稻舂けば蹈る我が手を今夜もか殿の稚子が取りて嘆かむ
三四六〇　誰ぞ此の屋の戸押そぶる新嘗に我が夫を遣りて齋ふ此の戸を
三四六一　何と云へか眞に逢はなくに眞日暮れて夜なは來無に明けぬ時來る
三四六二　足引の山澤人の人多に眞汝と云ふ兒が奇に愛憐しさ
三四六三　間遠くの野にも逢はなむ心なく里の眞中に逢へる夫かも
三四六四　人言の繁きに依りて眞小薦の同じ枕は吾は纏かじやも
三四六五　高麗錦紐解きさけて寢るが上に何ど爲ろとかも奇に愛憐しき
三四六六　眞愛しみ寢れば言に出さ寢なへば心の緒ろにのりて悲しも
三四六七　奥山の眞木の板戸をとゞとして我が開かむに入り來て寢さね
三四六八　山鳥の尾ろの秀つ尾に鏡懸け唱ふべみこそ汝に寄そりけめ
三四六九　夕占にも今夜と告らろ我が夫は何ぞも今夜依しろ來まさぬ
三四七〇　相見ては千年や去ぬる否をかも我や然か思ふ君待ちがてに（柿本朝臣人麿呂歌集に出づ）
三四七一　暫くは寢つゝもあらむを夢のみにもとな見えつゝ吾を哭し泣くる

三四七二　他妻と何か其を云はむ然らばか隣の衣を假りて著なはも
三四七三　佐野山に打つや斧音の遠かども寢もとか兒ろが面に見えつる
三四七四　殖竹の本さへ響み出でゝ去なば何方向きてか妹が嘆かむ
三四七五　戀ひつゝも居らむとすれど木綿間山隱れし君を思ひかねつも
三四七六　諸兒汝は吾に戀ふなも立と月の流なへ行けば戀しかるなも
三四七七　東路の手兒の呼坂越えて去なば我は戀ひむな後は逢ひぬとも
三四七八　遠し云ふ故奈の白峯に逢ほ時も逢はのへ時も汝にこそ依され
三四七九　安可見山草根刈除け逢はすが上爭ふ妹し奇に愛憐しも
三四八〇　大君の命恐み愛し妹が手枕離れよだち來ぬかも
三四八一　あり衣のさゑ〳〵鎭み家の妹に物云はず來にて思ひ苦しも

柿本朝臣人麿歌集の中に出づ、上に見ゆること已に記せり、

三四八二　韓衣襴の打交へ逢はねども異しき心を我が思はなくに

或本の歌に曰く

三四八三　韓衣襴の打交ひ相はなへば寢敢へぬの故に言痛かりつも
　　晝解けば解けなへ紐の我が夫に相依るとかも夜解けやする

三四八四 麻苧らを麻笥に多に績まずとも明日來せざめやいざ爲小床に
三四八五 劔刀身に添ふ妹を取り見がね哭をぞ鳴きつる手兒にあらなくに
三四八六 愛し妹を弓束並べ向き同輩男の事とし云はゞ彌勝たましに
三四八七 梓弓末に玉纏き斯く爲すぞ宿なゝ成りにし行末を兼ぬ〳〵
三四八八 おふ葛此本山の眞終極にも告らぬ妹が名卜兆に出でむかも
三四八九 梓弓欲良の山邊の繁かくに妹ろを立てゝさ寢所拂ふも
三四九〇 梓弓末は依り宿む方今こそ人目を多み汝を間に置けれ

柿本朝臣人麿の歌集に出づ

三四九一 柳こそ伐れば生えすれ世の人の戀に死なむを如何に爲よとぞ
三四九二 小山田の池の堤に刺す柳成りも成らずも汝と二人はも
三四九三 遲速も汝をこそ待ため向つ峯の椎の小枝の逢ひは違はじ

或本の歌に曰く

遲速も君をし待たむ向つ峯の椎の小枝の時は過ぐとも
三四九四 兒毛知山若雞冠木の紅葉づまで宿もと吾は思ふ汝は何どか思ふ
三四九五 伊波保呂の傍の若松限とや君が來まさぬ心許無くも

三四九六 橘の古婆の垂髮女が思ふなむ心愛しいで吾は行かな
三四九七 河上の根白高草あやに〳〵さ宿さ寐てこそ言に出にしか
三四九八 海原の萎柔小菅數多あれば君は忘らす吾忘るれや
三四九九 岡に寄せ吾が刈る草の狹萎草のまこと柔は寐ろと不言かも
三五〇〇 紫草は根をかも竟ふる人の兒の心悲しけを寢を竟へなくに
三五〇一 安波岡の岡田に生はる多波美豆良引かばぬる〳〵吾を言な絶え
三五〇二 吾が目妻人は放くれど朝顏の年さへ許多吾は放るがへ
三五〇三 安齋可潟潮干の寬に思へらば朮が花の色に出めやも
三五〇四 春べ咲く藤の末葉の心安にさ宿る夜ぞなき兒ろをし思へば
三五〇五 内日さつ美夜の瀨川の顏花の戀ひてか宿らむ昨夜も今宵も
三五〇六 新室の蠶時に到れば幡薄穗に出し君が見えぬこのごろ
三五〇七 谷狹み峯に蔓ひたる玉葛絶えむの心吾が思はなくに
三五〇八 芝付の美宇良崎なる根都古草相見ずあらば我戀ひめやも
三五〇九 栲衾白山風の宿なへども子ろが襲着の有ろこそ善きも
三五一〇 み空行く雲にもがもな今日行きて妹に言問ひ明日歸り來む

三五一一 青嶺ろに棚引く雲のいさよひに物をぞ思ふ年の此頃
三五一二 一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の依そり妻はも
三五一三 夕來ればみ山を去らぬ布雲の何か絶えむと言ひし兒ろはも
三五一四 高き嶺に雲の着く如す吾さへに君に着きなゝ高嶺と思ひて
三五一五 吾が面の忘れむ時は國溢り峯に立つ雲を見つゝ偲ばせ
三五一六 對馬の嶺は下雲あらなふ上の嶺に棚引く雲を見つゝ偲ばも
三五一七 白雲の絶えにし妹を何爲ろと心に乘りて許多悲しけ
三五一八 岩の上にい懸る雲の鹿沼づく人ぞおた延ふいざ寢しめとら
三五一九 汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで來吾妹子相見て行かむ
三五二〇 面形の忘れむ時は大野ろに棚引く雲を見つゝ偲ばむ
三五二一 烏とふ大虛言烏の眞實にも來まさぬ君を兒ろ來とぞ鳴く
三五二二 昨夜こそは兒ろとさ宿しか雲の上ゆ鳴き行く鶴の間遠く思ほゆ
三五二三 山坂越えて阿倍の田の面に居る鶴のともしき君は明日さへもがも
三五二四 眞小薦の結目のみ近くて逢はなへば奥つ眞鴨の歎きぞ我が爲る
三五二五 水久君沼に鴨の鉏ほ如す兒ろが上に言おろ延へて未だ宿なふも

三五二六 沼二つ通は鳥が巣我が心二行くなもと勿思はりそね
三五二七 沖に住も小鴨の如八尺鳥息衝く妹を置きて來ぬかも
三五二八 水鳥の立たむ裝束に妹のらに物言はず來にて思ひかねつも
三五二九 鳥矢の野に兎窺はりをさ〳〵も寢なへ兒故に母に嘖ばえ
三五三〇 小牡鹿の伏すや叢見えずとも兒ろが金門よ行かくし好しも
三五三一 妹をこそ相見に來しか眉引の横山邊ろの鹿なす思へる
三五三二 春の野に草喰む駒の口息まず吾を偲ぶらむ家の兒ろはも
三五三三 人の子の愛しけ時は濱渚鳥足惱む駒の惜しけくもなし
三五三四 赤駒が門出をしつゝ出でがてに爲しを見立てし家の兒らはも
三五三五 己が男を疎にな思ひそ庭に立ち笑ますが故に駒に逢ふものを
三五三六 赤駒を打ちてさ緒牽き心引き如何なる兒汝が吾許來むと言ふ
三五三七 垣越しに麥喰む駒の端々に相見し兒らし奇に愛しも

或本の歌に曰く

馬柵越し麥食む駒のはつ〳〵に新膚觸れし兒ろし愛しも

三五三八 反橋を馬越しかねて心のみ妹許遣りて吾は此處にして

三五三九 岸崩の上に駒を繋ぎて危ほかど人妻兒ろを氣息に我がする
三五四〇 左和多里の手兒にい行き遇ひ赤駒が足搔を速み言問はず來ぬ
三五四一 岸崩邊から駒の行こ如す危はども人妻兒ろをまゆかせらふも
三五四二 細石に駒を馳させて心痛み吾が思ふ妹が家の邊かも
三五四三 群草の都留の堤の成りぬがに子ろは言へども未だ寢なくに
三五四四 飛鳥川下濁れるを知らずして夫汝なと二人さ宿て悔しも
三五四五 飛鳥川塞くと知りせば數多夜も率寢て來ましを塞くと知りせば
三五四六 青柳の波良呂川門に汝を待つと清水は汲まず立所平すも
三五四七 味鳧の住む須佐の入江の隱沼の噫氣衝かし見ず久にして
三五四八 鳴瀨ろに木屑の依す如す甚除きて愛しけ夫ろに人さへ依すも
三五四九 多由比潟潮滿ち渡る何處ゆかも愛しき夫ろが吾許通はむ
三五五〇 押して否と稲は舂かねど浪の秀の甚振らしもよ昨夜一人宿て
三五五一 味鎌の潟に開く浪平瀨にも紐解くものか憐し人を措きて
三五五二 松が浦に驟る群立ち眞他言思ほすなもろ我が思ほ如すも
三五五三 味鎌の可家の湊に入る潮の言痛けくもか入りて寢まくも

三五五四 妹が寢る床の邊に石泳る水にもがもよ入りて寢まくも
三五五五 眞久良我の許我の渡の柄槙の音高しもな宿無へ兒故に
三五五六 鹽船の置かれば悲しさ宿つれば人言繁し汝を何かも爲む
三五五七 惱しけ人妻かもよ榜ぐ船の忘れは爲無な彌思ひ增すに
三五五八 逢はずして行かば惜しけむ眞久良我の許我榜ぐ船に君も逢はぬかも
三五五九 大船を舳へゆも艫ゆも口堅めてし許曾の里人顯はさめかも
三五六〇 眞金吹く丹生の眞朱の色に出て言はなくのみぞ我が戀ふらくは
三五六一 金門田を新搔き土乾裂み日が照れば雨を待と如す君をと待とも
三五六二 荒磯邊に生ふる玉藻の打靡き一人や宿らむ吾を待ち兼ねて
三五六三 比多我多の磯の若布の立亂え吾をか待つなも昨夜も今宵も
三五六四 小菅ろの浦吹く風の何ど爲々か愛しけ兒ろを思ひ過さむ
三五六五 彼の兒ろと寢ずやなりなむ幡薄浦野の山に月片寄るも
三五六六 我妹子に我が戀ひ死なばそこをかも神に負せむ心知らずて

防人歌

三五六七 置きて行かば妹は眞悲し持ちて行く梓の弓の弓束にもがも

三五六八　後れ居て戀ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

右の二首は問答

三五六九　防人に立ちし朝開の金門出に手放れ惜しみ泣きし兒らはも

三五七〇　葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲ばむ

三五七一　己妻を他の里に置き疎しく見つゝぞ來ぬる此道の間

譬喩歌

三五七二　何ど思へか阿自久麻山の弓弦葉の含まる時に風吹かずかも

三五七三　足引の山葛羅眞咨にも得がたき蘿を置きや枯らさむ

三五七四　小里なる花橘を引き攀ぢて折らむとすれど末若みこそ

三五七五　美夜自呂の岡邊に立てる貌が花莫咲き出でそね隱めて偲ばむ

三五七六　苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るゝ隨意に何か悲しけ

挽歌

三五七七　愛し妹を何處行かめと山菅の背向に宿しく今し悔しも

以前の歌詞、未だ國土山川の名を勘へ知ることを得ず、

卷十四　終

卷十五

天平八年丙子夏六月、新羅國に遣使さるゝ時、使人等各別を悲しみ贈り答へ、及海路にて情を慟しみ思を陳べて詠める歌并に所に當きて誦詠へる古歌一百四十五首

三五七八　武庫の浦の入江の渚鳥羽裏もる君を離れて戀に死ぬべし

三五七九　大船に妹乘るものにあらませば羽裏みもちて行かましものを

三五八〇　君が行く海邊の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ

三五八一　秋來らば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆しまさむ

三五八二　大船を荒海に出だし行ます君恙む事なく早歸りませ

三五八三　眞幸くと妹が齋はゞ沖つ浪千重に立つとも障あらめやも

三五八四　別れなば心悲しけむ我が衣下にを着ませ直に逢ふまでに

三五八五　我妹子が下にを着よと贈りたる衣の紐を我解かめやも

三五八六　我が故に思ひな痩せそ秋風の吹かむ其月逢はむもの故

三五八七　栲衾新羅へ行ます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ

三五八八　遙々に思ほゆるかも然れども異しき心を我が思はなくに

右の十一首は贈答

三五八九　夕來れば晩蟬來鳴く生駒山越えてぞ吾が來る妹が目を欲り

右の一首は秦間滿

三五九〇　妹に逢はずあらば術なみ石根履む生駒の山を越えてぞ我が來る

右の一首は蹔に私家に還りて思を陳ぶ

三五九一　妹と在りし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける

三五九二　海原に浮寢せむ夜は沖つ風痛くな吹きそ妹もあらなくに

三五九三　大伴の御津に船乘り榜ぎ出ては何れの島に廬せむ我

右の三首は發たむとする時詠める歌

三五九四　潮待つとありける船を知らずして悔しく妹を別れ來にけり

三五九五　朝開き榜ぎ出て來れば武庫の浦の潮干の潟に鶴が聲すも

三五九六　我妹子が形見に見むを印南都麻白浪高み外にかも見む

三五九七　海の沖つ白浪立ち來らし海人少女ども島隱る見ゆ

三五九八　烏玉の夜は明けぬらし多麻の浦に求食する鶴鳴き渡るなり

三五九九　月夜見の光を清み神島の磯回の裏ゆ船出す我は

三六〇〇　離磯に立てる室の木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも

三六〇一　暫くも一人あり得るものにあれや島の室の木離れてあるらむ

右の八首は乘船して海路上にいづる時詠める歌

所に當りて誦詠へる古歌

三六〇二　青丹吉奈良の都に棚引ける天の白雲見れど飽かぬかも

右の一首は雲を詠める

三六〇三　青柳の枝伐り下し殖種蒔き忌々しく君に戀ひ渡るかも

三六〇四　妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れて思へや

三六〇五　わたつみの海に出でたる飾磨河絶えむ日にこそ我が戀止まめ

右の三首は戀の歌

三六〇六　玉藻刈る乎等女を過ぎて夏草の野島が埼に廬す我は

三六〇七　白妙の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行く吾を

三六〇八　天離る鄙の長道を戀ひ來れば明石の門より家の邊見ゆ

三六〇九　武庫の海の海上好くあらし漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ

三六一〇　安胡の浦に船乘すらむ少女等が赤裳の裾に潮滿つらむか

三六一一　大船に眞楫繁貫き海原を榜ぎ出て渡る月人壯子

右柿本朝臣人麿の歌

備後國水調郡長井浦に船泊てし夜詠める歌三首

三六一二　青丹よし奈良の都に行く人もがも、草枕旅行く船の泊告げむに旋頭歌

右の一首は大判官

三六一三　海原を八十島がくり來ぬれども奈良の都は忘れかねつも

三六一四　歸途に妹に見せむに海の沖つ白玉拾ひて行かな

安藝國風速の浦に船泊てし夜詠める歌二首

三六一五　我が故に妹歎くらし風早の浦の沖邊に霧棚引けり

三六一六　沖つ風いたく吹きせば吾妹子が歎きの霧に飽かましものを

長門島の磯邊に船泊てゝ詠める歌五首

三六一七　石走る瀧もとゞろに鳴く蟬の聲をし聞けば京師し思ほゆ

右の一首は大石蓑麿

三六一八　山河の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも

三六一九　磯の間ゆ激つ山河絶えずあらば又も相見む秋片設けて

三六二〇　戀しげみ慰めかねて晩蟬の鳴く島陰に廬するかも

三六二一　我が命を長門の島の小松原幾代を經てか神さび渡る

長門浦より船出せし夜、月光を仰觀て詠める歌三首

三六二二　月讀の光を清み夕和に水手の聲呼び浦回榜ぐかも

三六二三　山の端に月傾けば漁する海人の燈火沖に漂ふ

三六二四　我のみや夜船は榜ぐと思へれば沖邊の方に楫の音すなり

古き挽歌一首并短歌

三六二五　夕來れば葦邊に騷ぎ、明來れば沖に漂ふ、鴨すらも妻と副ひて、我が尾には霜な降りそと、白妙の羽指交へて、打拂ひさ宿とふものを、行く水の還らぬ如く、吹く風の見えぬが如く、跡も無き世の人にして、別れにし妹が着せてし、褻衣袖片敷きて、獨かも寢む

反歌一首

三六二六　鶴が鳴き葦邊を指して飛び渡る鳴呼たづ〳〵し一人さ寢れば

右丹比大夫が亡れる妻を悲愴しめる歌

物に屬きて思を發ぶる歌一首并短歌

三六二七　朝來れば妹が手に纏く、鏡なす美津の浦邊に、大船に眞楫繁貫き、唐國に渡り行かむと、

直向ふ敏馬を指して、潮待ちて水脈導き行けば、沖邊には白波高み、浦廻より榜ぎて渡れば、吾妹子に淡路の島は、夕來れば雲居隱りぬ、小夜更けて行方を不知に、吾が心明石の浦に、船泊めて浮寢をしつゝ、海の沖邊を見れば、漁する海人の少女は、小船乘り列々に浮けり、曉の潮滿ち來れば、葦邊には鶴鳴き渡る、朝和に船出をせむと、船人も水手も聲喚び、鳴鳥の漂ひ行けば、家島は雲居に見えぬ、我が思へる心和ぐやと、早く來て見むと思ひて、大船を榜ぎ我が行けば、沖つ浪高く立ち來ぬ、外のみに見つゝ過ぎ行き、多麻の浦に船をとゞめて、濱邊より浦磯を見つゝ、哭く兒なす哭のみし泣かゆ、海神の手纏の珠を、家苞に妹に遺らむと、拾ひ取り袖には入れて、返し遣る使無ければ、持てれども益を無みと、又置きつるかも

反歌　二首

三六二八　多麻の浦の沖つ白珠拾へれど又ぞ置きつる見る人を無み

三六二九　秋來らば我が船泊てむ忘貝寄せ來て置けれ沖つ白波

周防國玖珂郡麻里布の浦を行く時詠める歌八首

三六三〇　眞楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に宿せましを

三六三一　何時しかも見むと思ひし粟島を外にや戀ひむ行く由を無み

三六三二　大船に戕舸振り立てゝ濱清き麻里布の浦に宿か爲まし

三六三三　粟島の逢はじと思ふ妹にあれや安眠も寢ずて我が戀ひ渡る

三六三四　筑紫路の可太の大島暫くも見ねば戀ひしき妹を置きて來ぬ

三六三五　妹が家路近くありせば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを

三六三六　家人は歸り早來と伊波比島齋ひ待つらむ旅行く我を

三六三七　草枕旅行く人を伊波比島幾代經るまで齋ひ來にけむ

大島の鳴門を過ぎて再宿經し後、追ひて詠める歌二首

三六三八　是や此の名に負ふ鳴門の高潮に玉藻刈る云ふ海人少女ども

右の一首は田邊秋庭

三六三九　浪の上に浮宿せし夜何ど思へか心愛しく夢に見えつる

熊毛浦に船泊てし夜、詠める歌四首

三六四〇　都方に行かむ船もが刈菰の亂れて思ふ言告げ遣らむ

右の一首は羽栗

三六四一　曉の家戀しきに浦廻より楫の音するは海人少女かも

三六四二　沖邊より潮滿ち來らし韓の浦に求食する鶴鳴きて騷ぎぬ

三六四三　沖邊より舟人のぼる呼び寄せていざ告げやらむ旅の宿を

佐婆の海中にて忽ち逆風漲浪に遭ひ漂流宿を經て後、幸に順風を得、豐前國下毛郡分間の浦に到着きぬ、於是艱難を追怛みて詠める歌八首

三六四四　大君の命恐み大船の行きの隨意に宿りするかも

右の一首は雪宇麻呂

三六四五　我妹子は早も來ぬかと待つらむを沖にや住まむ家附かずして

三六四六　浦廻より榜ぎ來し船を風早み奥つ御沖に宿りするかも

三六四七　吾妹子が如何に思へか烏玉の一夜も闕ちず夢にし見ゆる

三六四八　海原の沖邊に燭し漁る火は明して燭せ大和島見む

三六四九　鴨自物浮宿をすれば蜷の腸か黑き髮に露ぞ置きにける

三六五〇　久方の天照る月は滿つれども我が思ふ妹に逢はぬ頃かも

三六五一　烏玉の夜渡る月は早も出でぬかも、海原の八十島の上ゆ妹が邊見む旋頭歌なり

筑紫館に至り本鄕を遥望け悽愴みて詠める歌四首

三六五二　志珂の海人の一日も闕ちず燒く鹽の辛苦き戀をも我はするかも

三六五三　志珂の浦に漁する海人家人の待ち戀ふらむに徹夜し釣る魚

三六五四　可之布江に鶴鳴き渡る志珂の浦に沖つ白浪立ち重くらしも

三六五五　今よりは秋づきぬらし足引の山松蔭に晩蟬鳴きぬ

七夕天の河を仰觀け各々所思を陳べて詠める歌三首

三六五六　秋萩に染へる吾が裳沾れぬとも君が御船の綱し取りてば

右の一首は大使

三六五七　年にありて一夜妹に逢ふ彦星も我に益りて思ふらめやも

三六五八　夕月夜影立ち寄り合ひ天の河榜ぐ船人を見るが羨しさ

海邊にて月を望て詠める歌九首

三六五九　秋風は日に日に吹きぬ我妹子は何時かと我を齋ひ待つらむ

大使之第二男

三六六〇　神さぶる荒津の埼に寄する浪間無くや妹に戀ひ渡りなむ

右の一首は土師稻足

三六六一　風の共寄せ來る浪に漁する海人少女等が裳の裾沾れぬ

三六六二　天の原振放け見れば夜ぞ更けにける、縱しゑやし一人寢る夜は明けば明けぬとも旋頭歌なり

三六六三　海の沖つ繩苔來る時と妹が待つらむ月は經につゝ

三六六四　志珂の浦に漁する海人明來れば浦回榜ぐらし楫の音聞ゆ
三六六五　妹を思ひ寢の寢らえぬに曉の朝霧隱り雁がねぞ鳴く
三六六六　夕來れば秋風寒し我妹子が解洗衣行きて早着む
三六六七　我が旅は久しくあらし此の吾が着る妹が衣の垢着く見れば

筑前國志麻郡の韓亭に船泊てて三日經ぬ、時に夜月の光皎々流照れり、奄ち此華に對りて旅の情を悽噎しみ各心緒を陳べて聊以裁る歌六首

三六六八　大君の遠の朝廷と思へれど來經長くしあれば戀ひにけるかも

右の一首は大使

三六六九　旅にあれど夜は火燭し居る我を闇にや妹が戀ひつゝあるらむ

右の一首は大判官

三六七〇　韓亭能許の浦浪立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日は無し
三六七一　烏玉の夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて來ましを
三六七二　久方の月は照りたり隙なく海人の漁火は燭し合へり見ゆ
三六七三　風吹けば沖つ白浪恐みと能許の泊に數多夜ぞ宿る

引津亭に船泊てし時詠める歌七首

三六七四　草枕旅を苦しみ戀ひ居れば可也の山邊にさ牡鹿鳴くも
三六七五　沖つ浪高く立つ日に遇へりきと都の人は聞きてけむかも

右の二首は大判官

三六七六　天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ
三六七七　秋の野を染はす萩は咲けれども見る益無し旅にしあれば
三六七八　妹を思ひ寐の寢らえぬに秋の野にさ牡鹿鳴きつ妻思ひかねて
三六七九　大船に眞楫繁貫き時待つと我は思へど月ぞ經にける
三六八〇　夜を長み寐の寢らえぬに足引の山彦響めさ牡鹿鳴くも

肥前國松浦郡狛島亭に船泊てし夜、海浪を遥望けて各旅心を慟しみて詠める歌七首

三六八一　歸り來て見むと思ひし我が宿の秋萩薄散りにけむかも

右の一首は秦田滿

三六八二　天地の神を乞祈ひつゝ吾待たむ早來ませ君待たば苦しも

右の一首は娘子

三六八三　君を思ひ吾が戀ひまくは荒玉の立つ月毎に避くる日もあらじ
三六八四　秋の夜を長みにかあらむ何ぞ幾許寐の寢らえぬも一人宿ればか

三六八五　足姫御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は經につゝ

三六八六　旅なれば思ひ絶えてもありつれど家に在る妹し思ひ悲しも

三六八七　足引の山飛び越ゆる雁がねは都に行かば妹に逢ひて來ね

壹岐島に到りて雪連宅滿が忽ち鬼病にて死去れる時詠める歌

三六八八　天皇の遠の朝廷と、韓國に渡る我が夫は、家人の齋ひ待たねか、疊かも過失しけむ、秋來らば歸りまさむと、垂乳根の母に申して、時も過ぎ月も經ぬれば、今日か來む明日かも來むと、家人は待ち戀ふらむに、遠の國未だも着かず、大和をも遠く離りて、石が根の荒き島根に、宿する君

反歌二首

三六八九　石田野に宿する君家人の何等と我を問はゞ如何に言はむ

三六九〇　世の中は常斯くのみと別れぬる君にやもとな吾が戀ひ行かむ

右の三首は（字欠）挽歌

三六九一　天地と共にもがもと、思ひつゝありけむものを、愛しけやし家を離れて、浪の上ゆ漂ひ來にて、新玉の月日も來經ぬ、雁がねも續ぎて來鳴けば、垂乳根の母も妻等も、朝露に裳の裾濕ち、夕霧に衣手沾れて、幸くしもあるらむ如く、出で見つゝ待つらむものを、世の中の人の歎は、相思はぬ君にあれやも、秋萩の散らへる野邊の、初尾花假廬に葺きて、雲離れ遠き國邊の、露霜の寒き山邊に、宿りせるらむ

反歌二首

三六九二　愛しけやし妻も兒等も高々に待つらむ君や島隱れぬる

三六九三　黄葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも

右の三首は葛井連子老が詠める挽歌

三六九四　大海の恐き路を、安けくも無く煩み來て、今だにも凶事なく行かむと、壹岐の海人の上手の卜筮を、肩灼きて行かむとするに、夢の如道の空路に、別れする君

反歌二首

三六九五　昔より言ひける言の韓國の辛くも此處に別れするかも

三六九六　新羅へか家にか歸る壹岐の島行かむ方便も思ひかねつも

右の三首は六鯖が詠める挽歌

對馬島の淺茅浦に舶泊てし時、順風を得ず、停りて五箇日を經き、於是物華を瞻望りて各慟心を陳べて詠める歌三首

三六九七　百船の泊つる對馬の淺茅山時雨の雨に黄葉ひにけり

三六九八 天離る鄙にも月は照れゝども妹ぞ遠くは別れ來にける
三六九九 秋來れば置く露霜に堪へずして京師の山は色づきぬらむ

竹敷の浦に舶泊てし時、各心緒を陳べて詠める歌十八首

三七〇〇 足引の山下耀る黄葉の散の飛亂は今日にもあるかも

右の一首は大使

三七〇一 竹敷の黄葉を見れば我妹子が待たむと言ひし時ぞ來にける

右の一首は副使

三七〇二 竹敷の浦回の黄葉我行きて歸り來るまで散りこすな努

右の一首は大判官

三七〇三 竹敷の上方山は紅の八入の色になりにけるかも

右の一首は少判官

三七〇四 黄葉の散らふ山邊ゆ榜ぐ船の艶色に愛でゝ出でゝ來にけり
三七〇五 竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君が御船を何時とか待たむ

右の二首は對島娘子名は玉槻

三七〇六 玉敷ける清き渚を潮滿てば飽かず吾行く歸途に見む

右の一首は大使

三七〇七 秋山の黄葉を挿頭し我が居れば浦潮滿ち來未だ飽かなくに

右の一首は副使

三七〇八 物思ふと人には見えじ下紐の心裏ゆ戀ふるに月ぞ經にける

右の一首は大使

三七〇九 家苞に貝を拾ふと沖邊より寄せ來る浪に衣手沾れぬ
三七一〇 潮干なば又も我來むいざ行かむ沖つ潮騷高く立ち來ぬ
三七一一 我が袖は袂通りて沾れぬとも戀忘貝採らずは行かじ
三七一二 烏玉の妹が乾すべくあらなくに我が衣手を沾れて如何にせむ
三七一三 黄葉は今はうつろふ我妹子が待たむと言ひし時の經行けば
三七一四 秋來れば戀しみ妹を夢にだに久しく見むを明けにけるかも
三七一五 一人のみ着ぬる衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして
三七一六 天雲の猶豫ひ來れば九月の黄葉の山もうつろひにけり
三七一七 旅にても凶事無く早來と我妹子が結びし紐は褻れにけるかも

筑紫の海路に回來て京に入らむと播磨國家島に到れる時、詠める歌五首

三七一八　家島は名にこそありけれ海原を我が戀ひ來つる妹もあらなくに

三七一九　草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の經ぬらく

三七二〇　我妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家附くらしも

三七二一　烏玉の夜明しも船は漕ぎ行かな御津の濱松待ち戀ひぬらむ

三七二二　大伴の御津の泊に船泊てゝ立田の山を何時か越え往かむ

中臣朝臣宅守が藏部の女に娶ひて狹野茅上娘子を嫂へる時、勅して流罪に斷めて越前國に配ち給へり、於是夫婦別れ易く會ひ難きを相嘆き各慟情を陳べて、贈り答ふる歌六十三首

三七二三　足引の山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし

三七二四　君が行く道の長路を繰疊み燒き亡ぼさむ天の火もがも

三七二五　我が夫子し蓋し罷らば白妙の袖を振らさね見つゝ偲ばむ

三七二六　此頃は戀ひつゝもあらむ玉匣明けて後より術なかるべし

右の四首は別れむとして娘子が悲嘆しみ詠める歌

三七二七　塵泥の數にもあらぬ我故に思ひ侘ぶらむ妹が悲しさ

三七二八　青丹吉奈良の大路は行き善けど此山路は行き惡しかりけり

三七二九　愛しと吾が思ふ妹を思ひつゝ行けばかもとな行き惡しかるらむ

三七三〇　恐みと告らずありしをみ越路の峠に立ちて妹が名告りつ

右の四首は中臣朝臣宅守が上道して詠める歌

三七三一　思ふ儘に逢ふものならば暫くも妹が目離れて我居らめやも

三七三二　赤根刺す晝は物思ひ烏玉の夜は終夜に哭のみし泣かゆ

三七三三　我妹子が形見の衣無かりせば何物以てか命繼がまし

三七三四　遠き山關も越え來ぬ今更に逢ふべき由の無きが不樂しさ

三六三五　思はずも眞有り得むやさ寢る夜の夢にも妹が見えざらなくに

三七三六　遠くあれば一日一夜も思はずてあるらむものと思ほし召すな

三七三七　他人よりは妹ぞも惡しき戀もなくあらましものを思はしめつゝ

三七三八　思ひつゝ寢ればかもとな烏玉の一夜も闕ちず夢にし見ゆる

三七三九　斯くばかり戀ひむと豫て知らませば妹をば見ずぞあるべくありける

三七四〇　天地の神祇無きものにあらばこそ我が思ふ妹に逢はず死せめ

三七四一　命をし全くしあらば珠衣の在りて後にも逢はざらめやも

三七四二　逢はむ日を其日と知らず常闇に何れの日まで我戀ひ居らむ

三七四三　旅と言へば言にぞ易き少くも妹に戀ひつゝ術無けなくに

三七四四　我妹子に戀ふるに我は靈剋短き命も惜しけくもなし

右の十四首は配所に至りて中臣朝臣宅守が作める歌

三七四五　生命あらば逢ふ事もあらむ我が故に將な思ひそ命だに經ば

三七四六　人の植うる田は植ゑまさず今更に國別れして吾は如何にせむ

三七四七　わが宿の松の葉見つゝ吾待たむ早還りませ戀ひ死なぬ内に

三七四八　他國は住惡しとぞ言ふ速けく早歸りませ戀ひ死なぬ内に

三七四九　他國に君を座せて何時までか吾が戀ひ居らむ時の知らなく

三七五〇　天地の至極の限に吾が如く君に戀ふらむ人は眞實あらじ

三七五一　白妙の我が下衣失はず持てれ我が背子直に逢ふまでに

三七五二　春の日の心愛憐しきに後れ居て君に戀ひつゝ顯しけめやも

三七五三　逢はむ日の形見にせよと手弱女の思ひ亂れて縫へる衣ぞ

右の九首は娘子が京に留り悲傷しみて詠める歌

三七五四　簡札なしに關飛び越ゆる時鳥我が身にもがも止まず通はむ

三七五五　愛しと我が思ふ妹を山川を中間に隔りて安けくもなし

三七五六　向ひ座て一日も闕ちず見しかども厭はぬ妹を月わたるまで

三七五七　我が身こそ關山越えて此處にあらめ心は妹に依りにしものを

三七五八　さすたけの大宮人は今もかも人嬬のみ好みたるらむ

三七五九　繰返り泣けども我は效驗なみ思ひ侘ぶれて寢る夜しぞ多き

三七六〇　さ寢る夜は多くあれども物思はず安く眠る夜は眞實なきものを

三七六一　世の中の常の道理斯く樣になり來にけらし蒔ゑし種子から

三七六二　我妹子に逢坂山を越えて來て泣きつゝ居れど逢ふ由も無し

三七六三　旅と云へば言にぞ易き術もなく苦しき旅も兒らに益さめやも

三七六四　山川を中間に隔りて遠くとも心を近く思ほせ我妹

三七六五　眞十鏡懸けて偲べと奉り出す形見の物を人に示すな

三七六六　愛しと思ひし思はゞ下紐に結ひ著け持ちて止まず偲ばせ

右の十三首は配所より中臣朝臣宅守が贈れる歌

三七六七　魂は朝夕に鎭魂れど我が胸痛し戀の繁きに

三七六八　此頃は君を思ふと術も無き戀のみ爲つゝ哭のみしぞ泣く

三七六九　烏玉の夜見し君を明る朝逢はずまにして今ぞ悔しき

三七七〇　味眞野に宿れる君が歸り來む時の迎へを何時とか待たむ

三七七一 家人の安眠も寢ずて今日今日と待つらむものを見えぬ君かも

三七七二 歸りける人來れりと云ひしかばほと〳〵しにき君かと思ひて

三七七三 君が共行かましものを同じ事後れて居れど良き事もなし

三七七四 我が背子が歸り來まさむ時のため命殘さむ忘れ給ふな

右の八首は娘子が和贈ふる歌

三七七五 新玉の年の緒長く逢はざれど異しき心を我が思はなくに

三七七六 今日もかも京なりせば見まく欲り西の御廐の外に立てらまし

右の二首は中臣朝臣宅守が更贈れる歌

三七七七 昨日今日君に逢はずて爲る術の方便を不知に哭のみしぞ泣く

三七七八 白妙の我が衣手を取り持ちて齋へ我が背子直に逢ふまでに

右の二首は娘子が和贈ふる歌

三七七九 我が宿の花橘は徒に散りか過ぐらむ見る人なしに

三七八〇 戀ひ死なば戀ひも死ねとや時鳥物思ふ時に來鳴き響むる

三七八一 旅にして物思ふ時に時鳥もとな勿鳴きそ我が戀益る

三七八二 雨隱り物思ふ時に時鳥我が住む里に來鳴き響もす

三七八三 旅にして妹に戀ふれば時鳥我が住む里に此よ鳴き渡る

三七八四 情なき鳥にぞありける時鳥物思ふ時に鳴くべきものか

三七八五 時鳥間少時置け汝が鳴けば我が思ふ心甚も術無し

右の七首は中臣朝臣宅守が花鳥に寄せ思を陳べて詠める歌

卷十五 終

卷十六

有由縁并雜歌

昔者娘子ありけり、字をば櫻兒と曰ふ、于時二壯士ありて、共に此娘を誂ふ、而して生を捐て〻格競ひ、死を貪りて相敵みたりき、於是娘子歎きけらく、古より以來一女の身、二門に往くといふ事を聞かず、方今壯士の意和平び難し、妾死りて相害ふ事を永に息めなむには如かじと云ひて、乃ち林中に入り樹に懸り經死にき、其兩壯士哀慟血泣漣襟に敢へず、各心緒を陳べて詠める歌二首

三七八六　春來らば挿頭に爲むと我が思ひし櫻の花は散りにけるかも

三七八七　妹が名に懸かせる櫻花咲かば常にや戀ひむ彌毎年に

或の曰く、昔三の男ありて同に一の女を娉ひき、娘子(字をば縵兒といふ)嘆息けらく、一の女の身滅易きこと露の如し、三の雄の志平び難きこと石の如しと云ひて、遂に乃ち池上に仿徨り水底に沈没みき、於時其壯士等哀頌之至に勝へず、各所心を陳べて詠める歌三首

三七八八　無耳の池し恨めし吾妹子が來つ〻潛かば水は涸れなむ

三七八九　足引の山縵の兒今日往くと吾に告りせば早く來ましを

三七九〇　足引の山縵の兒今日の如何れの隈を見つ〻來にけむ

昔老翁あり、竹取翁と曰ふ、此翁季春之月に丘に登りて遠望する時、忽羹を煮る九箇女子に値へりき、百嬌傳無く、花容止なし、時に娘子等老翁を呼び嗤ひて、叔父來て此鍋火を吹けと曰ふ、於是翁唯々と曰ひて、漸趍徐行きて座上に著接たりき、良久ありて娘子等皆共に含咲み相推讓り曰らく、阿誰ぞ此翁を呼びし哉、乃ち竹取翁の曰ふ、非慮の外に神仙に偶逢ひ、迷惑へる心敢禁へ難し、近く狎れし罪、謂以ちて希贖さむ、卽ち詠める歌一首

並短歌

三七九一　綠兒の若子が身には、垂乳爲母に懷かえ、襁かくる這ふ兒が身には、木綿肩衣純裏に縫ひ著、頸著の童子が身には、夾纈の袖清衣、着し我をあによる兒等が、同年輩には蜷の腸、か黑し髮を、眞櫛もち肩に搔垂れ、取り束ね擧げても纏きみ、解き亂し童兒に成しみ、紅の丹つかふ色に、懷しき紫の、大綾の衣、住吉の遠里の小野の、眞榛以ち染しし衣に、高麗錦紐に縫着け、指さへ重なへ竝み重ね着、全麻やし麻績の兒等、あり衣の寶の兒等が、打栲延へて織る布、日曝の麻紵を、しき裳なす重に取り敷き、誇ろへる稻置丁女が、娉ふと我にぞ賜りし、浮文の二綾襪、飛ぶ鳥の飛鳥壯が、霖禁み縫ひし黑沓、指穿きて庭に立ち往廻

れば、母刀自の守らす少女が、髣髴聞きて我にぞ賜りし、水縹の絹の帶を、引帶如す韓帶に取らし、海神の殿の甍に、飛び翔る鑾鸞の如き、腰細に取り飾らひ、眞十鏡取雙め懸けて、己が貌還らひ見つゝ、春來りて野邊を廻れば、面白み我を思へか、さ野つ鳥鳴き翔らふ、秋去りて山邊を行けば、懷しと我を思へか、天雲もい行き棚引き、還り立ち大路を來れば、うち日さす宮女、刺竹の舍人壯士も、忍ぶらひ還らひ見つゝ、誰が子ぞとや思はれてある、斯くぞ爲來し、古の私語きし我や、愛しきやし今日やも兒等に、不知にとや思はれてある、斯くぞ爲來し、古の賢しき人も、後の世の鑑にせむと、老人を送りし車、持ち還り來し

反歌　二首

三七九一　死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髮兒等に生ひざらめやも

三七九三　白髮し兒等も生ひなば斯くの如若けむ子等に罵らえかねめや

娘子等和ふる歌九首

三七九四　愛しきやし老夫の歌に鬱悒しき九の兒等や感けて居らむ

三七九五　辱を忍び辱を默りて事も無く物言はぬ先に我は服從りなむ

三七九六　否も諾も欲の隨に赦すべき貌は見えや我も服從りなむ

三七九七　死も生も同じ心と結びてし友や違はむ我も服從りなむ

三七九八　何爲とか違ひは居らむ否も諾も友の竝々我も服從りなむ

三七九九　何もあらぬ自が身の故他の子の言も盡さじ我も服從りなむ

三八〇〇　旗薄穗には出でじと偲びたる情は知れつ我も服從りなむ

三八〇一　住吉の岸の野榛に染へれど染はぬ我や媚ひて居らむ

三八〇二　春の野の下草靡き我も依り媚ひ依りなむ友の隨意

昔者壯士と美女とありき、二親に告せずして竊び交接たりき、時に娘子の意に親に知らせまく思ひて、歌詠みて其夫に送れる其歌

三八〇三　隱りのみ戀ふれば苦し山の端ゆ出で來る月の顯さば如何に

右或は曰く、男に答歌ありといへり、未だ探り求むることを得ず、

昔者壯士ありけり、新に婚禮して幾時も經らねば、忽に驛使と爲りて遠き境に遣さる、公事限有り、會ふ期日無し、於是娘子感慟悽愴みて疾に沈臥れりき、年を累て後、壯士還り來て覆命既了て、乃ち詣き相視るに、娘子の姿容痛羸甚異れて、言語咽嗄びき、時に壯士哀嘆流涙みて裁歌口號せる、其歌一首

三八〇四　如是のみにありけるものを猪名川の奥を深めて吾が念へりける

娘子臥しながら夫君の歌を聞きて、枕より頭を擧げ聲に應じ和ふる歌一首

三八〇五　烏玉の黑髮沾れて沫雪の降るにや來ます許多戀ふれば

娘子が夫に贈れる歌一首

三八〇六　事しあらば小泊瀨山の石城にも隱らば共にな思ひ吾が夫

右傳云けらく、昔女子ありけり、父母に知らせずして壯士に纏接ひたりき、壯士其親の呵嘖を悚惕みて稍猶豫ふ意あり、此に因りて娘子此歌を詠みて其夫に贈れりと言へり、

前采女が詠める歌一首

三八〇七　安積香山影さへ見ゆる山の井の淺き心を吾が思はなくに

右の歌は傳云けらく、葛城王陸奥國に遣さえし時、國司祗承緩怠異甚なりければ、王の意に悅びず怒色顯面まして、飲饌を設けしかども宴樂をも肯給はざりき、於是前采女風流娘子ありて、左の手に觴を捧げ、右の手に水を持ち王の膝に擊ちて此歌を詠みき、爾乃王の意解脫みて終日に樂飲びきと言へり、

鄙人の作める歌一首

三八〇八　住吉の小集樂に出でゝ正目にも己妻すらを鏡と見つも

右傳云けらく、昔者鄙人あり、時に鄕里の男女、集ひて野の遊せりき、この會衆の中に鄙人夫婦あり、其の婦容姿端正しきこと衆諸に秀れたり、乃ち彼の鄙人の意、妻を愛しむ情、彌增りてこの歌を作みて美貌を讚嘆めたりき、

娘子が怨恨み作みて献れる歌一首

三八〇九　商變へし領らせとの御法あらばこそ吾が下衣返し賜らめ

右傳云けらく、昔幸せらえし娘子あり、寵薄へる後、寄物を還し賜りき、於是娘子怨みて聊か斯の歌を作みて献上りき、

娘子が怨恨みて詠める歌一首

三八一〇　味飯を水に釀みなし吾が待ちし代は曾て無し直にしあらねば

右傳云けらく、昔娘子あり、其夫に相別れ年を經て望戀りき、爾時に夫の君更に他妻を娶て正身は來ずして徒に裹物を贈せりき、此に因り娘子此の恨みの歌を詠みて還酬れりき、

娘子が夫君を戀ふる歌一首並短歌

三八一一　さ丹づらふ君が御言と、玉梓の使も來ねば、憶ひ病む吾が身一つぞ、千磐破る神にもな負せ、卜部座せ龜もな燒きそ、戀しくに痛き吾が身ぞ、いちじろく身に染みとほり、村肝の心碎けて、死なむ命俄になりぬ、今更に君が吾を喚ぶ、垂乳根の母の命か、百足らず八十の衢に、夕占にも卜にもぞ問ふ、死ぬべき吾が故

反歌

三八一三　卜部をも八十の衢も占問へど君を相見む爲方知らずも

或本の反歌に曰く

三八一三　吾が命は惜しくもあらずさ丹づらふ君に依りてぞ長く欲りせし

右傳云けらく、時娘子ありけり、（姓車持氏也）其夫年序を久逕て往來ず、時に娘子係戀傷心つつ痾疹に沈臥れりき、日に異に羸羸れて、忽ち臨泉路なむとす、於是使を遣はして其夫君を喚ぶ、來て即ち獻歌流涕つゝ斯の歌を口號みて登時逝沒りき、

壯士が娘子の父母に贈れる歌一首

三八一四　眞珠は緒絶えしにきと聞きし故に其緒復貫き吾が玉にせむ

答ふる歌一首

三八一五　白玉の緒絶えは信然れども其緒又貫き人持ち去にけり

右傳云けらく、時娘子あり、夫君に棄てらえて他の氏に改適きき、時に或壯士ありて改適くを知らずて、此歌を贈遣りて、女の父母に請ひき、於是父母の意けらく壯士委曲の旨を知らじと思ひて、乃彼の歌に報へ送り改適きし緣を顯せりきといへり、

穗積親王の御誦歌一首

三八一六　家に有りし櫃に鏁刺し藏めてし戀の奴のつかみ懸りて

右の歌一首は穗積親王の宴飲し給ふ時、好も斯の歌を誦ひて恒賞と爲し給へり、

河村王の誦ひたまへる歌二首

三八一七　柄臼は田廬の下に吾が夫子は莞爾に笑みて立ちませり見ゆ

三八一八　朝霞鹿火屋が下に鳴く河蝦偲びつゝありと告げむ兒もがも

右の歌二首は河村王の宴せる時、琴を彈きて即ち先づ此歌を誦みて常行と爲し給ひき、

小鯛王の吟ひたまへる歌二首

三八一九　夕立の雨打降れば春日野の草花が末の白露思ほゆ

三八二〇　夕づく日さすや河邊に造る屋の形を宜しみ諾ぞ寄り來る

右の歌二首は小鯛王の宴居の日、琴を取る登時必先此歌を吟詠ひ給ひき、（小鯛王は、更の名、置始多久美といふ、この人なり）

兒部女王の嗤の歌一首

三八二一　美麗物何所飽かじを尺度等し角のふくれに婚娶ひにけむ

右、時娘子あり、（姓尺度氏也）此娘子高姓美人の所誂ふを聽かずて、下姓醜士の所誂ふを應許き、於是兒部女王此歌を裁作みて彼の愚を嗤咲り給ふ、

古歌に曰く

三八二三　橘の寺の長屋に吾が率宿し童女放髮は結髮げつらむか

右の歌は、椎野連長年が説に曰く、夫れ寺家の屋は俗人の寢處にあらず、亦若冠の女を偁ひて放髮艸と曰へり、然れば則ち腰句已に放髮艸と云へれば、尾句に重ねて著冠の辭を云ふ可からざるをや、改めて曰く

三八三　橘の光れる長屋に吾が率宿し童女放髮に髮あげつらむか

長忌寸意吉麻呂が歌八首

三八四　銚子に湯沸かせ子等櫟津の檜橋より來む狐に浴むさむ

右の一首は傳曰けらく、一時衆集ひて宴飲す、時に夜漏三更て狐の聲聞ゆ、乃ち衆諸興麿を誘ひ曰く、此饌具雜器、狐の聲河橋に關けて作歌めと云へり、即ち聲に應へて此歌を詠めり、

三八五　食薦敷き蓼菁煮持ち來梁に行騰懸けて息む此の君

右の一首は行騰、蓼青、食薦、屋梁を詠める歌

三八六　蓮葉は斯くこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし

右の一首は荷葉を詠める歌

三八七　一二の目のみにあらず五六三四さへあり雙六の采

右の一首は雙六の采を詠める歌

三八八　香燒ける塔にな依りそ川隈の屎鮒喫める痛き女奴

右の一首は香、塔、厠、屎、鮒、奴を詠める歌

三八九　醬酢に蒜搗き合てゝ鯛願ふ吾になる見せそ水葱の羹

右の一首は酢、醬、蒜、鯛、水葱を詠める歌

三八三〇　玉掃刈り來鎌麻呂室の木と棗が本をかき掃かむ爲

右の一首は玉、掃、鎌、天木香、棗を詠める歌

三八三一　池神の力士儛かも白鷺の桙啄ひ持ちて飛び渡るらむ

右の一首は白鷺の木を啄ひて飛ぶを詠める歌

忌部首が數種の物を詠める歌一首

三八三二　枳の棘原苅り除け倉立てむ屎遠く脫れ櫛造る刀自

境部王の數種の物を詠み給へる歌一首　穗積親王の子なり

三八三三　虎に乘り古屋を越えて青淵に鮫龍取り來む劔刀もが

作者未詳歌一首

三八三四　梨棗黍に粟嗣ぎ延ふ葛の後も逢はむと葵花咲く

新田部親王に獻れる歌一首

三八三五　勝間田の池は吾知る蓮無し然か言ふ君が鬚無き如し

右或人聞へ曰く、新田部親王堵裡に出遊まして勝間田の池を御見して諸を御心の中に感で給ひ彼池より還りまして不忍憐愛て婦人に語り給はく、今日遊行きて勝間田の池を見しに水影濤々へて蓮花灼々けり、その司憐斯腸、不可得言、爾乃婦人此戯歌を詠みて專輙吟詠ひきと言へり、

侯人を誇れる歌一首

三八三六　奈良山の兒手柏の兩面に左にも右にも侯人の徒

右の歌一首は博士消奈公行文大夫が詠める

荷葉を詠める歌一首

三八三七　久堅の雨も降らぬか蓮葉に渟れる水の玉に似たる見む

右の歌一首は傳云けらく、右兵衛(姓名未詳)あり、歌作之藝に多能たり、于時府家酒食を備設て府の官人等を饗宴す、於是饌食を盛るに皆荷葉を用ふ、諸人酒酣にして歌舞ひ絡驛乃ち兵衛を誘ひて云ふ、其荷葉に關けて歌を詠めと云へり、登時聲に應へて斯の歌を詠めり、

心の著く所無き歌二首

三八三八　吾妹子が額に生ひたる雙六の牡牛の倉の上の瘡

三八三九　吾が背子が犢鼻にせる圓石の吉野の山に氷魚ぞ懸れる

右の歌は舍人親王、侍座に令ち曰く、或由る所無き歌を作む者あらば錢帛を賜らむと告り給へり、時に大舍人安倍朝臣子祖父乃ち此歌を作みて獻上る、登時募る所の物錢二千文給へりき、

池田朝臣が大神朝臣奥守を嗤る歌一首

三八四〇　寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りて其子殖む

大神朝臣奥守が報嗤る歌一首

三八四一　佛造る眞朱足らずは水渟る池田の朝臣が鼻の上を掘れ

或は云ふ

平群朝臣が穂積朝臣を嗤咲る歌一首

三八四二　小兒ども草はな刈りそ八穂蓼を穂積の朝臣が腋草を刈れ

穂積朝臣が和ふる歌一首

三八四三　何所ぞ眞朱掘る岳鷹疊平群の朝臣が鼻の上を掘れ

土師の宿禰水通が巨勢の朝臣豐人が黑色を嗤咲る歌一首

三八四四　烏玉の斐太の大黑見る毎に巨勢の小黑し思ほゆるかも

巨勢朝臣豐人が答ふる歌一首

三八四五　駒造る土師の志婢麻呂白くあれば諾欲しからむ其黑色を

右の歌は傳云けらく、大舍人土師宿禰水通といふものあり、字をば志婢麻呂と曰へり、時に大舍人巨勢朝臣豐人、字をば正月麻呂と曰へり、巨勢斐太朝臣(名字之を忘る、島村大夫の男也)

と兩人皆貌黑かりき、於是土師宿禰水通斯の歌を作みて嗤りぬ、かくて巨勢朝臣豐人之を聞きて卽ち和歌を詠みて酬咲りきといへり、

戲に僧を嗤る歌一首

三八四六　法師等が鬚の剃杙馬繫ぎ痛くな引きそ僧半缺む

法師が報ふる歌一首

三八四七　檀越や然もな言ひそ里長等が課役徵らば汝も半缺む

夢裡に詠める歌一首

三八四八　新墾田の鹿猪田の稻を倉に藏めて嗚呼ひね〳〵し吾が戀ふらくは

右の歌一首は忌部首黑麿が夢裡に此戀歌を作みて友に贈り、覺めて誦習はしむるに前の如しと云ふ、

世間の常なきを厭ふ歌三首

三八四九　生死の二つの海を厭はしみ潮干の山を忍びつるかも

三八五〇　世間の醜假廬に住み〳〵て至らむ國の方便知らずも

三八五一　鯨魚取り海や死する山や死する死ねこそ海の潮干て山は枯れすれ

右の歌三首は河原寺の佛堂の裡の倭琴の面に在り、

藐姑射山の歌一首

三八五二　心をし無何有の鄕に置きてあらば藐姑射の山を見まく近けむ

右の歌一首は作主未詳

瘦人を嗤咲る歌二首

三八五三　石麻呂に吾物申す夏痩に良しと云ふ物ぞ鰻取り食せ

三八五四　痩す痩すも生けらばあらむを將や將鰻を漁ると河に流るな

右、吉田連老と云ふ人あり、石麻呂と曰へり、所謂仁敎の子なり、其の老、爲人身體甚く痩せたり、多く飲食へども、形飢饉の似し、これに因りて大伴宿禰家持、聊か斯の歌を作みて戲咲りぬ、

高宮王の數種の物を詠み給へる歌二首

三八五五　葛英に延ひ蔓れる屎葛絶ゆる事なく宮仕へせむ

三八五六　婆羅門の作れる小田を喰む烏　喙　腫れて幡幢に居り

夫の君を戀ふる歌一首

三八五七　飯喫めど甘くもあらず、歩けども安くもあらず、茜さす君が心し忘れかねつも

右の歌一首は傳云けらく、佐爲王近習婢あり、時に宿直の遑なく夫の君遇ひ難し、感情鞅結

れ係戀實に深し、こゝに宿に當る夜、夢の裡に相見る、覺寤きてかき探れども手にも觸れず、乃哽咽歔欷、高聲此歌を吟詠ひき、因王之を聞かして哀慟み給ひ永に侍宿する事を免しき、

戀歌二首

三八五八　此頃の吾が戀力記し集め功に申さば五位の冠

三八五九　此頃の吾が戀力給らずは京職に出でゝ訴へむ

右の歌二首は作者未詳

筑前國志賀の白水郎が歌十首

三八六〇　大君の遣はさなくに情進に行きし荒雄ら沖に袖振る

三八六一　荒雄らを來むか來じかと飯盛りて門に出で立ち待てど來まさず

三八六二　志賀の山痛くな伐りそ荒雄らが所緣の山と見つゝ偲ばむ

三八六三　荒雄らが去きにし日より志賀の海士の大浦田沼は不樂しからずや

三八六四　官こそ差しても遣らめ情出に行きし荒雄ら波に袖振る

三八六五　荒雄らは妻子の產業をば思はずろ年の八歲を待てど來まさず

三八六六　沖つ鳥鴨云ふ船の還り來ば也良の埼守早く告げこそ

三八六七　沖つ鳥鴨云ふ船は也良の埼回みて榜ぎ來と聞え來ぬかも

三八六八　沖行くや朱塗小船に裹遣らば若し人見て解き披け見むかも

三八六九　大船に小船引き副へ潛くとも志賀の荒雄に潛き遇はめやも

右、神龜年中、太宰府筑前國宗像郡の百姓宗形部津麻呂を差して、對馬の粮を送る船の拖師に充つ、時に津麻呂澤屋郡志賀村の海士荒雄が許に詣きて語曰く、僕小事あり、若疑許さじか、荒雄答曰く僕郡異れども船に同乘ること日久し、志兄弟より篤し、殉死ぬとも豈も復辭まむ、津麻呂曰く、府官僕を差して對馬の粮を送る船の拖師に充つ、容齒衰老へ海路に堪へず、故來り祇候ふ、願はくは相替りてよ、於是荒雄許諾ひて遂に彼事に從ひ、肥前國松浦縣美彌良久崎より發船して直に對馬を射して海を渡る、登時忽天暗冥り、暴風雨に交り、竟に順風無くして海中に沈沒みき、因斯妻子等特慕び不勝て此歌を裁作めり、或は云ふ、筑前國守山上憶良臣、妻子の傷を悲感しみ、志を述べて此歌を作めりと云へり、

無名歌六首

三八七〇　紫の粉滷の海に潛く鳥珠潛き出ば吾が玉にせむ

右の歌一首

三八七二　吾が門の榎の實守り喫む百千鳥千鳥は來れど君ぞ來まさぬ

三八七三　吾が門に千鳥數鳴く起きよ起きよ我が一夜妻人に知らゆな

右の歌二首

三八七一　角島の迫門の稚海藻は人の共疎かりしかど吾が共は和海藻

右の歌一首

三八七四　所射鹿を繋ぐ河邊の若草の身の若かえにさ宿し兒らはも

右の歌一首

三八七五　琴酒を押垂小野ゆ、出づる水弱くは出でず、寒水の心も潔に、思ほゆる人音の少き、道に逢はぬかも、少きよ道に逢はさば、いろ著せる背笠小笠、吾が頸懸る珠の七條、取替へも申さむものを、少きよ道に逢はぬかも

右の歌一首

豐前國の白水郎が歌一首

三八七六　豐國の企玖の池なる菱の梢を摘むとや妹が御袖沾れけむ

豐前國の白水郎が歌一首

三八七七　紅に染めてし衣雨降りて艶ひはすとも移ろはめやも

能登國の歌三首

三八七八　梯立の熊來の水底泥に、新羅斧墜し入れわし、懸けて懸けて勿泣かしそね、浮き出づるやと見むわし

右の歌一首は、傳云けらく、或愚人斧の海底に墜ちて、鑑沉きて浮ばざる理を解らざりしかば聊か此歌を口吟みて喩せりき、

三八七九　梯立の熊來酒屋に、眞罵らる奴わし、誘ひ立て率て來なましを、眞罵らる奴わし

右一首

三八八〇　加島嶺の机の島の、小螺をい拾ひ持來て、石以ち啄き屠り、早川に洗ひ濯ぎ、辛鹽にこゝと揉み、高杯に盛り机に立てゝ、母に奉りつや女つ兒の刀自、父に獻りつや、御女つ兒の刀自

越中國の歌四首

三八八一　大野路は繁道の森徑繁くとも君し通はゞ徑は廣けむ

三八八二　滝溪の二上山に鷲ぞ子產と云ふ翳にも君が御爲に鷲ぞ子生と云ふ

三八八三　伊夜彦自然神さび青雲の棚引く日すら小雨そぼ降る

三八八四　伊夜彦の神の麓に今日らもか鹿の伏せるらむ皮服著て角附けながら

乞食者の詠二首

三八八五　愛子汝夫の君、居り居りて某處にい行くと、韓國の虎云ふ神を、生捕りに八頭取り持ち來、その皮を疊に刺し、八重疊平群の山に、四月と五月の間に、藥獵仕ふる時に、足引の此片

山に、二つ立つ櫟が本に、梓弓八つ手挾み、比米鏑八つ手挾み、鹿待つと吾が居る時に、さ男鹿の來立ち嘆かく、頓に吾は死ぬべし、大君に吾は仕へむ、吾が角は御笠の縁し、吾が耳は御墨の壺、吾が目らは眞澄の鏡、吾が爪は御弓の弓弭、吾が毛らは御筆の縁し、吾が皮は御箱の皮に、吾が肉は御鱠縁し、吾が肝も御鱠縁し、吾がみぎは御鹽の縁し、老い果てぬ吾が身一つに、七重花咲く八重花咲くと、白し賞さね、白し賞さね

右の歌一首は鹿の爲に痛を述べて作めり、

三八六　押照るや難波の小江に、廬作り隱りて居る、葦蟹を大君召すと、何爲むに吾を召すらめや、明けく吾は知る事を、歌人と吾を召すらめや、笛吹と吾を召すらめや、琴彈と吾を召すらめや、彼も此も命受けむと、今日今日と飛鳥に到り、置かねども置勿に到り、策かねども都久野に到り、東の中門ゆ、參納り來て命受くれば、馬にこそ絆掛くもの、牛にこそ鼻縄貫くれ、足引の此片山の、百榆を五百枝剝ぎ垂り、天光るや日の氣に干し、轉づるや柄碓に舂き、庭に立つ磴子に舂き、押照るや難波の小江の、初垂鹽を辛く垂り來て、陶人の作れる瓶を、今日往きて明日取持ち來、吾が目らに鹽漆り給ひ、時賞すも、時賞すも、

右の歌一首は蟹の爲に痛を述べて作めり、

怕物の歌三首

三八七　天なるや神樂良の小野に茅草刈り草刈り最中に鶉を立つも

三八八　奥つ國領す君が彩色舟屋形黄彩色の屋形神が海門渡る

三八九　人魂の眞青なる君が唯一人逢へりし雨夜は久しく念ほゆ

卷十六　終

卷十七

天平二年庚午冬十一月、太宰帥大伴卿の大納言に任され京に上り給ふ時、陪從人等海路に別れて京に入へり、於是羇旅を悲傷み各所心を陳べて作める歌十首

三八九〇 我が背子を吾が松原よ見渡せば海人少女等玉藻刈る見ゆ

右の一首は三野連石守が詠める

三八九一 荒津の海潮干潮滿ち時はあれど何れの時か吾が戀ひざらむ

三八九二 磯毎に海夫の釣船泊てにけり我が船泊てむ磯の知らなく

三八九三 昨日こそ船出はせしか鯨魚取り比治奇の灘を今日見つるかも

三八九四 淡路島門渡る船の楫間にも吾は忘れず家をしぞ思ふ

三八九五 玉映やす武庫の渡に天傳ふ日の暮れ行けば家をしぞ思ふ

三八九六 家にても漂ふ命浪の上に浮きてし居れば奥處知らずも

三八九七 大海の奥處も知らず行く我を何時來まさむと問ひし兒らはも

三八九八 大船の上にし居れば天雲の方便も知らずうたがた我が兄

三八九九 海少女漁り焚く火のおほゝしく都努の松原思ほゆるかも

右の九首は作者不審姓名

十年七月七日の夜、獨り天漢を仰て、聊か懷を述ぶる歌一首

三九〇〇 織女し船乘すらし眞十鏡清き月夜に雲立ち渡る

右の一首は大伴宿禰家持が詠める

十二年十一月九日、太宰の時の梅の花の歌を追ひて和める新歌六首

三九〇一 み冬過ぎ春は來れど梅の花君にしあらねば折る人も無し

三九〇二 梅の花眞山と繁にありともや斯くのみ君は見れど飽かにせむ

三九〇三 春雨に萠えし柳か梅の花共に後れぬ常の物かも

三九〇四 梅の花何時は折らじと厭はねど咲きの盛は惜しきものなり

三九〇五 遊ぶ日の樂しき庭に梅柳折り挿頭してば思ひ無みかも

三九〇六 御園生の百木の梅の散る花の天に飛び上り雪と降りけむ

右大伴宿禰家持が詠める

十三年二月、三香原の新都を讃むる歌一首幷短歌

三九〇七 山城の久邇の都は、春來れば花咲き撓り、秋來れば黃葉匂ひ、帶ばせる泉の河の、上つ瀨に打橋渡し、淀瀨には浮橋渡し、在り通ひ仕へ奉らむ、萬代までに

反歌

三九〇八　楯並めて泉の河の水脈絶えず仕へ奉らむ大宮所

右、馬寮頭境部宿禰老麿が詠める

四月二日、霍公鳥を詠める歌二首

三九〇九　橘は常花にもが時鳥住むと來鳴かば聞かぬ日なけむ

三九一〇　珠に貫く楝を家に植ゑたらば山時鳥離れず來むかも

右大伴宿禰書持が奈良の宅より兄家持に贈る

四月三日、和ふる歌三首

橙橘初めて咲き霍公鳥翔嚶る、此時候に對りて、詎ぞも志を暢べざらむ、因三首の短歌を作みて

欝結しき緒を散るにこそ、

三九一一　足引の山邊に居れば時鳥木の間立ち漏き鳴かぬ日はなし

三九一二　時鳥何の心ぞ橘の珠貫く月し來鳴き響むる

三九一三　霍公鳥楝の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで

右内舍人大伴宿禰家持が久邇の京より弟書持に報送ふ

霍公鳥を思ふ歌一首　田口朝臣馬長が詠める

三九一四　時鳥今し來鳴かば萬代に語り繼ぐべく思ほゆるかも

右、傳へ云ふ、ある時交遊集宴せり、この日この處に霍公鳥鳴かず、仍りて件の歌を作りて以て思慕の意を陳ぶ、但其宴所幷に年月未だ詳審にするを得ざるなり、

山部宿禰赤人が春鶯を詠める歌一首

三九一五　足引の山谷越えて野高處に今は鳴くらむ鶯の聲

右年月所處、未だ詳審なることを得ず、但聞きし時のままに茲に記し載す、

十六年四月五日、獨り平城の故宅に居て詠める歌六首

三九一六　橘の匂へる香かも時鳥鳴く夜の雨にうつろひぬらむ

三九一七　時鳥夜聲懐し網ささば花は過ぐとも離れずか鳴かむ

三九一八　橘の匂へる園に時鳥鳴くと人告ぐ網ささましを

三九一九　青丹吉奈良の都は舊りぬれど舊知時鳥鳴かずあらなくに

三九二〇　鶉鳴き古しと人は思へれど花橘の匂ふ此の宿

三九二一　杜若衣に摺り附け丈夫のきそひ獵する月は來にけり

右大伴宿禰家持が詠める

十八年正月、白雪多く零り地に積むこと數寸也、時に左大臣橘卿、大納言藤原豐成朝臣と諸王諸臣

等とを率て太上天皇（元明天皇）の御在所（中宮西院）に參入り供奉りて雪を拂ふ、於是詔して大臣參議并に諸王をば大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫等をば南の細殿に侍はしめて、賜酒ひて肆宴す、勅曰く、汝諸王卿等、聊か此の雪を賦みて各々其歌を奏せと宣り給へり、

左大臣橘宿禰の詔を應はる歌一首

三九二　降る雪の白髮までに大君に仕へ奉れば貴くもあるか

紀朝臣清人が詔を應はる歌一首

三九三　天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか

紀朝臣男梶が詔を應はる歌一首

三九四　山の峽其處とも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れゝば

葛井連諸會が詔を應はる歌一首

三九五　新しき年の始に豐の年表すとならし雪の降れるは

大伴宿禰家持が詔を應はる歌一首

三九六　大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも

藤原豐成朝臣、巨勢奈底麿朝臣、大伴牛養宿禰、藤原仲麿呂朝臣、三原王、智努王、船王、邑知王、小田王、林王、穗積朝臣老、小治田朝臣諸人、小野朝臣綱手、高橋朝臣國足、太朝臣德太

理、高丘連河内、秦忌寸朝元、楢原造東人、

右の件の王卿等、詔を應はりて詠める歌、次の依奏せりき、登時其歌の漏失しをば記さず、但秦忌寸朝元は、左大臣橘卿の謔れて曰く、歌を賦み堪へずば罰を以ちて贖へと宣り給へり、此に因りて默だりき、

大伴宿禰家持、天平十八年閏七月越中國守に任けられ、即ち七月に任所に赴く、時に姑大伴坂上郎女が家持に贈れる歌二首

三九七　草枕旅行く君を幸くあれと齋瓮据ゑつ吾が床の邊に

三九八　今の如戀しく君が思ほえば如何にかもせむ爲る術の無さ

更越中國に贈る歌二首

三九九　旅に去にし君しも續ぎて夢に見ゆ吾が片戀の繁ければかも

三九〇　越路の中國つ御神は旅行も爲知らぬ君を惠み賜はな

平群氏女郎が越中守大伴宿禰家持に贈れる歌十二首

三九一　君に依り吾が名は既に立田山絶えたる戀の繁き頃かも

三九二　須磨人の海邊常去らず燒く鹽の辛き戀をも吾はするかも

三九三　在々りて後も逢はむと思へこそ露の命も繼ぎつゝ渡れ

三九三四　中々に死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし

三九三五　隱沼の下ゆ戀ひ餘り白浪の著く出でぬ人の知るべく

三九三六　草枕旅に屢斯くのみや君を遣りつゝ我が戀ひ居らむ

三九三七　草枕旅去にし君が歸り來む月日を知らむ術の知らなく

三九三八　斯くのみや吾が戀ひ居らむ烏玉の夜の紐だに解き放けずして

三九三九　里近く君が成りなば戀ひめやともとな思ひし吾ぞ悔しき

三九四〇　萬代と心は解けて我が背子が拊みしを見つゝ忍びかねつも

三九四一　鶯の鳴く深谷に打投入て燒けは死ぬとも君をし待たむ

三九四二　松の花花數にしも我が背子が思へらなくにもとな咲きつゝ

右件の十二首の歌は時々便使に寄せて來贈す、一度に送る所にあるに非ざる也、

八月七日夜、守大伴宿禰家持が館に集ひて宴する歌

三九四三　秋の田の穗向見がてり我が背子が總手折りける女郎花かも

右の一首は守大伴宿禰家持が詠める

三九四四　女郎花咲きたる野邊を行き廻り君を思ひ出徘徊り來ぬ

三九四五　秋の夜は曉寒し白妙の妹が衣手着むよしもがも

三九四六　時鳥鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬ爲方もあらなくに

右の三首は掾大伴宿禰池主が詠める

三九四七　今朝の朝開秋風寒し遠つ人雁が來鳴かむ時近みかも

三九四八　天離る鄙に月歷ぬ然れども結ひてし紐を解きも開けなくに

右の二首は守大伴宿禰家持が詠める

三九四九　天離る鄙に在る我を暫時も紐も解き放けず思ほすらめや

右の一首は掾大伴宿禰池主

三九五〇　家にして結ひてし紐を解き放けず思ふ心を誰か知らむも

右の一首は守大伴宿禰家持が詠める

三九五一　晩蟬の鳴きぬる時は女郎花咲きたる野邊を行きつゝ見べし

右の一首は大目秦忌寸八千島

古歌一首

大原高安眞人の作、年月審ならず、但聞く時のままに茲に記し載す、

三九五二　妹が家に伊久理の森の藤の花今來む春も常斯くし見む

右の一首、傳へ誦むは僧玄勝なり

三九五三 雁がねは使に來むと騒ぐらむ秋風寒み其河の邊に

三九五四 馬並めていざ打ち行かな遊渓の清き磯廻に寄する浪見に

右の二首は守大伴宿禰家持

三九五五 烏玉の夜は更けぬらし玉櫛笥二上山に月傾きぬ

右の一首は史生土師宿禰道良

大目秦忌寸八千島が館にて宴する歌一首

三九五六 奈呉の海士の釣する船は今こそは船枻打ちて喧て榜ぎ出め

右館の客室は、居ながら蒼海を望む、仍りて主人八千島此歌を作れるなり、

長逝れる弟を哀傷しむ歌一首幷短歌

三九五七 天離る鄙治めにと、大君の任の隨意に、出でゝ來し吾を送ると、青丹吉奈良山過ぎて、泉河清き河原に、馬駐め別れし時に、眞幸くて吾歸り來む、平けく齋ひて待てと、語らひて來し日の極、玉桙の道をた遠み、山川の隔りてあれば、戀しけく日長きものを、見まく欲り思ふ間に、玉梓の使の來れば、嬉しみと吾が待ち問ふに、妖言の狂言とかも、愛しきよし汝弟の命、何しかも時しはあらむを、旗薄穂に出る秋の、萩の花匂へる宿を、言斯人爲性、好愛花草花樹、而多植於寢院之庭、故謂之花薫庭也朝庭に出で立ちならし、夕庭に蹈み平げず、佐保のうちの里を行き

過ぎ佐保山火葬、故謂之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑一足引の山の木末に、白雲に立ち棚引くと、吾に告げつる

三九五八 眞幸くと言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞けば悲しも

三九五九 斯からむと豫て知りせば越の海の荒磯の浪も見せましものを

右天平十八年秋九月二十五日、越中守大伴宿禰家持が、遙に弟の喪を聞き感傷みて詠めるなり、

相聞歌二首

三九六〇 庭に降る雪は千重重く然のみに思ひて君を吾が待たなくに

三九六一 白浪の寄する磯回を榜ぐ船の楫取る間なく思ほへし君

右、天平十八年八月、掾大伴宿禰池主が大帳使に附きて京師に赴向き、同年十一月本の任に還到れり、仍詩酒之宴して彈琴飲樂せり、是日白雪忽降りて地に積むこと尺餘なりき、復漁夫の船海に入り瀾に浮ぶ、爰に守大伴宿禰家持が二眺を見て聊か所心を裁ぶ、

十九年春二月二十日、忽ち瓱疾に沉み殆臨泉路とす、仍謌詞を作みて悲緒を申ぶる一首幷短歌

三九六一 大君の任の隨意に、丈夫の心振興し、足引の山坂越えて、天放る鄙に降り來、息だにも未だ休めず、年月も幾何もあらぬに、虛蟬の世の人なれば、打靡き床に反倒し、痛けくし日に日に益る、垂乳根の母の命の、大船の動搖動搖に、下戀に何時かも來むと、待たすらむ

情不樂しく、愛しきよし妻の命も、明來れば門に倚り立ち、衣手を折返しつゝ、夕來れば床打拂ひ、射干玉の黑髮敷きて、何時しかと嘆かすらむぞ、妹も兄も若き兒等は、遠近に騷ぎ泣くらむ、玉桙の道をた遠み、間使も遣るよしも無し、思ほしき言傳て遣らず、戀ふるにし情は燃えぬ、たまきはる命惜しけど、爲む術の方便を不知に、斯くしてや荒夫すらに、嘆き臥せらむ

三九六三　世の中は命數なきものか春花の散りの紛亂に死ぬべき思へば

三九六四　山川の窮極を遠み愛しきよし妹を相見ず斯くや嘆かむ

右越中國守の館にて病に臥し悲傷みて聊か此歌を作めり、

二十年二月二十九日、守大伴宿禰家持が掾大伴宿禰池主に贈れる悲歌二首

忽ち瓸疾に沈み累旬痛苦す、百神を禱恃て且消損を得れども、由身體疼み羸れ筋力怯軟くして未だ謝を展るに堪へず、係戀彌深し、方今春の朝春の花、春の苑に流馥ひ、春の暮春の鶯、春の林に囀聲く、此節候に對り琴樽翫びつべし、乘興の感ありと雖も、策杖の勞に耐へず、獨り惟幄の裏に臥して聊か寸分の歌を作みて輕しく机下に奉り玉頤を犯解す、其詞に曰く

三九六五　春の花今は盛に匂ふらむ折りて挿頭さむ手力もがも

三九六六　鶯の鳴き散らすらむ春の花何時しか君と手折り挿頭さむ

天平二十年二月廿九日　大伴宿禰家持

三月二日、掾大伴宿禰池主が、守大伴宿禰家持に報贈ふる歌二首

忽ち芳音を辱くす、翰苑雲を凌ぎ、兼て倭詩を垂はる、詞林錦を舒べ、以吟以詠能く戀緒を鏤す、春の朝和氣固より樂しむ可く、春の暮の風景最も怜れむ可し、紅桃灼々として戲蝶花を囘りて儛ひ、翠柳依々として嬌鶯葉に隱れて歌ふ、樂しき哉、淡交席を促して意を得て言を忘る、樂矣美矣、幽襟賞しむに足れり、豈慮りきやや、蘭蕙聚を隔てて、琴罇用ふること無からむとは、空しく令節を過さば物色人を輕らむ乎、怨むる所此に在り、然も默止すること能はず、俗語に云ふ、藤を以て錦に續ぐと云へり、聊か談笑に擬する耳、

三九六七　山峽に咲ける櫻を唯一日君に見せてば何をか思はむ

三九六八　鶯の來鳴く山吹暫時も君が手觸れず花散らめやも

姑洗二日　掾大伴宿禰池主

三月三日、守大伴宿禰家持が更に贈れる歌一首并短歌

含弘の德、恩を蓬體に垂れ、不貲の思陋心に報へ慰めしむ、來眷を載荷す、喩る所に堪ふること無し、但稚時を以て遊藝の庭に涉らず、橫翰の藻自ら彫蟲に乏し、幼年未だ山柿の門に逕らず、戴歌の趣、詞を聚林に失ふ、爰に藤を以て錦に續ぐと云ふ言を辱くす、更に石を將て瓊に同くする詠を題す、固是俗愚懷辭默止する能はず、仍て數行を棒げ式て嗤咲に酬ふ、其詞に曰く

三九六九　大君の任の隨意に、級離る越を治めに、出でゝ來し丈夫吾すら、世の中の常しなければ、

打靡き床に反倒し、痛けくの日に日に増せば、悲しけく此處に思ひ出、苛なけく其處に思ひ出、歎く心安けくなくに、思ふ心苦しきものを、足引の山來隔りて、玉桙の道の遠けば、間使も遣るよしも無み、思ほしき言も通はず、靈剋命惜しけど、爲む術の方便を不知に、籠り居て思ひ歎かひ、慰むる心は無しに、春花の咲ける盛に、思ふ達手折り挿頭さず、春の野の茂み飛び漏く、鶯の聲だに聞かず、少女等が春菜摘ますと、紅の赤裳の裾の、春雨に匂ひ沾ちて、通ふらむ時の盛を、徒に過ぐし遣りつれ、偲ばせる君が心を、麗しみ此の終夜に、寐も寢ずに今日も終らに、戀ひつゝぞ居る

三九七〇　足引の山櫻花一目だに君とし見てば吾戀ひめやも

三九七一　山吹の茂み飛び漏く鶯の聲を聞くらむ君は羨しも

三九七二　出で立たむ力を無みと籠り居て君に戀ふるに心神もなし

三月三日　大伴宿禰家持

晩春三日、遊覽する七言の詩一首并序

上巳の名辰、暮春の麗景、桃花瞼を照して以て紅を分つ、柳の色苔を含みて綠を競ふ、時に手を携へて曠く江河の畔を望り、詩を訪ひて迥に野客の家に過ぐ、既にして琴罇性を得、蘭契光を和ぐ、嗟乎今日恨むる所は德星已少歟、若し寂含の章を扣へざらば、何を以て逍遙の趣を攄べむ、忽ち短筆に課せて聊か四韻を勒すと云爾、

餘春媚日宜二怜賞一、上巳風光足二覽遊一、柳陌臨レ江縟二茲服一、桃源通レ海泛二仙舟一、雲罍酌レ桂三清漢一、羽爵催レ人九曲流、縱醉陶心忘二彼我一、酩酊無二處不一二淹留一

三月四日　大伴宿禰池主

掾大伴宿禰池主が報贈ふる歌二首并短歌

昨日短懷を述べ、今朝耳目を汙す、更に賜書を承はり且不次を奉る、死罪死罪、謹み言す、下賤を遺れず頻に德音を惠む、英雲星氣、逸調人に過ぎたり、智水仁山既に琳瑯の光彩を韞み、潘江陸海自ら詩書の廊廟に坐り、思を非常に騁せ、情を有理に託け、七歩に章を成し、數篇紙に滿つ、巧に愁人の重患を遣り、能く戀者の積思を除く、山柿の歌泉此に比ぶるに蔑きが如し、彫龍の筆海粲然として看ることを得たり、方に僕の幸あることを知りぬ、敬て和ふる歌、其詞に云ふ、

三九七三　大君の命恐み、足引の山野障らず、天放る鄙も治むる、丈夫や何か物思ふ、青丹吉奈良路來通ふ、玉梓の使絶えめや、籠り戀ひ息衝き渡り、下思に歎かふ我が兄、古ゆ言ひ繼ぎ來らく、世の中は數なきものぞ、慰むる事もあらむと、里人の吾に告ぐらく、山傍には櫻花散り、容鳥の間無く屢鳴く、春の野に堇を摘むと、白妙の袖折り返し、紅の赤裳裾引き、少女等は思ひ亂れて、君待つと心戀ひすなり、心懷しいざ見に行かな、事はたな知れ

三九七四　山吹は日に日に咲きぬ愛しと我が思ふ君は重々思ほゆ

三九七五　我が兄子に戀ひ術なかり葦垣の外に歎息かふ吾し悲しも

三月五日　大伴宿禰池主

守大伴宿禰家持が更報ふる詩一首幷短歌

昨暮使を來る幸也、以て晩春遊覽の詩を垂れ、今朝信を累ぬ辱也、以て相招望野の歌を貺はる、一たび玉藻を看て稍欝結を寫し、二たび秀句を吟ひて已に愁緒を鐫く、此眺翫に非ざれば孰か能く心を暢べむ、但惟下僕稟性彫り難く、閣神瑩くこと靡し、翰を握りては毫を腐し、研に對へば渦を忘る、終日因流して綴れども能はず、所謂文章の天骨習へども得ず、豈字を探り韻を勒して、雅篇に叶和するに堪へむ哉、抑も鄙里の小兒に聞く、古の人言酬いざるは無しと、聊か拙詠を裁し敬て解咲に擬す、如今言を賦し韻を勒し、斯の雅作の篇に同くす、豈石を將て瓊に同くし、聲遊走曲を唱ふるに殊ならむ歟、抑も小兒の濫詔に讐ふ、敬て葉端に寫し式て亂に擬す、曰く

七言一首

抄春餘日媚景麗、初巳和風拂自輕、來燕銜レ泥賀宇入、鶯鴻引レ蘆迴越レ瀛、聞君嘯侶新流レ曲、謔飲催レ觴泛三河清一、雖レ欲三追二尋此良宴一、還知染襲脚跡町

短歌　二首

三九七六　咲けりとも知らずしあらば默もあらむ此の山吹を見せつゝもとな

三九七七　葦垣の外にも君が倚り立たし戀ひけれこそは夢に見えけれ

三月五日　大伴宿禰家持が病み臥りて作める

戀緒を述ぶる歌一首幷短歌

三九七八　妹も吾も心は同じ、副へれど彌懐しく、相見れば常初花に、情ぐし眠ぐしもなしに、愛しけやし吾が奥妻、大君の命恐み、足引の山越え野行き、天放る鄙治めにと、別れ來し其の日の極み、荒璞の年往き返り、春花の移ろふまでに、相見ねば甚も術なみ、敷妙の袖返しつゝ、宿る夜闕ちず夢には見れど、現にし直にあらねば、戀しけく千重に積りぬ、近くあらば立返にだにも、打行きて妹が手枕、指交へて寢ても來ましを、玉桙の道間遠く、關さへに隔りてあれこそ、縱しゑやし爲方はあらむぞ、霍公鳥來鳴かむ月に、何時しかも早く成りなむ、卯の花の匂へる山を、外のみも振放け見つゝ、淡海路にい行き乘り立ち、青丹吉奈良の我家に、鶏鳥の裏歎しつゝ、下戀に思ひうちぶれ、門に立ち夕占問ひつゝ、吾を待つと寢すらむ妹を、逢ひて早見む

三九七九　荒璞の年返るまで相見ねば心も萎ぬに思ほゆるかも

三九八〇　烏玉の夢にはもとな相見れど直にあらねば戀ひ息まずけり

三九八一　足引の山來隔りて遠けども心し行けば夢に見えけり

三九八二　春花の移ろふまでに相見ねば月日數みつゝ妹待つらむぞ

右三月二十日夜裏、忽兮戀情を起して作める、大伴宿禰家持

立夏四月既く累日經て由霍公鳥の喧を聞かず、因恨みて作める歌二首

三九八三 足引の山も近きを時鳥月立つまでに何か來鳴かぬ

三九八四 玉に貫く花橘を乏しみし此の我が里に來鳴かずあるらし

霍公鳥は立夏の日必ず來鳴きぬ、又越中の風土橘希なり、此に因りて大伴宿禰家持が懷を感發けて聊か此歌を裁めり（三月二十九日）

二上山の賦一首 此山は射水郡に在り

三九八五 射水川い行き廻れる、玉匣二上山は、春花の咲ける盛時に、秋の葉の匂へる時に、出で立ちて振放け見れば、神故や許多貴き、山故や見が欲しからむ、皇神の裾廻の山の、澁溪の埼の荒磯に、朝和に寄する白波、夕和に滿ち來る潮の、彌増しに絶ゆること無く、古ゆ今の現在に、斯くしこそ見る人毎に、懸けて偲ばめ

三九八六 澁溪の埼の荒磯に寄する波彌頻々に古思ほゆ

三九八七 玉匣二上山に鳴く鳥の聲の戀しき時は來にけり

右三月三十日、興に付けて作める、大伴宿禰家持

四月十六日夜裏、遙に霍公鳥の喧を聞きて懷を述ぶる歌一首

三九八八 射干玉の月に向ひて霍公鳥鳴く音遙けし里遠みかも

右大伴宿禰家持が詠める

大目泰忌寸八千島の館にて、守大伴宿禰家持を餞する宴の歌二首

三九八九 奈呉の海の沖つ白浪重々に思ほえむかも立別れなば

三九九〇 吾兄子は玉にもがもな手に纏きて見つゝ行かむを置きて往かば惜し

右守大伴宿禰家持が正税帳を以て京師に入らむとす、仍此歌を詠みて聊か相別の歎を陳ぶ 四月二十日

布勢水海に遊覽べる賦一首并短歌 此海者在二射水郡舊江村一也

三九九一 物部の八十伴の緒の、思ふ達心遣らむと、馬並めて彼此觸の、白波の荒磯に寄する、澁溪の埼徘徊り、松田江の長濱過ぎて、宇奈比川清き瀬毎に、鵜河立ち右往き左往き、見つれども其も飽かにと、布勢の海に舟浮け据ゑて、沖邊榜ぎ邊に榜ぎ見れば、渚には味鳧群騷ぎ、島廻には木末花咲き、許多も見の清けきか、玉匣二上山に、延ふ蔦の行きは別れず、在り通ひいや毎年に、思ふ達斯くし遊ばむ、今も見るごと

三九九二 布勢の海の沖つ白浪在り通ひいや毎年に見つゝ偲ばむ

右守大伴宿禰家持が詠める 四月二十四日

布勢の水海に遊覽へる賦に敬和す一首并一絶

三九九三 藤波は咲きて散りにき、卯の花は今ぞ盛と、足引の山にも野にも、霍公鳥鳴きし響めば、

打靡く心も萎ぬに、其をしも心戀しみと、思ふどち馬打群れて、携はり出で立ち見れば、射水河港の洲鳥、朝和に潟に求食し、潮滿てば妻呼び交はす、ともしきに見つゝ過ぎ行き、澁溪の荒磯の埼に、沖つ波寄せ來る玉藻、片寄に藻に製り、妹がため手に纏き持ちて、心細し布勢の水海に、海士舟に眞楫榜貫き、白妙の袖振り返し、率ひて我が榜ぎ行けば、乎布の埼花散り亂ひ、渚には葦鴨騷ぎ、細波立ちても居ても、榜ぎ廻り見れども飽かず、秋さらば黃葉の時に、春さらば花の盛に、兎も角も君が任意と、斯くしこそ見も明らめめ、絕ゆる日あらめや

三九九四 白波の寄せ來る玉藻世の間も續ぎて見に來む清き濱傍を

右掾大伴宿禰池主が作める四日廿六日追和

四月二十六日、掾大伴宿禰池主が館にて稅帳使守大伴宿禰家持を餞する宴の歌并古歌四首

三九九五 玉桙の道に出で立ち別れなば見ぬ日さ數多み戀しけむかも

右の一首は大伴宿禰家持が詠める

三九九六 吾兄子が本國へ在しなば時鳥鳴かむ五月は不樂しけむかも

右の一首は介內藏忌寸繩麿が詠める

三九九七 吾無しと莫侘び吾が兄子時鳥鳴かむ五月は玉を貫かさね

右の一首は守大伴宿禰家持が和ふ

石川朝臣水通が橘の歌一首

三九九八 我が宿の花橘を花籠めに玉にぞ吾が貫く待たば苦しみ

右の一首傳へ誦むは主人大伴宿禰池主云爾

守大伴宿禰家持が館にて飲宴の歌一首四月二十六日

三九九九 京方に立つ日近づく飽くまでに相見て行かな戀ふる日多けむ

立山の賦一首并短歌此山者在二新河郡一也

四〇〇〇 天放る鄙に名懸す、越の中國內盡、山はしも繁にあれども、川はしも多に逝けども、皇神の主宰き坐す、新河のその立山に、常夏に雪降り敷きて、帶ばせる可多加比河の、清き瀨に朝夕毎に、立つ霧の思ひ過ぎめや、在り通ひ彌毎年に、外のみも振放け見つゝ、萬代の語ひ草と、未だ見ぬ人にも告げむ、音のみも名のみも聞きて、羨しぶる爲

四〇〇一 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神隨ならし

四〇〇二 可多加比の河の瀨清く行く水の絕ゆることなく在り通ひ見む

四月二十七日、大伴宿禰家持が作める

立山の賦に敬和す一首并二絕

四〇〇三 朝日さし背向に見ゆる、神ながら御名に負はせる、白雲の千重を押別け、天そゝり高き立山、冬夏と分くこともなく、白妙に雪は降り置きて、古ゆ在り來にければ、凝しかも巖の神さび、たまきはる幾代經にけむ、立ちて居て見れども奇し、峯高み谷を深みと、落ち激つ清き河内に、朝去らず霧たち渡り、夕されば雲居棚引き、雲居なす心も萎ぬに、立つ霧の思ひ過さず、行く水の音も清けく、萬代に云ひ續ぎ行かむ、河し絶えずは

四〇〇四 立山に降り置ける雪の常夏に消ずて渡るは神ながらとぞ

四〇〇五 落ち激つ可多加比河の絶えぬ如今見る人も止まず通はむ

右掾大伴宿禰池主が和ふ四月廿八日

京に入らむこと漸近く悲みの情撥ひ難くて懷を述ぶる歌一首幷一絶

四〇〇六 搔數ふ二上山に、神さびて立てる栂の木、幹も枝も同じ常磐に、愛しきよし我が兄の君を、朝去らず遇ひて言問ひ、夕されば手携はりて、射水河清き河内に、出で立ちて我が立ち見れば、東風甚くし吹けば、湊には白浪高み、妻呼ぶと洲鳥は騷ぐ、葦刈ると海人の小舟は、入江漕ぐ楫の音高し、其をしも奇にともしみ、偲びつゝ遊ぶ盛を、天皇の食國なれば、御言持ち立ち別れなば、後れたる君はあれども、玉鉾の道行く我は、白雲の棚引く山を、岩根踏み越え隔りなば、戀しけく月日の長けむぞ、其思へば心し痛し、時鳥聲に合貫く、玉にもが手に纏き持ちて、朝夕に見つゝ行かむを、置きて行かば惜し

四〇〇七 吾が兄子は玉にもがもな時鳥聲に合貫き手に纏きて行かむ

右大伴宿禰家持が掾大伴宿禰池主に贈る四月卅日

忽ち京に入り懷を述ぶるの作を見、生ながら別るゝ悲兮腸を斷つこと萬回、怨緒禁き難し、聊か所心を奉ずる一首幷二絶

四〇〇八 青丹吉奈良を來離れ、天放る鄙にはあれど、吾が兄子を見つゝし居れば、思ひ遣る事もありしを、大君の命かしこみ、食國の事執り持ちて、若草の脚帶手裝り、群鳥の朝立ち去なば、後れたる吾や悲しき、旅に行く君かも戀ひむ、思ふ心安くあらねば、歎かくを止めもかねて、見渡せば卯の花山の、時鳥哭のみし泣かゆ、朝霧の亂るゝ心、言に出でゝ言はばゆゆしみ、礪波山たむけの神に、幣奉り吾が請祈まく、愛しけやし君が風聞を眞幸くも在り徘徊り、月立たば時も易さず、撫子が花の盛に、相見しめとぞ

四〇〇九 玉鉾の道の神たち幣はせむ吾が思ふ君をなつかしみせよ

四〇一〇 心戀ひし吾が兄の君は撫子が花にもがもな朝々見む

右大伴宿禰池主が報贈和歌五月二日

放逸せる鶯を思ひ夢に見て感悅び詠める歌一首幷短歌

四〇二一　大君の遠の朝廷と、み雪降る越と名に負へる、天放る鄙にしあれば、山高み河遠白し、野を廣み草こそ茂き、鮎走る夏の盛と、島つ鳥鵜養が伴は、行く河の清き瀬毎に、篝照し漂ひ上る、露霜の秋に至れば、野も多に鳥群集けりと、丈夫の伴誘ひて、鷹はしも數多あれども、屋形尾の吾が大黒に（大黒は蒼鷹の名なり）白塗の鈴取り附けて、朝狩に五百つ鳥立て、夕狩に千鳥踏み立て、追ふ毎に免すことなく、手放れも還來もか易き、これを除きて又は在り難し、指竝べる鷹は無けむと、心には思ひ誇りて、笑ひつゝ渡る間に、狂れたる醜つ翁の、言だにも吾には告げず、棚曇り雨の降る日を、鳥狩すと名のみを告りて、三島野を背向に見つゝ、二上の山飛び越えて、雲隱り翔り去にきと、歸り來て咳れ告ぐれ、招く由の其に無ければ、言ふ術の方便を不知に、心には火さへ燃えつゝ、思ひ戀ひ息衝き餘り、けだしくも逢ふことありやと、足引の彼面此面に、鳥網張り守部を居ゑて、千早振る神の社に、照る鏡倭文に取り添へ、請祈みて吾が待つ時に、少女等が夢に告ぐらく、汝が戀ふる其の秀つ鷹は、松田江の濱行き暮らし、鯛漁る氷見の江過ぎて、多胡の島飛び徘徊り、葦鴨の多集く舊江に一昨日も昨日も有りつ、近くあらば今二日許、遠くあらば七日の内は、過ぎめやも來なむ吾が兄子、懇にな戀ひそよとぞ、夢に告げつる

四〇二二　屋形尾の鷹を手に据ゑ三島野に獵らぬ日數多く月ぞ經にける

四〇二三　二上の彼面此面に網さして吾が待つ鷹を夢に告げつも

四〇二四　松反り强言にてあれかもさ山田の翁が其日に求め逢はずけむ

四〇二五　情には慢ぶことなく須加の山悅樂なくのみや戀ひ渡りなむ

右射水郡古江村にて蒼鷹を取り獲たり、形容美麗くて雉を鷙ること群に秀でたり、於時養吏山田史君麿、調試節を失ひ野獵候に乖く、風に搏るの翅高く翔り雲に匿る、腐鼠の餌呼び留むるに驗無し、於是羅網を張設けて非常を窺ひ、神祇に奉幣して虞らざるを恃む、是に夢裏に娘子あり、喩して曰く、使君苦念を作して空に精神を費すこと忽れ、逸放せる彼の鷹獲り得むこと未幾けむ哉、須臾ありて覺寤して懷に悅びて、因て恨を却すの歌を作り、式て感信を旌す、守大伴宿禰家持九月二十六日作也

高市連黑人が歌一首年月未審

四〇二六　婦負の野の薄押し靡べ降る雪に宿借る今日し悲しく思ほゆ

右、此歌を傳へ誦むは三國眞人五百國なり、

二十一年春正月二十九日詠める歌

四〇二七　東風越俗語東風をあいたく吹くらし奈呉の海士の釣する小舟漕ぎ隱る見ゆ

四〇二八　港風寒く吹くらし奈呉の江に妻呼び交はし鶴多に鳴く

四〇二九　天放る鄙とも著く許多も繁き戀かも和ぐる日もなく

四〇三〇　越の海の信濃濱の名の濱を行き暮らし長き春日も忘れて思へや

右の四首は大伴宿禰家持

礪波郡雄神の河邊にて詠める歌一首

四〇三一　雄神河紅艶ふ少女等し葦附水松の類採ると瀬に立たすらし

婦負郡にて鵜坂河を渡る時詠める歌一首

四〇三二　鵜坂河渡る瀬多み此の吾が馬の足搔の水に衣沾れにけり

潛鵜人を見て詠める歌一首

四〇三三　婦負川の早き瀬毎に篝照し八十伴の緒は鵜河立ちけり

新河郡にて延槻河を渡る時詠める歌一首

四〇三四　立山の雪し消らしも延槻の河の渡瀬鐙浸かすも

氣多大神宮に赴參るに海邊を行く時詠める歌一首

四〇三五　之乎路から直越え來れば羽咋の海朝和したり船楫もがも

能登郡にて香島津より發船して、熊來村を指して往く時詠める歌二首

四〇三六　鳥總立て船木伐ると言ふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ

四〇三七　香島より熊來を指して榜ぐ船の楫取る間なく京師し思ほゆ

鳳至郡にて饒石河を渡る時詠める歌一首

四〇三八　妹に逢はず久しくなりぬ饒石河清き瀬毎に水占合へてな

珠洲郡より發船して太沼郡に還る時、長濱灣に泊てて月光を仰見て詠める歌一首

四〇三九　珠洲の海に朝びらきして榜ぎ來れば長濱の灣に月照りにけり

右の件の歌詞は春出擧に依りて諸郡を巡行る、當時目に屬く所に詠める、大伴宿禰家持

鷽の晩哢を恨む歌一首

四〇三〇　うぐひすは今は鳴かむと片待てば霞棚引き月は經につゝ

造酒歌一首

四〇三一　中臣の太祝詞言ひ祓へ贖ふ命も誰が爲に汝

右大伴宿禰家持が詠める、

卷十七終

卷十八

天平二十一年春三月二十三日、左大臣橘家の使者造酒司令史田邊史福麿を、守大伴宿禰家持が館に饗す、爰に新歌を詠み并便古歌を誦ひて各心緒を述ぶ、

四〇三二 奈呉の海に舟暫し借せ沖に出でゝ波立ち來やと見て歸り來む

四〇三三 波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間無き戀にぞ年は經にける

四〇三四 奈呉の海に潮のはや干ば求食しに出でむと鶴は今ぞ鳴くなる

四〇三五 時鳥厭ふ時なし菖蒲草蔓にせむ日此處ゆ鳴きわたれ

右の四首は田邊史福麿

于時明日布勢の水海に遊覽ばむと期りき、仍懷を述べて各作める歌

四〇三六 如何にせる布勢の浦ぞも許多に君が見せむと我を留むる

右の一首は田邊史福麿

四〇三七 乎敷の埼榜ぎ徘徊り終日に見とも飽くべき浦にあらなくに

右の一首は守大伴宿禰家持

四〇三八 玉匣何時しか明けむ布勢の海の浦を行きつゝ玉藻拾はむ

四〇三九 音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年は經ぬとも

四〇四〇 布勢の浦を行きてし見てば百磯城の大宮人に語り繼ぎてむ

四〇四一 梅の花咲き散る園に我行かむ君が使を片待ちがてら

四〇四二 藤浪の咲き行く見れば時鳥鳴くべき時に近づきにけり

右の五首は田邊史福麿

四〇四三 明日の日の布勢の浦廻の藤浪に蓋し來鳴かず散らしてむかも

右の一首は大伴宿禰家持が和ふ、

前の件十首歌は二十四日の宴に詠める、

二十五日、布勢の水海に往く道中馬上ながら口號二首

四〇四四 濱邊より我が鞭ち行かば海邊より迎へも來ぬか海士の釣舟

四〇四五 沖邊より滿ち來る潮の彌增しに我が思ふ君が御船かも彼

右の二首は大伴宿禰家持

水海に至りて遊覽ぶ時、各懷を述べて詠める歌六首

四〇四六 神さぶる垂姫の埼漕ぎ廻り見れども飽かず如何に我爲む

右の一首は田邊史福麿

四〇四七　垂姫の浦を漕ぎつゝ今日の日は樂しく遊べ言繼ぎにせむ

右の一首は遊行女婦土師

四〇四八　垂姫の浦を漕ぐ舟楫間にも奈良の我家を忘れて思へや

右の一首は大伴宿禰家持

四〇四九　凡にぞ我は思ひし乎不の浦の荒磯の廻見れど飽かずけり

右の一首は田邊史福麿

四〇五〇　めづらしき君が來まさば鳴けといひし山時鳥何か來鳴かぬ

右の一首は掾久米朝臣廣縄

四〇五一　多胡の崎木の晩茂に時鳥來鳴き響まばはた戀ひめやも

右の一首は大伴宿禰家持

前の件八首歌は二十五日作める、

掾久米朝臣廣縄が館にて、田邊史福麿を饗する宴の歌四首

四〇五二　時鳥今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも效あらめやも

右の一首は田邊史福麿

四〇五三　木の暗になりぬるものを時鳥何か來鳴かぬ君に逢へる時

右の一首は久米朝臣廣縄

四〇五四　時鳥此間よ鳴き渡れ燈火を月夜に準へ其影も見む

四〇五五　可敝流廻の道行かむ日は五幡の坂に袖振れ吾をし思はゞ

右の二首は大伴宿禰家持

前の件四首歌は二十六日作める、

太上皇（清足姫天皇也元正天皇）難波宮に御在す時の歌七首

左大臣橘宿禰の歌一首

四〇五六　堀江には玉敷かましを大皇を御船漕がむと豫て知りせば

御製歌一首和

四〇五七　玉敷かず君が悔いて云ふ堀江には玉敷き滿てゝ續ぎて通はむ

右の件の二首歌は御船江より泝りて遊宴する日、左大臣の奏并御製

御製歌一首

四〇五八　橘の殿の橘彌つ代にも朕は忘れじ此の橘を

河内女王の歌一首

四〇五九　橘の下照る庭に殿建てゝ酒宴き坐す我が大皇かも

粟田女王の歌一首

四〇六〇　月待ちて家には行かむ我が挿せる明ら橘月影に見えつゝ

右の件の三首歌は左大臣橘卿の宅に在して、肆宴きこしめす御歌幷奏歌也

四〇六一　堀江より水脈引きしつゝ御船掉す賤男の伴は河の瀬執せ

四〇六二　夏の夜は道不明〳〵し船に乘り河の瀬毎に掉さし上れ

右の件の二首歌は御船綱手引きて江より泝り遊宴せる日作めり、傳誦む人は田邊史福麿なり、後に追ひて和ふる橘の歌二首

四〇六三　常世物此の橘の彌照りに我大皇は今も見る如

四〇六四　大皇は常磐に在さむ橘の殿の橘常照りにして

右の二首は大伴宿禰家持が詠める、

射水郡の驛館の屋柱に題著くる歌一首

四〇六五　朝びらき入江漕ぐなる楫の音のつばら〳〵に我家し思ほゆ

右の一首は山上臣が詠める、名を審らず、或云ふ、憶良大夫の男と云へり、但其正名未詳也、

庭中の牛麥の花を詠める歌一首

四〇七〇　一本の翟麥植ゑし其の心誰に見せむと思ひ初めけむ

右先國師の從僧清見京師に入らむとす、因飲饌を設けて饗宴す、于時主人大伴宿禰家持、此の歌詞を詠みて酒を清見に送れりき、

重作める歌二首

四〇七一　級離る越の君のと斯くしこそ柳蔓き樂しく遊ばめ

右郡司より已下子弟より已上諸人此會に多く集り、因守大伴宿禰家持此歌を詠める也

四〇七二　射干玉の夜渡る月を幾夜經と數みつゝ妹は我待つらむぞ

右此夕月の光遲く流れて和風稍扇ちぬ、卽ち目に屬るゝに因りて聊か此歌を詠めり、

越前國掾大伴宿禰池主が來贈れる歌三首

今月十四日を以て深見村に到來り、彼の北方を望拜し常に芳德を念ふこと何れの日か能く休まむ、兼隣近に以りて忽ち戀緒を增す、加以先の書に云ふ、暮春惜む可し、膝を促すこと未だ期せずと、生別の悲兮夫れ復何をか言はむ、紙に臨みて悽斷、奉狀不備、

一古人の云へらく

四〇七三　月見れば同じ國なり山こそは君が邊を隔てたりけれ

一物に屬きて思を發ふ

四〇七四　櫻花今ぞ盛と人は云へど我は不樂しも君とし在らねば

一所心歌

四〇七五　相思はずあるらむ君を恠しくも嘆き渡るか人の問ふまで

三月十五日　大伴宿禰池主

越中國守大伴宿禰家持が報贈ふる歌四首

一古人云に答ふ

四〇七六　足引の山は無くもが月見れば同じき里を心隔てつ

一物に屬き思を發ぶるに答へ、兼遷任して舊宅の西北隅の櫻樹を詠める

四〇七七　我が兄子が古き垣内の櫻花未だ含めり一目見に來ね

一所心に答ふ、卽ち古人之跡を今日の意に代へたり

四〇七八　戀ふと云ふは淺も名づけたり言ふ術の方便も無きは我が身なりけり

一更屬目

四〇七九　三島野に霞棚引き乍然に昨日も今日も雪は降りつゝ

三月十六日　大伴宿禰家持

四月一日、掾久米朝臣廣縄が舘にて宴せる歌四首

四〇八〇　卯の花の咲く月立ちぬ時鳥來鳴き響めよ含みたりとも

右の一首は守大伴宿禰家持が作める、

四〇八一　二上の山に籠れる時鳥今も鳴かぬか君に聞かせむ

右の一首は遊行女婦土師が作める、

四〇八二　居り明し今夜は飲まむ時鳥明けむあしたは鳴き渡らむぞ

二日は立夏の節に應る、故に之を明旦喧かむとすといふなり、

右の一首は守大伴宿禰家持が作める、

四〇八三　明日よりは繼ぎて聞えむ時鳥一夜の故に戀ひ渡るかも

右の一首は羽咋郡擬主帳能登臣乙美が作める、

姑大伴氏坂上郎女が越中守大伴宿禰家持に來贈れる歌二首

四〇八四　常人の戀ふと云ふよりは餘りにて我は死ぬべくなりにたらずや

四〇八五　片思を馬に太馬に負せ持て越邊に遣らば人該はむかも

越中守大伴宿禰家持が報ふる歌二首

四〇八六　天放る鄙の奴に天人し斯く戀ひせれば生ける驗あり

四〇八七　常の戀未だ止まぬに都より馬にこひ來ば荷ひ堪へむかも

別所レ心一首

四〇八八　曉に名告り鳴くなる時鳥彌めづらしく思ほゆるかも

右四日、使に附けて京師に贈上る、

天平感寶元年五月五日、東大寺の墾地を占むる使僧平榮等を饗する時、守大伴宿禰家持が酒壺に送れる歌一首

四〇八五　燒刀を礪波の關に明日よりは守部遣り副へ君を留めむ

同月九日、諸僚少目秦忌寸石竹の館に會ひて飲宴す、時に主人百合の花蘰三枚を造りて豆器に疊ねおき賓客に捧贈ぐ、各此蘰を詠める歌三首

四〇八六　燈火の光に見ゆる我が蘰小百合の花の笑まはしきかも

右の一首は守大伴宿禰家持

四〇八七　燈火の光に見ゆる小百合花後も逢はむと思ひ初めてき

右の一首は介内藏忌寸繩麿

四〇八八　小百合花後も逢はむと思へこそ今の現時も愛しみすれ

右の一首は大伴宿禰家持和

短歌

幄裏に獨居て霍公鳥の喧を遥に聞きて詠める歌一首幷短歌

四〇八九　高御座天の日嗣と、天皇の神の命の、聞し食す國の眞ほらに、山をしも多に多みと、百鳥の來居て鳴く聲、春されば聞の愛しも、何れをか別きて偲ばむ、卯の花の咲く月立てば、愛しく鳴く時鳥、菖蒲草珠貫くまでに、晝暮らし夜亘し聞けど、聞く毎に心動きて、打嘆きあはれの鳥と、言はぬ時なし

反歌

四〇九〇　往方なくあり渡るとも時鳥鳴きし渡らば斯くや偲ばむ

四〇九一　卯の花の咲くにし鳴けば時鳥彌愛しも名告り鳴くなべ

四〇九二　時鳥甚と嫉けくは橘の花散る時に來鳴き響むる

右の四首は十日大伴宿禰家持が作める、

英遠の浦を行く日作める歌一首

四〇九三　英遠の浦に寄する白波彌增しに起ち重寄せ來東風を疾みかも

右の一首は大伴宿禰家持が作める、

陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首幷短歌

四〇九四　葦原の瑞穗の國を、天降り知らしめしける、天皇の神の命の、御代重ね天の日嗣と、知らし來る君の御代々々、敷き坐せる四方の國には、山河を廣み淳みと、奉る御調寶は、數へ得ず盡しも兼ねつ、然れども吾が大君の、諸人を誘ひ給ひ、善き事を始め給ひて、金かも

樂しけくあらむ、と思ほして下惱ますに、鷄が鳴く　東の國の、陸奥の小田なる山に、金あ
りと奏し賜へれ、御心を明らめ給ひ、天地の神相納受ひ、皇御祖の御靈助けて、遠き代に無
かりし事を、朕が御世に顯はしてあれば、御食國は榮えむものと、神ながら思ほし召して、
武夫の八十伴の緒を、服從への趣けの任に、老人も女童兒も、其が願ふ心足ひに、撫で給
ひ治め給へば、此をしも奇に貴み、嬉しけく愈思ひて、大伴の遠つ神祖の、其名をば大
來目主と、負ひ持ちて仕へし官、海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の邊にこそ
死なめ、顧慮はせじと異立て、丈夫の清き其名を、古よ今の現在に、流さへる祖の子等ぞ、
大伴と佐伯の氏は、人の祖の立つる異立、人の子は祖の名絶たず、大君に奉仕ふものと、
言ひ繼げる言の職ぞ、梓弓手に取り持ちて、劔大刀腰に取り佩き、朝守り夕の守りに、大
君の御門の守護、我を措きて又人はあらじ、と彌立て思ひし增る、大君の御言の幸の聞け
ば貴み

反歌　三首

四〇九五　丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸の聞けば貴み
四〇九六　大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立て人の知るべく
四〇九七　天皇の御代榮えむと東なる陸奥山に金花咲く

天平感寶元年五月十二日、越中國守の館にて大伴宿禰家持が作める、
芳野離宮に幸行さむ時の爲儲作める歌一首幷短歌

四〇九八　高御座天の日嗣と、天の下知らし召しける、天皇の神の命の、畏くも始め給ひて、貴くも
定め給へる、み吉野の此の大宮に、在り通ひ見し給ふらし、武夫の八十伴の緒も、己が負
へる己が名々負ひ、大君の任の隨意に、此の川の絶ゆる事なく、此の山の彌つぎ〳〵に、
斯くしこそ仕へ奉らめ、彌遠永に

反歌

四〇九九　古を思ほすらしも我大君吉野の宮を在り通ひ見す
四一〇〇　武夫の八十氏人も吉野川絶ゆることなく仕へつゝ見む

京の家に贈らむが爲眞珠を願する歌一首幷短歌

四一〇一　珠洲の海士の沖つ御神に、い渡りて潛き採るといふ、鰒珠五百箇もがも、愛しきよし妻の
命の、衣手の別れし時よ、射干玉の夜床片去り、朝寢髮搔きも梳らず、出でゝ來し月日數
みつゝ、歎くらむ心慰に、時鳥來鳴く五月の、菖蒲草花橘に、貫き交へ蘿にせよと、包
みて遣らむ

反歌　四首

四一〇二　白玉を包みて遣らな菖蒲草花橘に合へも貫くがね

四一〇三　沖つ島い行き渡りて潛く云ふ鰒玉もが包みて遣らむ

四一〇四　吾妹子が心慰に遣らむため沖つ島なる白玉もがも

四一〇五　白玉の五百箇集を手に結び遣せむ海士は喜しくもあるか

右五月十四日、大伴宿禰家持が興に依けてよめる、

史生尾張少咋を教喩す歌一首并短歌

七出の例に云ふ

但し一條を犯せらば卽ち出さるべし、七出無くて輒ち棄らば、徒一年半

三不去の例に云ふ

七出を犯すとも棄るべからず、違へらば杖一百、唯惡疾を犯さば棄れ

兩妻の例に云ふ

妻有り更に娶る者、徒一年、女家杖一百、之を離れ

詔書に云ふ

義夫節婦を惣み賜ふ

先件の數條を謹み案ふるに建法の基、化道の源なり、然れば卽ち義夫の道、情別無きに存す、一家同財、豈舊を忘れ新を愛する志有るべしや、所以數行の歌を綴作み、舊を棄つる惑を悔いしむ、

其詞に曰く

四一〇六　大已貴少彦名の、神代より言ひ繼ぎけらく、父母を見れば尊く、妻子見れば愛しく愍し、うつせみの世の理と、斯く樣に言ひけるものを、世の人の立つる辭立、ちさの花咲ける盛に、愛しきよしその妻の兒と、朝宵に笑みゝ笑ますも、打歎き語りけまくは、永久に斯くしもあらめや、天地の神祇事依せて春花の盛もあらむと、待たしけむ時の盛を、離り居て歎かす妹が、何時しかも使の來むと、待たすらむ心不樂しく、南風吹き雪消溢りて、射水河浮ぶ水沫の、緣る邊無み佐夫流その兒に、紐の緒のいつがり合ひて、鳥鳥の二人雙び坐、奈呉の海の沖を深めて、惑はせる君が心の、術も術無さ　佐夫流と言ふは遊行女婦の字なり

反歌三首

四一〇七　青丹吉奈良に在る妹が高々に待つらむ心、然にはあらじか

四一〇八　里人の見る目恥し左夫流兒に惑はす君が宮出後風

四一〇九　紅はうつろふものぞ橡のなれにし衣に猶若かめやも

右五月十五日、守大伴宿禰家持が作める、

先妻夫君の喚使を待たず自ら來る時詠める歌一首

四一一〇　左夫流兒がいつぎし殿に驛鈴掛けぬ早馬下れり里も動響に

同月十七日、大伴宿禰家持が作める、

橘歌一首幷短歌

四二二　懸けまくも奇に恐し、皇神祖の神の大御代に、田道間守常世國に渡り、八矛持ち參川來し云ふ、非時の香の木の實を、恐くも遺し給へれ、國も狹に生ひ立ち榮え、春來れば孫枝萠いつゝ、時鳥鳴く五月には、初花を枝に手折りて、少女等に裏にも遣りみ、白妙の袖にも扱入れ、香細しみ措きて枯らしみ、熟ゆる實は玉に貫きつゝ、手に纏きて見れども飽かず、秋づけば、時雨の雨降り、足引の山の木末は紅に艶ひ散れども、橘の成れる其實は、直照りに彌見が欲しく、み雪降る冬に到れば、霜置けども其葉も枯れず、常磐なす彌榮はえに、然れこそ神の御代より、宜しなべこの橘を、非時の香の木の實と、名附けけらしも

反歌一首

四二三　橘は花にも實にも見つれども彌非時に猶し見が欲し

閏五月二十三日、大伴宿禰家持が作める、

庭中の花を詠て作める歌一首幷短歌

四二三　大君の遠の朝廷と、任き給ふ官の隨意、み雪降る越に下り來、荒玉の年の五年、敷細の手枕纏かず、紐解かず獨寢をすれば、欝悒みと情慰に、瞿麥を宿に蒔き生し、夏の野の小百合引き植ゑて、咲く花を出で見る毎に、瞿麥が其花妻に、小百合花後も逢はむと、慰むる心しなくば、天放る鄙に一日も、在るべくもあれや

反歌二首

四二四　瞿麥が花見る毎に少女等が笑ひの艶姿思ほゆるかも

四二五　小百合花後も逢はむと下延ふる心しなくば今日も經めやも

同閏五月二十六日、大伴宿禰家持が作める、

國掾久米朝臣廣縄天平二十年に朝集使に附きて京に入り、其事畢りて天平感寶元年閏五月二十七日本任に還到る、仍長官の館に設詩酒宴樂飲、於時主人守大伴宿禰家持作歌一首幷短歌

四二六　大君の任の隨意に、執り持ちて仕ふる國の、年の内の事結ね持ち、玉桙の道に出で立ち、岩根蹈み山越え野行き、都邊に參し我が兄を、あら玉の年往き還り、月かさね見ぬ日さ數多み、戀ふる心安くしあらねば、時鳥來鳴く五月の、菖蒲草蓬蘰き、酒宴遊び慰れど、射水河雪消溢りて、逝く水の彌增しにのみ、鶴が鳴く奈呉江の菅の、懇に思ひ結ぼれ歎きつゝ吾が待つ君が、事畢り歸り罷りて、夏の野の小百合の花の、花笑みに莞爾に笑みて、逢はしたる今日を始めて、鏡如す斯くし常見む、面變りせず

反歌二首